.hack//G.U.　魔法少女は黄昏に立ち会う

ヌエマル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
・ｈａｃｋ／／Ｇ・Ｕ・　魔法少女は黄昏に立ち会う

【Ｎコード】
Ｎ０１６２Ｍ

【作者名】
ヌエマル

【あらすじ】
クビア撃破から数ヶ月――。ハセヲの次なる冒険は異世界へ――！
――ＡＩＤＡによって送られた先の異世界で、『死の恐怖』は何を見て、何を得るのか――

序章　『にじり寄る　長旅の　予兆』（前書き）

こんにちは
初めまして
色んな人の小説見て自分も書いてみる気になったヌエマルです。
処女作なのではっきり言って投稿するのもおこがましい内容と象亀の如き更新速度ですが、見て少しでも楽しんで貰えたら幸いです。

序章　『にじり寄る　長旅の　予兆』

それは小さな異変だった

望んだのは遠い記憶

齎されたのは新しい始まり

「……ハアアアア……」

「……コオォォォ……」

「……グウゥゥゥ……」

騎士達の呻きが始まりの合図……

いや、気付いた時にはもう始まっていたのかもしれない……

小さな異変と思っていたのは、俺達だけだったのかもしれない……

その日から、騎士達は

「Ｔｈｅ（ザ）・Ｗｏｒｌｄ（ワールド）」から

消え去った――――――

ハセヲＳＩＤＥ

「はあッ！！」

ザシュッ　ズバァッ

ネットゲーム「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　Ｒ：２」。

ユーザー数総勢１２００万人を超える世界Ｎｏ１シェアの大人気ネットゲーム

その世界のダンジョンで俺、白い錬装士（マルチウェポン）ハセヲこと三崎　亮は今、モンスターと戦っている。

『グアァァァァァ』

「チィッ！」

俺の双剣のコンボを物ともせずに襲い掛かってくる。まあ俺もアレで倒せるとは思っちゃいねぇ……

本番はまだまだこっからだ

『オォォォォォォォ』

―――――Weapon change―――――

「摩天葬掃華！！」

ザンッ　ザシュッ　ズバァ……ン

俺は瞬時に武器を大鎌「万死ヲ刻ム影」に持ち替え、アーツを即座に発動！ハセヲの職業（ジョブ）、錬装士（マルチウェポン）の大きな特徴だ。

アーツを発動させた俺に突っ込んできたモンスターはその攻撃をモロに喰らい、吹き飛ばされる。背後の壁に激突すると同時に、モンスターはＨＰ０、つまりは事切れて、消滅する。

「ふう……」

「よう、お疲れさん♪」

「出来る様になったわね……」

俺の後ろの方でパーティーを組んでいた男女二人のＰＣ、クーンとパイが俺に労いの言葉を掛けてくる。とゆうか……

「お前らも戦闘参加しろよ……。さっきから俺一人でモンスター倒しまくってんだけど？」

「いや～～、これただの戦闘じゃなくてモニタリングだからさ。ハセヲ一人でやんなきゃあんま意味無い訳よ……」

「ＣＣ社は近い内にバージョンアップを考えていてね……ハセヲ、

貴方は八咫様の計らいでその新システムのテストプレイヤーに選ばれたんだから、もっと光栄に思いなさい」

「要するにバグチェックじゃねえか……。俺にしてみりゃ犬に噛まれた気分なんだけど……」

露出の多い服に身を包んだピンクのツインテールの拳術士（グラップラー）の女性、パイの上から目線の発言も軽くかわしてみせる俺。パイの方も気にした様子は無く、俺達はパイについて行く形でダンジョンの奥へと進む。

「クーンも災難だな。システムのモニタリングなんてつまんねー仕事押し付けられて……」

「ハハハwまあ俺はバイトだから当然だし、ギルドメンバーってだけのハセヲと比べりゃまだマシさ。女の子とのスケジュールが重ならなかったのが不幸中の幸いだな♪」

「相変わらずだな……」

「無駄口叩かないでさっさと歩く！」

青髪のポニーテールが特徴的な軟派な銃戦士（スチームガンナー）の青年、クーンとのヒソヒソ話はどうやらパイに筒抜けだった様で、彼女から学校の先生の様な注意が飛んでくる。一応ウィスパー設定だったんだけど……

「ところでよ、さっきのアーツ何？何か『環伐乱絶閃』に似てたんだけど？」

「新システムに移行すると同時にアーツの一部見直しが行われるの

よ。さっきのアーツもそれによる物よ」

「あっそ」

今現在、俺は八咫からの依頼で新システムのクローズドベータ（試験運用）テストに付き合わされている。何でも近い内に「Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ」のバージョンアップが予定されているらしく、このハセヲのＰＣには今、その新システムのベータ版がインストールされている……。ゲーム体験版と言えばまだ聞こえは良いかもだが、まだ試用なだけにバグも多い……ぶっちゃけバイト代請求したい位なんだけど……。

新システムへの移行……たしか「Ｒ：Ｘ」だったけか……未帰還者やクビア、この一年内に色々とんでもねぇ事が立て続けに起きたかんな……ＣＣ社も信用回復に躍起ってトコかよ……

「（っだらね～。会社の汚ぇトコ見え見えじゃねぇか……）」

ＣＣ社上層部の往生際の悪さには反吐が出る……ぶっちゃけ同じＣＣ社の人間にも嫌われる程だ。……それでも「Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ（この世界）」に人が集まるのは何故なのだろうと時々考えちまう……。

会いたい奴に会えるからか、グラフィックが見たいからか、エリアやアリーナで戦いたいからか、単に面白いからか、人によってそれは様々だろう

或いは

「女神がいるから……か……？」

不意に、かつてのクビアとの戦いで一目見た女神の姿が脳裏に蘇る……。彼女は今尚、俺達ＰＣ（人間）を愛してくれていた……。ひょっとしたら、だからこそこの世界に人が集まってくるのかも……。

「（女神って言やぁ……）「ハッセヲ♪」ぐえっ！？」

何か女神関連で思い出しかけた途端にクーンが首に手を回してきた。ネトゲなのに思わず蛙が潰された様な声を出しちまうのはヘビーユーザーの証だろうか……

「な～にパイの方見て『女神』だよぅ♪お前昔あんだけアイツに『オバサン』なんて言っといて今じゃ『女神』ぃ♪そういうのはちゃんと面と向かって言えよ、コノコノ♪」

「はぁ？！んだよヤブヘビな！！そんなんじゃねぇし、パイの方も見てねぇよ！！」

さっきの呟きをクーンに聞かれたのか……迂闊だった、最近コイツのヤブヘビ加減と来れば尋常じゃないんだった……。いくら彼女見つからないからって他人の事情にまで首突っ込もうとすんなよ！

「するってぇと何？アトリちゃんとはどうなるの？」

「話聞けよ！ってか何でそこでアトリが出てくんだよ！？」

俺はうっとおしくなったクーンの腕を払い除け、怒り気味に言う。

「いやだって、今日はハセヲ、アトリちゃんとデートの予定だったんだろ♪」

「ただのエリア散策だっつーの！『激怒する　合わせ鏡の　聖女』ってゆうエリアのな」

「ナヌッ！ソコのエリア、アトリちゃんと二人で……だよな？」

「？いや、エリアレベルも結構高かったし、ちょうど揺光からレベル上げに良いエリア探すの頼まれてたし、アイツも誘おうと……」

「うおっ！ハセヲ！お前命拾いしたなぁ！！そのエリアワード、『R：1』の頃から男の女性関係が浮き彫りになるってジンクスで有名なんだぞ！！ってか女の子の用事纏めて片付けようだなんて、破局の定石だぞオイ！！」

「はあ？」

んなジンクス信じてんのかよ……まあ女性PCに度々声掛けてるクーンなら気にするんだろうけど……そういえば、最初に三爪痕（カイト）の奴をこのエリアに誘おうとしたら、感情を見せないアイツには珍しく、何度も首を大きく横に振ってエリアに行くの拒否してたなぁ……。って！

「そうだよ！最近アイツ等が「ハセヲ！クーン！早く来なさい！」……」

さっき考えてた事を思い出したと同時に大分先に進んでいたパイに呼ばれる俺等野郎二人。出鼻を挫かれ、苦虫を潰した様な顔になる俺だが、この話は後回しにするしか無い様だ……。俺は渋々クーンと共にパイの元に駆け出す。

「たった今、八咫様からメールが届いたわ……」

「あ？何だよ今更？また新システムのテストがどーのこーのじゃ……」

「ＡＩＤＡかもしれないのよ……」

「！詳しく聞かせろよ！」

俺とクーンはさっきまでと打って変わって真剣な面持ちになる。ＡＩＤＡって言えば、ついこの間まで「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」に蔓延ってた奴等じゃねぇか！事件以来、ＡＩＤＡは悪性のものだけ「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」から駆除された筈だが……一体！？

「ちょうどさっき、このエリアの最深部にＡＩＤＡに近いデータが検出されたそうよ。あくまでも近いデータみたいだから、行くまではっきりした事は分からないけど……」

「どういうこった！ＡＩＤＡが何で今更！？」

「わからないわ……。そのＡＩＤＡが悪性かそうでないかも分からないし、そもそもＡＩＤＡであるという確証すらも無い……。八咫様は現地に近い私達に至急調査に向かう様に言われたわ！急ぐわよ、二人とも！」

「もし、そのＡＩＤＡ……みたいな奴が危険だったら？」

クーンが不安げにパイに訊ねるが、俺はそれに割って入る。

「なんだって構やしねぇ……！」

「ハセヲ？」

「ソイツが『Ｔｈｅ（俺達の世界）　Ｗｏｒｌｄ』を壊す様な奴なら迎え撃つ！そうでないならその時考えりゃいい！今はそれでいいだろ！」

「……そうね、八咫様も調査対象に対する判断は現地の私達に一任すると言われていた。今はその対象の確認が先決……」

「……やれやれ、ベータテストのモニタリングがエライ事になって来たな……。ホント、予定被んなくて良かったよ……」

それぞれ口にする言葉は違うが、ここにいる全員は、もうとっくの昔に覚悟が出来ていた。

心を重ねた者達がいる

『Ｔｈｅ（この世界）　Ｗｏｒｌｄ』を守る覚悟を……

だが

これから体験する出来事には、

それだけでは足りなかったのかもしれない――

「……で、最深部まで来た訳なんだが……」

「そのＡＩＤＡは何所に居んだよ？」

ダンジョン最深部への扉を潜り抜けた俺達だが、その時点ではＡＩＤＡらしき物は視認出来なかった。ＡＩＤＡ現象の起こる際に出てくる黒い泡も確認出来ない。これは……。

「……逃げられたか？」

「いえ、それは無いわ！現に今でもこのエリアのＡＩＤＡ反応は消えていないもの」

俺の呟いた疑念をパイが即座に払拭する。しかし、未だにＡＩＤＡらしき物が確認出来ないのも事実だ……。そうこう話しながら歩いている内にもうアイテム神像前だ……。

「……とか何とか話してる内にもう行き止まりだぞ？ＡＩＤＡなんて何所にも……」

「……！？いや、待て！あれは……！？」

クーンの言葉を遮って俺はアイテム神像を見上げながら叫んだ。その俺の視線をクーンとパイが追う。

「なっ！！」

「何、あれは？！」

見上げた先にあるのは、当然ながら最深部に鎮座するアイテム神像。
だが、その神像がおかしかった。

首が無いのだ――――

まるで、最初から無かったかの様に――――綺麗に――――

「ど、どうなってんだ！これがＡＩＤＡ現象なのか？！」

「待って！……このエリアのアイテム神像のデータは正常よ！
あれは何らかの原因でその手前のデータ空間が歪んでるから、向こう側の空間が歪んで見えてるだけ！！つまり……！」

「あの歪みがＡＩＤＡって事か！！」

ええ、とパイは俺の言葉を肯定する。その瞬間から、空間の歪みにはその周りを縁取る様にして――――

ゴポッ　ゴポポッ

「「「！！」」」

黒い泡が現れた――――！

「何だ！？ＡＩＤＡ……なのか！？」

「データ上はね……。でも、明らかにこれまでと様子が違う！！」

「チッ！おいパイ！コイツは『悪性』なのか！？それとも……！？」
俺がパイの方に振り向いたその瞬間、いや、その刹那、ＡＩＤＡは
――――カッ！！
と、一際強く光輝いた――――！
「「ハセヲ！！」」
「え」
強い光は、ＡＩＤＡの最も近くにいたハセヲを巻き込み――――そして、消えていった――――

『ハ長調ラ音』が聞こえた気がした――――

ハセヲＳＩＤＥ　ＥＮＤ

プルルルルッ　プルルルルッ　ガチャ
『はい三崎です。ただいま留守にしております。御用のある方は、発信音の後にメッセージをどうぞ』
ピーーーーーッ
『あ、もしもし亮くん？ごっめ～～ん、母さんも父さんも今日仕事で帰れそうに無いわ……。ゴメンけど、夕食ソッチで済ませてて。お金はいつもの所から勝手にとってね！それじゃ、ホントにゴメンねーーー！』
プツッ　ツーーーーー　ツーーーーー　ツーーーーー

都内のある一件の家の留守番電話が、空虚と化した家内に空しく響く――――

光り続けるパソコンのディスプレイ

机に転がるＨＭＤ

されど、其処に人の影は無い――――

今、三崎　亮は

この世界から

消え去った――――

序章　『にじり寄る　長旅の　予兆』（後書き）

・ｈａｃｋとなのはのクロス小説はもう私で何番煎じか分かりませんが、無い文才絞って頑張ります。長い目で見てくれましたら幸いです。

第1話　『度重なる　飛躍し過ぎな　誤解』（前書き）

遅ればせながら第1話です
待って下さった方々すみません。そしてありがとうございます！
遅れた割りに結構特急で作った感が否めませんが、少しでも楽しんでいって下されば幸いです。

第1話　『度重なる　飛躍し過ぎな　誤解』

“波”に蹂躙されし麦畑に背を向けて
影持つ娘のつぶやける
“きっと、きっと帰るゆえ”
されど、娘は知らざるなり
旅路の果てに待つ真実を
彼女らの地の常しえに喪われしを

エマ・ウィーラント著　『黄昏の碑文』より

ハセヲＳＩＤＥ

「……う……ん」

ゆっくりと重い瞼を開く……。俺の視界が最初に捉えたのは、白――――、清潔感のある、染み一つ無い真っ白な天井だった――――

ココは、――――何処だ――――？

最初に浮かんだ疑問がそれだった。どうやら俺はベッドか何かに仰向けになってるみたいだ。
俺は身体を起こして、その天井と同じ色を基調とした部屋を見渡し、五感から届く情報を分析し始めた。

嗅覚を刺激する薬品特有のキツい臭い
身体を起こした際に聴覚に聞こえてくる布擦れと台が軋む音
柔らかいベッドに敷かれたシーツの感触
視界に入った備え付けの化粧台
そして、その脇に置かれた、立派に生け捕られた花を視界に捉える

「……病院……か……？」

そう結論付けた俺……。今手に入れられる情報から推測するに俺は『病院のベッドで寝ていた』、そう考えるのが妥当だろう……。
次にどうしてこうなったか、俺は確かエリアでＡＩＤＡ（みたいなヤツ）の放った光に包まれて……と、まだ睡魔の抜け切れていない頭で考えてた所で、前髪がチラつく俺の視界に自分の手が入った。

「……あれ？手袋は？」

俺のＰＣのグラフィックの一部たる手袋が無いのだ。しかもよく見ると手だけじゃない……。着ている服もだ……。普段ゲームで目にしている、あのハセヲの白い軽鎧では無く、白い入院着。色位しか共通点の無いこの装備は何だ……。こんな非戦闘向けの装備、『Ｔ

ｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』になんか存在しない。そもそも一体誰が着せたんだ？

目覚めて早々、多過ぎる謎を抱えていた俺だが、

そんな時、あの二人はやって来た――――

ガチャリ

「失礼しま～……おっ！目が覚めたのか！」

「あン？」

「桃子！起きてるよ！」

「まあ！ホラね、すぐに起きたでしょ！私の勘通りよ！」

「お前、勘で美由希に店任せて来たのか？」

上半身を起こした俺を迎えたのは、俺には見覚えの無い成人の男女だった……。

男性の方の第一印象は所謂『精悍な男』だった。顔つきもそうだが、体付きも。武術に詳しくない俺でも服の上から分かる程鍛えられてる。そんな男は、その精悍な顔に爽やかな表情を浮かべて、手にした見舞い品と思わしき花束を机の上に置く。

女性の方は若いイメージが先行する顔立ちと柔らかいイメージが俺には印象的な美人だった。『喫茶　翠屋』と書かれた箱を携えた彼女のその顔は満面の笑みで彩られ、俺を見てくる。正直、心の中で

戸惑ったのは秘密だ……。

「……な、何だよアンタ等……？」

「……あ～～～、警戒は尤もだけど、そんなに堅く構えないでくれ、君。取り敢えず自己紹介だ」

「え、あ、はぁ……」

「僕は高町士郎。この街の駅前で喫茶店をやってる者だ。こっちは妻の桃子」

「ふふ、よろしく♪」

士郎って人はベッドの俺と向かい合う様に椅子を移動させて座り、桃子さんは、さっき士郎さんが置いた花束を花瓶に生け直している。……この二人、何か俺の事を知ってるみてぇなんだけど……俺がこの清潔感あるベッドで寝てたのと関係あんのか？

「一応、君の恩人……って事になるのかな」

「恩人……？」

「アラ？憶えてないの？アナタが海鳴臨海公園で倒れてた所を士郎さんが担いで、ここまで運んで来てくれたのよ。私は居なかったけど」

居なかったのかよ！というツッコミは心の中に仕舞いつつ、俺は桃子さんが放った言葉で浮かんだ疑問を士郎に食い付く様に身を乗り出して訊ねる。

「海鳴臨海公園でって……何処だよそれ！？ってか、ココは何処のサーバーのルートタウンなんだよオイ！？何で俺がそんな所で……！！」

この疑問は、ネットゲーム『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』のプレイヤーならではの疑問だ。病院といった施設はルートタウンには無いし、海鳴臨海公園の『海鳴』という名にも心当たりが無い。もし今の『サーバー』やら『ルートタウン』やらの言葉を知っていれば、まだ他にも理由付けが出来る（ＣＣ社のベータテストとか）。

だが、

「ちょ、ちょっと落ち着いて落ち着いてッ！！えっと、『さーばー』とか『るーとたうん』とかはよく知らないけど、ココは一応、『海鳴市』の海鳴大学病院だよ！君はその近くの公園の林道で行き倒れてたんだよ！顔近いって……」

声を荒げる俺を両手で宥める士郎さんの答えは、俺にとっては絶望的な言の葉だった――――

「貴方、『サーバー』っていうのは料理とかを運ぶ大型のお皿の事よ。翠屋でいつもお料理乗せてるでしょ」

「え、ああ！あれ『サーバー』っていうのか！ずっと『お盆』って覚えてたよ！」

「ヤダもう、貴方ったら♪喫茶店のマスターなんだからちゃんと覚えてよ♪」

「あはは、いやはや、勉強になったよ。やっぱまだまだ経験が足りないなぁ。じゃあ君はひょっとして、何処かの喫茶店で働いてた事があるのかい？」

目の前の夫婦の声も耳に届かず、俺は一人思考の海に沈む……。

どういう事だ？俺はついさっきまで『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』にログインしていた筈が今はこの『海鳴病院』……だったか？のベッドの上に居る。俺の一番真新しい記憶では、ＡＩＤＡに遭遇した時だが、そこから先、どうなったかは覚えていない……ルートタウンを知らない、俺が公園で倒れてた、それに加えてさっきからやけにリアルに働く五感、となると……

「……ねぇ、君？」

「何処の喫茶店で働いてたの？サンサーラ？それともベルトール？」

『ＡＩＤＡサーバー』……そう考えるのが妥当だろう……。あの中ではプレイヤーの精神とＰＣが一体化するからゲーム内の感覚をリアルに感じちまう……。

大方俺はあのＡＩＤＡが作った穴に取り込まれて、その奥のＡＩＤＡサーバーに取り込まれたってトコだろう……。さっきからメニュー画面が開けないのも気になるが、それならこの妙に生々しい感覚も説明出来る。

「……えっと……、どうしたんだい？急に難しい顔して？」

「でもエライわ～♪その歳で接待業だなんて、最近の男の子はそうそう出来ないもの♪」

「いや桃子、まだそうかどうか聞けてないんだが……」

気になるのはこのＡＩＤＡサーバーの見た目がやけにリアルを意識してる……っつーかリアルまんまの光景だって事だ……。俺が前にＡＩＤＡサーバーに取り込まれた時は、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』のミラーサーバーとして、見た目はゲームのグラフィックまんまだった。それに対し、今回は全くの逆。しかも『海鳴市』なんてゆう架空の都市名まで作ってるとは、手が込んでやがるぜ……。

「ねぇ君、聞いてる？あ！そういえば、君の名前聞き忘れてたな！」

「アラ、そういえば！ねぇ君、お名前は何て言うの？」

だが、ＡＩＤＡサーバーとなると外部から連絡取れないから、クーンやパイ達は……って何か考え事するには外野五月蝿くないか？何か子供をあやす様な声も聞こえてくるし……

「ね～君？君～～？」

「おいおい君？桃子が訊いてるんだからちゃんと答えてやってくれ。彼女、一度やり出したら結構頑固なんだから。」

「もうアナタったら、まるで私が人の話を聞かないみたいに……それで……君、お名前は？」

決してその俺を子供扱いした口調には腹が立った訳では無い。決して無い！絶対無いッ！！ただ、真剣に考え事をしていたから他に気を回す余裕が無かったからだ。きっとそうだ。……いや、どっちにしても俺はこの時にマズッた。

「ねぇってば〜〜〜」

「うっせぇな！！今考えてんだからちったぁ黙ってろ！！！」

「「！」」

「……あ……」

癇癪起こしちまったんだ……

「「……」」

痛い沈黙が続き、病室内に気まずい空気が漂う……。

「……あ、えと、すんません、俺……。」

考え事して、八つ当たりって……ガキみてぇな事して……と言って、俺は二人に謝ろうとした。どうやらこのＡＩＤＡサーバー（仮）の

あまりの現実感に呑まれちまってた様だ。ＮＰＣだかＡＩＤＡだかも分かんねぇ（ＰＣじゃないだろう……）目の前の夫婦に反射的に謝っちまった……

繰り返そう……俺は二人に謝ろうとした……謝ろうとした――――つまり俺は……まだ後半部分を言っていない……いや、言う機会を逃した……

何故なら

「……ひょっとして……君？」

「……」

「……記憶が無いのか？」

「……はい？？？」

現実感有り過ぎる目の前の男・士郎さんの口から、現実から９０度脱線した素っ頓狂な言葉が紡がれたからだ……

……

……

……

……

……

いや、無ぇよ！！（記憶）有るけど（その答え）無ぇよ！！！！！

「そ、そうだったの！ごめんなさい、私ったら無神経に……」

「え、あの……ちょ」

桃子さんまで勘違いしてる！さっきまでのポップな雰囲気が失せて気まずくなってる！？！？いやちょっと！！そんな如何にも『悪い事しちゃった』って顔しないで！！寧ろしちゃったの俺だから！！アンタ何も落ち度も無いから！！！

「そうか……、黙っていたのは名前を誤魔化そうとしていたからなのか……そんな事しなくてもちゃんと言ってくれれば……」

「だ、黙ってた……？」

「ああ、桃子が君の名前を何度訊いても反応せず、やっと反応したと思ったら『名前を考えている』……自分の名前を必死に思い出そうとしてたんだな……」

いやいやいやいや、それ飛躍し過ぎ！確かにさっきまでの会話繋げたらそれっぽい内容になるけど、それにしたって記憶喪失は飛び過ぎだってば！！

迂闊だった～～～！！『考えてる』じゃなくて『考え事してる』って言えば良かったぁ～～～！！！何でこんな些細なニュアンスの違いでこんな展開になるんだよ！！！？

後悔しても後の祭り……
今の俺の頭の中にはその言葉が虚しく響いた……
そして、すぐに二次会が始まった……

「う～む、これは専門の人に診て貰うしかないな……」

「！？」

士郎さんは俺の事を心配して言ったんだろうが、これは俺にとってこの上無くマズイ！！
他の人にまで伝わったらココがＡＩＤＡサーバーであってもなくても色々な意味で大変な誤解の波紋が広がっちまう！！！！『色々』と言ってもそこに『良い意味』のモノは一つも無い『色々』な誤解を！！！！

「桃子！急いで担当の先生呼んで来てくれ！！目覚めた子が記憶喪失だって！！」

「は、はい！」

「え、あ、ちょっ！！」

ああ！桃子さんが勇み足で出入り口のドアの方へ……。俺は止めようとベッドから身を乗り出して手を伸ばすが……

「ああ君！今は安静に！！」

士郎さんが俺をベッドに戻そうと素早く俺を制しようと両手を伸ばしてくるが、捕まる訳にはいかない！

「よっ！」

「！」

俺はその動きを見切って素早く身を屈め、ベッドと士郎さんの腕という狭い隙間を潜り抜けた！――――――が、

「あ」

士郎さんの足に引っかかり、そのまま

ゴシャ

「ぶっ！」

――――という音を立てて転んだ……

「あ、あああ！！ごご、ゴメン！仕事柄思わず……！！」

「……ってぇ～～～～……」

ホントに記憶喪失になるかと思った……と心中で思ったのは内緒だ……

鼻の先が熱くなった俺は近くにあった化粧台に手を引っ掛け、ゆっくりと立ち上がる。

そこで俺は新たに目撃した――――

俺の身に降り掛かった更なる謎を――――

「……っっっっっ……ん？」

たった先で目に映ったのは化粧台。真っ先に目に入るのは勿論、その中央の大半を支配するその鏡だ――――

俺は目を疑った――――

ソコに居たのは、赤くなった鼻を押さえたハセヲではなく――――、

「……マジ……かよ……」

赤くなった鼻を押さえた『三崎　亮』だったのだから――――

第1話　『度重なる　飛躍し過ぎな　誤解』（後書き）

ハセヲも士郎も誤解しっぱなしされっぱなしです……
まだハセヲには異世界に来た感がありません。ＡＩＤＡサーバーか何かと思わせました。
実はこの話作る前はフェイトかはやての所に、果てはホームレスになるルートも考えたのですが、結局王道の高町家ルートに落ち着きましたｗｗｗ。
我ながら雑な文章ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

第2話　『決意する　疑心暗鬼の　迷い子』（前書き）

こんにちは
書きたてホヤホヤを投稿するヌエマルです。
更新速度上がんなくてホントすいません

第2話　『決意する　疑心暗鬼の　迷い子』

俺は今、混乱している――――

この余りにも常識外れな非常事態に――――

かつての体験から、俺も非常事態にはちったぁ強くなったつもりでいた――――

だが、どうやらそれは所詮『つもり』でしか無かった様だ――――

何故、『俺』という存在がこの見知らぬ地に両足を下ろしている？――――

何故、『俺』が『ハセヲ』としてでは無く、『三崎　亮』としてここにいる？――――

そして、――――

「先生、この子です！さっきの記憶が無いっていう子は！！」

考えてたら誤解したままの桃子さんを追わなかった俺がいる――――

――――！！

ハセヲＳＩＤＥ

「……どうですか？先生……」

「……検査しました所、彼の身体に外傷らしきモノは確認されませんでしたし、本人の意識もはっきりしている様に脳内にも異常らしきモノは見られませんでした。」

「そ、それって……？」

「彼には此方の幾つかの質問にも答えて貰いました。結果、日常的に目にする物に関する質問には何の迷いも無く答えられるみたいで、それに関する知識は失われていない様ですが、自分に関する質問に対しては殻の様に口を閉ざしてしまい、返答できずにいました。」

「自分の事だけ……」

「外傷が見られない点を見れば、恐らくは『心因性』、ストレス等の心的原因による健忘と思われます。きっと彼の家庭か何かで人に言えない様な出来事、つまりはトラウマがあったのでは無いかと思われますが……」

「そんな……」

俺がベッドに胡坐をかいて座っている病室の外からドア越しにさっきの夫婦と医者先生のそんな大層な会話が聞こえてくる……

聞けば聞くほど誤解がでっかくなっていくのを感じる……同時に俺

の中で罪悪感がムクムクと膨らんでいくのを感じる……参ったな、こんな筈じゃ……

さっきの会話に出てきた『俺に対する質問』……、確かに俺は答えられなかったが、先生達が思っているのとは意味が違う。確かに俺は自分に関する質問には答えられなかったが、それは別に記憶が無いからじゃない

理由は２つ

一つは、「ゲームの世界から来ました」なんて言ったら、記憶喪失者とは違うベクトルで頭に異常を抱えた奴と誤解されかねないから。リアルの住所を言おうとも思ったんだが、『この世界の東京都』が『俺の世界の東京都』と同一じゃないだろうと判断したんだ。『海鳴市』なんていう聞いた事の無い市名がその事を雄弁に物語っている。

もう一つは、この世界がＡＩＤＡサーバーか否か判断しかねているからだ。目の前の奴等もＰＣかＡＩＤＡかすら分からねぇ。そんな相手に素性を明かして良いものか、正直悩んでいたんだ。
そこで俺は今、かつてＡＩＤＡサーバーに取り込まれた時の経験を懸命に思い出しながら、リアルの自分が今何処にいるのか模索している。……だが、どうしてもパソコンの前にいるリアルの『三崎亮』が確認出来ない……。その代わり、その『三崎　亮』の姿を今しがた化粧台の鏡で確認したばかりだ……

結論――――

「ホンッッッットにどうなってんだよ！！！！！」

バンッ！　――――と胡坐をかいた膝へ八つ当たるしか俺には出来なかった……結構痛かった……

前にＡＩＤＡサーバーから脱出した時は、オペレーションフォルダに行って『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』中のプレイヤー達を転送する事でそれを行った訳だが、アン時とは色々と状況が違う。

パイや八咫程のコンピューターのスキルは俺には無いし、そもそもフォルダへの入口すらも俺一人の力じゃ分かる訳無ぇし……

第一――――、

「……現実感有り過ぎなんだよな……」

一番の問題は、やっぱこの世界の異様なリアルさだ……。ネットの中から来た俺だからこそ感じる感覚なんだろうが、とてもネットとは思えない……

手のひらから感じる自分の肌の感触も……

窓から差し込む日の光から来る温もりも……

場所が場所なだけにさっきから鼻を突いてくる薬品特有の臭いも……

ぐ～～～～～～～～っ

「……」

緊張をブチ壊す俺の腹の悲痛の叫び声も……

どれも『碑文』から感じる感覚では無く、まごう事無き『リアルの感覚』だというのが理解（わか）る。

だから――、こんな錯覚かどうかすら分かんねぇ錯覚を抱いちまうんだ――――

――――――――俺は今、『知らない』世界（リアル）に居るのかな？ってよ……

ハハ、馬鹿馬鹿しい考えなのに、そう考えると納得しちまう自分がいる……俺、こんなに妄想ヒドかったっけか？

ちょうどそんな事を考えてたら、

ガチャリ――――、

と、扉が開く音がした。その音に釣られて眼を向けた先にはやはり

というか、さっきの夫婦が入ってくる所だった

「やあ、起きてたんだね……」

「……なんスか？」

俺は可能な限り、平静を装って返答する

「ああ、そんなに警戒しなくても大丈夫だよ、俺達は……」

「してねーッスよ……俺助けてくれたみたいだし……」

……装えなかった様だ……。まぁ元々俺自身、演技派じゃねぇのは分かってたし……それに……ＡＩＤＡの可能性が捨てきれない以上、警戒しておいた方が無難だろう……

俺がそう思っている間、周りの空気も緊迫して来て暫くの沈黙が続く……

「ねぇ君？」

「……うん？」

その沈黙を破ったのは、桃子さんの穏やかな声の……

「この先行く所が無いなら、ウチに来ない？」

「……は？」

あまりにも穏やかじゃない提案だった……

ハセヲＳＩＤＥ　ＥＮＤ

士郎ＳＩＤＥ

俺は、妻・桃子と一緒にあの少年の待つ病室のドアノブに手を掛け、足を踏み入れる――――

そこで彼は、憂鬱な表情を浮かべながら頭を抱えており、ベッドの上で胡坐をかいて座っていた。……大方、記憶を懸命に掘り返していた所なのだろう……。俺達に気付いても顔から憂鬱さが抜けない所を見るに、成果は芳しくなさそうだが……

「やあ、起きてたんだね……」

「……なんスか？」

依然として項垂れる頭を片手で支えたままの少年はぶっきらぼうにそう言った。

「ああ、そんなに警戒しなくても大丈夫だよ、俺達は……」

「してねーッスよ……俺助けてくれたみたいだし……」

……口ではそう言う彼だが、明らかにその半眼となった双眸は警戒心を俺達に訴えてくる……。……こんな眼が出来るなんて……俺が言えた立場じゃないが、一体どんな人生を歩んできたのだろう……

俺は先程医者先生に言われた事を反芻する。

『私が来る前にあの少年は『さーばー』等という単語を言っていた、と仰っていましたね？』

『は、はい……』

『これは明らかに専門用語の類ですね。これは彼がその単語が連想される事に携わっていたという事を表します』

『まあ！ではあの子は本当に喫茶店で働いていたとか！？』

『それはまだわかりません……。ですが、この事から彼が以前の記憶が無いのかという点では、答えはＮｏと断定出来ます。彼は記憶が全く無い訳ではありません』

『そ、そうなんですか……』

『良かった……』

『いえ、話はここからです。記憶が全く無い訳ではありませんが、全て有るとも言い難いんです』

『『えっ！！』』

『名前を聞いていたら、彼は「考えている」と答え、更に自分の姿を鏡で見て驚く……、そして自分の事に関する質問には答えられない……。これらの情報から推測するに彼は『自分自身に関係する記憶』が無いと見受けられますね……』

『そんな事が……』

『質問だけなら彼自身が嘘を言ってる可能性もありますが、前者二つの症状からそうとは考え難い……となると彼は彼自身の素性を忘れる程、自分に対してトラウマがあるのではと……』

くれぐれも彼の素性に関して余計な刺激を与えない様に……そう先生に言われた手前、俺は目の前の少年にどんな話題を持ち掛ければ良いか悩んでしまう……

下手な記憶の追求は逆効果……たったそれだけで口が動かなくなった俺は、数刻前に彼を質問責めにしていた自分を恥じる……

そんな俺が言葉を紡ぐ前に――――

「ねぇ君？」

「……うん？」

妻・桃子が先に口を開いた……

「この先行く所が無いなら、ウチに来ない？」

「……は？」

桃子の提案に少年は開いた口が塞がらないでいる……。おお！ナイスだ桃子！この話題なら彼の身の上を刺激しないだろうし、何よりこれからの彼の為にもなる！

「おお！それは良い考えだ、桃子！」

「でしょ！」

「いや、ちょ……？！」

「君もどうだい？ウチは余裕あるから、君さえ良ければ歓迎するが？」

「いやいやいや、何で開口一番にそんな提案が出るんスか?!確かに（知らない土地だから）他に行く宛なんて無ぇけど、いきなりそんな事言って……そもそも俺は……！」

かなり混乱しているな……まぁ、いきなりこんな提案されたら驚くだろうが、ここは俺が治めないとな！

「大丈夫だ！君は何も心配しなくて良いし、素性も話さなくて良い！（記憶が無いから）他に行く宛が無いなら尚更ウチに来なさい！寝床もコッチで何とかしよう！」

「話聞けよ！！」

「じゃ、これから私の事は『お母さん』、士郎さんの事は『お父さん』って呼んでね♪」

「いやだからさ……」

「よし！じゃあ恭也達にも連絡だ！あと先生にも話つけないと……」

いや～～～、どんな形であれ、家族が増えるって嬉しくてテンション上がるな～～♪

「俺は上がらねぇよ！！」

よし！そうと決まれば善は急げだ！

「決まってねぇから急ぐな！！」

士郎ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ハセヲＳＩＤＥ

「じゃあ私は先生にこの事を話してくるわね！」

「ああ！恭也達には俺から連絡を入れておく！」

「はぁ！？ちょっ、待った！これ以上誤解広げられたら……！！」

ホント取り返しがつかなくなる、そう紡ごうとしても俺の声は届かない……届かない声は無いんじゃなかったのかよ！

ガチャ、バタン――――

桃子さんは誤解を抱えたまま勢い良く病室を出て行ってしまった……。最早俺にはベッドの上で四つん這いになり、これから広がるであろう誤解の渦に鬱々とするしか無かった……

「さてこれから君の家族となる人達と連絡を取りたいから、ちょっと失礼するよ」

そう言って、士郎さんは携帯電話を取り出そうとポケットを探り出す

「……あのさ、さっきから聞いてりゃ君、君って言うけどよ、その呼び方やめて欲しいんだけど……」

「え！ああ、ゴメンゴメン！君、自分の記憶が無いみたいって聞いたから訊かないでいたんだけど、気に入らなかったかな？」

ただ何となく気になった事を呟いた途端、士郎さんは俺の目の前で慌ててみせる。別にそこまで気にはしていないのですぐに「気にすんな」と言うが、代わりに別の事を訊ねる。

「……アンタ、何で俺を引き取るなんて真似すんだよ？」

「え？」

「俺が誰かなんてアンタには分かんねぇし……助けて貰ってこう言うのもなんだけどよ……ここまでする義理はアンタ等には無ぇ筈だろ……？なのにどうして……？」

俺はドンチャン騒ぎで忘れかけていた疑問を士郎さんにぶつける。我ながら、聞き手によっちゃあ失礼な物言いだが、士郎さんは気にする様子も無く、こう言った。

「どうしてって言われても……当たり前の事なんじゃないかな？」

俺は今、かなり間の抜けた顔をしていると思う……。こんな返答、シラバスやガスパー位からしか聞けないと思ってた……

「君は俺達の目の前で倒れてて、それを他に目の当たりにした人がいなかったんだ。そんな状況で……いや、そんな状況でなくても俺は倒れてる君を見て見ぬフリをするなんて出来ない。」

「……」

「助け合いの精神とか打算とか、そういうモンじゃなくて、俺がそうしたいからそうしたんだ……。これ、答えになってるかな？」

「……」

ああ、分かった……。この人、シラバスやガスパーと同じ人種なんだ……。親切が当たり前になってやがる……

ハハ、世界って広いなオイ……

「……プッ！」

「え？何か可笑しかったかい？」

「俺は『君』じゃねぇってw」

「あ！ゴメン！え、とぉ……じゃあ……」

ちょいと意地悪してそれを真に受ける士郎さん……その素振りが面白くって、さっきまで疑心暗鬼になってた自分が馬鹿に思えてくる……

この世界が一体何なのか、今の俺じゃまだ分からない――

けど、目の前のお人好しの言葉が、本気（マジ）だってのは良く分かる――

だから――

この世界の事が分かるまで――

「……ハセヲ」

「え？」

「……俺の名前だ……」

この世界と、付き合ってみるか――

ハセヲＳＩＤＥ　ＥＮＤ

第2話　『決意する　疑心暗鬼の　迷い子』（後書き）

頭がピーピー沸騰してますｗｗｗ
心理描写は難しい……私ではこれが精一杯ｗｗｗ
そして小説家って凄いと実感している私がいます
ではまた次回、お暇でしたら会いましょう！

第3話　『差し込める　薄明の　朝日』（前書き）

という訳で3話目です
前話では間違えて第3話と書いてしまいましたが、修正しました（
^　^；）

第3話　『差し込める　薄明の　朝日』

『世界』とは、多くの物語が生まれ、それを動かす『歯車』達が回り続ける場所――

ココはそんな数ある『世界』の一つ――

夜空に浮かぶ月が海に照らされる街、『海鳴市』――

今ここに、新しい物語が生まれようとしている――

ココ、『高町家』で――！

「あー……あー……マイクテス、マイクテス……」

「……コホン……皆聞こえる～？」

その夫婦はただ今、マイクの音量調整中――

「聞こえるってば母さ～ん。ってゆうか今時スプーン片手にマイクは古いって……」

――というギャグにツッコミを入れる十代前半と思わしき眼鏡の少女

「ハハ……二人とも早く紹介してよ。なのはが待ちきれなくてつまみ食いしてる」

「にゃ！！お、おにいちゃん！！」

十台半ばを迎えた辺りの身体付きの良い少年の一言にその脇で隠れてテーブルの上の御馳走をつまみ食いしていた小さな女の子のツインテールが大きく揺れる

「あはははは……、それじゃ！どうやら皆待ちかねてるみたいだし、前置きはこの位にして、と……」

「皆〜〜！今日は、ここ高町家に新しい家族が増える事になりました！」

マイクを持った手振りでポップな夫妻は司会を演じる

「では紹介しよう！」

たった一つの『歯車』だけで――――

「ハセヲ君！」

物語は変わる――――！

「「高町家へようこそぉ〜〜〜〜〜！！」」

世界は変わる――――！！

パチパチパチパチパチ

「……何で普通に紹介しねぇ？」

そんな主役の第一声……

ハセヲＳＩＤＥ

「……ん……ぅぅ……ん……」

そんな昨日の晩の出来事から一夜明けて……、俺はフカフカした心地良いベッドの上で重い瞼を開ける――

俺は上半身を起こし、未だ覚めない頭を掻きむしっては更に今だに瞼という名のシャッターを降ろそうとする眼を擦る……この起床の通過儀礼は万国共通。この世界じゃ知らねぇけど、リアルみてぇな世界だし無問題と割り切って自己解決……

頭も眼も冴え始めた頃、俺は昨夜、ココ『高町家』の居候としてご厄介になる事となったのを思い出す。その際に部屋として与えられた、この客間のベッドから抜け出て、リビングへ向けてその足を運び出した――

コッ　コッ　コッ
ガチャ

そのドアを開けた時、俺は思わず目の前を手で覆う程の光に戸惑った……これが『高町家』の朝って奴か……

「おっハセヲ、お早う！」

「あっ起きたのね！お早う！」

一足先に起床して、新聞読んでた士郎さんと朝食を作ってた桃子さんが俺に気付いて挨拶……俺もそれに倣って「お早うッス」と一礼して返す。

トントントントン、と桃子さんが軽快に包丁を振るう音――――、リビング一杯に広がる、窓から差し込める眩しい朝日――――、同時にキッチンから立ち込めてくる、これから頂くであろう朝食の匂い――――、

……どれもが元の世界じゃヒキコモリ予備軍（だよな？）の自分とは無縁な光景が広がっていた……そう思うとちょっと情けない……
そんな事を考えながら、俺はテーブルの空いてる椅子に腰掛ける

「夕べはよく眠れたかな？」

「おかげさんで……。こんなに長ぇ睡眠時間摂ったの初めてかもって今思ってますよ……」

「あはは、それは良かった。睡眠は健康に重要な要素だからな！よく食べよく寝ないと背、伸びなくなるぞ！」

「んな大袈裟な……」

「あ！コラコラ、幾ら育ち盛りだからって油断するなよ！ちゃんと育つにはちゃんとした生活が必要不可欠なんだぞ！！」

俺だって昔はな～、等と士郎さんはコッチの事お構い無しに朝っぱらから語るが、俺は今、その士郎さんの熱い語りもそれを聞いてクスクスと笑みを漏らす桃子さんの声も聞こえない、気にならない程周りの光景に新鮮さを覚えている

この世界に来てから、向こうでは（経験出来る筈なのに）未経験の事が連続だ

かく言う昨日の晩の歓迎会も――――

――――

目の前に広がるのは、テーブルを丸々一つ占拠する、作るのに凄い手間を要したと素人目でも分かる程豪勢な御馳走……

家族と思わしき子供達三人からの拍手……
屈託の無い笑顔で俺を迎えるポップな夫妻……

今の俺の心中は、とてもじゃないが一言じゃ言い表せ切れねぇ……
この二人新婚じゃなくて子持ちだったのかよ！？しかも三人！？とか、
こんな御馳走を用意する時間何処にあったんだよ！？とか、
ここまでされたら今更「記憶無いなんて嘘でした♪」なんざ口が顔の反対側まで裂けても言えねぇ！！とか、

……重ねて言うけど、一言じゃ今の心中は言い表せ切れねぇ……

「……え、と……、ハセヲだ……。あ～これから厄介になっけど、宜しく頼むな……」

取り合えず、高いテンションで紹介された手前、俺は軽く自己紹介……。……う～ん、子供達の視線が俺から外れねぇ……
ある者は俺に興味津々という好奇の眼差しで――
ある者は足先から頭の頂まで警戒する様に視線を動かして――
ある者は――

「じ～～～～～～～～～～～～～～～……」

俺の挙動一つ見逃すまいと言わんばかりに凝視して――ご丁寧に「じ～～」なんて効果音付きで……

「ホラホラ皆、自己紹介自己紹介♪」

桃子さんがそう言うと、子供達は気付いた様に大きい順に自己紹介を開始し出す

「長男の高町恭也です。よろしく……」

ペコリと頭を下げて礼儀正しく自己紹介するのは、さっきから警戒の視線を俺に送っている少年、高町恭也……。士郎さん程では無いにしても身体付きからして中々に鍛えている……。素っ気無い紹介だが、頭を下げても視線が外れないのを感じる……。やっぱこの二人って何か武術やってんのか？

「……」

「オイ美由希！」

「……あ、次アタシか……。初めまして！アタシは美由紀、高町美由希！よろしくお願いします！」

さっきから俺に好奇心を前面に出した視線を送っていた少女は高町美由希。自己紹介そっちのけにする程俺をマジマジと見てたら兄貴に小突かれて、気を取り直して明るく自己紹介……

そして――――

「じ～～～～～～～～～～～～～～……」

最後に残ったのは、さっきから俺に二人よりも熱烈な視線を送り続けてるツインテールの女の子……なんだが、さっきから「じ～～～」としか言ってない……

「……よ、よう……」

その視線に戸惑いつつ、俺は片手を上げて軽く声を掛けると

「！」

ビクッ！とその子の身体が頭のツインテールごと飛び跳ね、ピュウッ！！とテーブルの下に隠れてしまう……。……何でだ？

「ホラなのは、自己紹介は？」

「……。」

恭也に宥められたその子はテーブルから顔を出し、恐る恐る自己紹介をする

「……な……なのは、です……。よ、よろしく……」

緊張してるんだな……声が震えてる……。初めて会った時の望を思い出すな……

ま、当然か……家に突然自分の兄貴より年上の奴が転がり込んでくりゃ大抵緊張するモンだ……

「ああ、宜しくな！」

なるべく笑顔で、ギルドショップの店番押し付けられた時の経験を思い出しながら、可能な限り自然な笑顔で女の子、なのはに返すが

「／／／／！！」

顔を真っ赤にして、またしてもピュウッ！！とテーブルの下に潜り

込んでしまう……そんなに笑顔ヒドいか、俺？

「アラアラ、この子ったら照れてるのね♪」

「ハハハ、まあ確かにこの人カッコイイもんね！こりゃ恭ちゃん、ボ～ッとしてちゃ盗られちゃうかもよ～～♪」

「何の話だ美由希！ホラ、出て来いなのは。失礼だろ」

士郎を除く高町家メンバーがなのはって子のフォローに回る一方で、俺は士郎に目をやる……。当の本人はニコやかな表情をして、「大丈夫だ！全て分かっている！」という風なアイコンタクトを俺に送る……分かってるって何を？

「よし！皆自己紹介が終わった所で、そろそろ御馳走を頂くとするか！せっかくの母さんのおもてなしが冷めてしまう！」

ホント何を分かってるんだよ！？……だが、そんな士郎さんの一言に皆「は～～い！」と一斉に向き直り、なのはもテーブルから恐る恐る出てくる

「ホラ、ハセヲ君。主役は真ん中真ん中♪」

「えっ？！ちょ、ちょっと……」

「おっとそうだ！もうこれからは家族なんだから、俺は君を『ハセヲ』って呼ぶからな！宜しくハセヲ！」

俺はさり気無く呼び捨て宣言する士郎さんによってされるがままに席に座らされる……位置関係を簡単に述べれば、俺に続けて座った

士郎さんと桃子さんが両脇を占め、真正面には兄と姉に挟まれたなのはがいる……。御馳走という林の向こうでその子の視線を今だ感じるのは気のせいじゃないみたいだ……
皆が席に着いたのを確認し、この場を取り仕切るのは桃子さんだった――――

「それじゃあ皆――――！」

「「「「「いただきますっ！！」」」」」

「い、ただきます……」

この後は目の前の飯をつつきながら質問の嵐……記憶喪失という設定なので、迂闊な事を話さない様答えていくのは思いの他疲れた……

例えば、
美由希の「何で名前だけ覚えてたの？」という質問には、「懸命に頭掘り返してそれしか思い出せなかった」と方便をつき――――、
恭也の「何で公園で倒れてたんだ？」という質問には、「そこ辺の記憶ははっきりしないし、公園自体覚えてない」と虚実を交えて答え――――、
桃子さんの「好みの女性のタイプは？」という質問には、「それ、記憶喪失者にする質問か？」と半ば呆れ――――、
士郎さんの「ココは女子校近いから選り取り見取りだぞ♪」という

質問には、「もう質問じゃねぇじゃん……」とツッコミを入れる――

ただ一人、なのはだけは俺をチラチラ見て、顔を合わせたら目を逸らすの繰り返しで、会話を交える機会が見つからなかった………

御馳走はコンビニ弁当より断然美味かった…………

――

とまあこんな感じで、昨夜の歓迎会、俺は最初から最後まで、『高町家』に振り回されっぱなしだった訳だ……

閑話休題

士郎さんとの会話に話を戻そう

「所でハセヲ、君はこれからどうするんだ？」

「？ どうするって？」

「オイオイ随分楽観的だな……。君には記憶が無いんだろう？ これから記憶を探さなくて良いのかい？」

「あ」

ヤッベ～～、成り行きとは言え、危うく記憶喪失設定という記憶を喪失する所だったぜ……。ってか、別に楽観的になんかなっちゃいねぇよ！……別の意味で……

「え～～、と……。取り敢えず俺、まだこの街慣れてねぇんで、ブラブラ歩きますよ……。何か見覚えあるトコ探しながら……」

「そうか……、記憶、見つかると良いな……」

スンマセン……、もう見つけてます……

士郎さんの優しい言葉が俺の心に棘となってチクチク刺さる……

「ねぇ、良かったら『翠屋』にも来ない？」

「？『翠屋』？」

先程から朝食の準備をしてて俺達の話を軽く聞き流していたと思ってた桃子さんが会話に加わって来た。ちょうどコップを乗せた盆を運ぼうとしていたので、俺は居候として、急いで席を立って桃子さんの手伝いに向かう

「桃子さん、俺運びますよ！」

「アラありがと♪それと私は『お母さん』って呼んでいいのよ♪」

「いぃ……勘弁してくれよ……」

あんまりこの人と会話してたら俺がこのペースに呑み込まれちまう……。それは桃子さんから盆を受け取るや否や、さっさと持ってってテーブルに人数分のコップを並べる

「それで、『翠屋』って？」

「『翠屋』はウチで営業している、この街の駅前の喫茶店の事だよ。まだ始めたてだから客は少ない方だけど……」

ああ、そういえば病院でもそんな事言ってたような……俺が記憶を辿っていると、その間に桃子さんが口を開く

「私、どうしてもハセヲの言ってた『サーバー』って言葉が気になるの！ひょっとしたら君、どこかのお店で働いてたんじゃないかな？って」

「え〝っ！！」

「ああ成程！僅かな言葉から記憶を探すルートもアリだな！」

「でしょ！それにウチで働いてくれれば私達も凄く助かるの！どうかしら？」

まだそのネタ続いてたのかよ！？っていう俺の心の叫びなど聞こえる筈も無く、高町夫妻は会話を進める

「勿論強制はしないわ。ハセヲは自分の記憶探しを優先してくれて良いし、気が向いた時にお店に来て貰って構わないから。でも働いてくれればちゃんと賃金も払うから、ちょっと考えてみて？」

「あ、はぁ……」

「俺も一日のだいたいはあそこにいるから、何か分からない事があ

ったら訊きに来てくれ」

「ど……どうも……」

俺は遠慮がちにそう言った。ここまでしてくれたら、逆にコッチの気が引けてくる……

「……何か……スンマセン……俺の為に……」

「うん？何言ってるんだい」

「そうそう、私達もう家族なんだから遠慮しなくていいのよ」

屈託の無い笑顔でそう答える二人……ったく、優しくされんのは苦手なんだよ……

「さて、そろそろ恭也達も起きてくる頃だな」

「ええ、ハセヲ！悪いけど皆を起こして来て」

「へ～～い……」

ま、悪い気はしねぇけどよ……

こんな感じで始まった、俺の『日常』という名の『非日常』……

これから何が起こるかは、まだ分からない……

だが、俺はここでも歩き続ける……

『意志ある所に道はある』

そうだろ？……オーヴァン……

第3話　『差し込める　薄明の　朝日』（後書き）

ハセヲは家族と接する事が少なそうなので、腰が引けてますw
無印編の前に挑戦したい事がいくつかあるので、どうか長い目で見守ってて下さい（m―　―m）愚鈍な上に勝手でスイマセン

第４話　『幼き日の　青天の　霹靂』前編（前書き）

という訳で４話目です。
現在は無印編に入る前準備として、なのはとの交流がメインの日常です。
できるだけ短く済ますつもりですが、早くバトルが見たい方々御免なさい……。

第４話　『幼き日の　青天の　霹靂』前編

俺ことハセヲは、この世界に来て初めてまともに地面を踏み歩いた――

雲一つ無いこの蒼天の下に在る――

この『海鳴市』という街を知る為に――

この世界を知る為に――

コッ　コッ　コッ　コッ
トコトコトコトコトコトコ

「……なぁ、なのは？」

「！」

ピュウッ！！と隠れるなのはと共に――？

ハセヲＳＩＤＥ

高町家の居候生活初日――俺の今やるべき事は、この街の『散

策』だ。その為に俺は今、朝食を終えて外出着に着替えている。

――因みに俺の今の服装なんだが、なんと俺がこの世界に来る直前のリアルの格好をしている！

ストライプ模様の上着にジーパン、更には襟にファーの付いたジャンバーを羽織った、今時の若者の服装……リアルじゃジャンバーは椅子の背凭れに掛けてただけだったんだが……？

記憶喪失設定の為に俺は驚かないフリをして「何スかこの服？」と訊いた所、何でも士郎さんが俺を拾った時にも着ていた物らしい。

それを聞いた俺は「フ～ン」と生返事で誤魔化すしか出来なかった……その内心の驚愕を誤魔化すには……

ま、この際それは後で考えるとして――、

幸か不幸か、外は散策にはお誂え向きの晴天に恵まれ、更に今日は皆嬉しい遊んで楽しい、世間一般では休日の第二土曜日らしい。一般的に学生の年齢と言われる１７歳（もうすぐ１８なんだけど……）の俺には何も怪しまれずに行動出来る絶好の日だ。

だが、恭也と美由希が通う『私立風芽丘学園』とかゆう近くの学校には、どうやら土曜にも授業があるらしく、朝食後すぐに登校して行った……まあ俺はココ辺の学生じゃねぇし、何より私服だし、バレねぇバレねぇ……

士郎さんと桃子さんは朝食後、『翠屋』に出発するらしい。二人はそこの店長とパティシエなので、遅れる訳には行かないのだろう、俺は桃子さんの代わりに食器類の片付けを手伝おうとした。が、「ハセヲ君はまだこのウチに慣れてないし、もっと別の事頼みたいからいいわよ」とやんわり断られた

その別の頼み事とは――、

士郎さん曰く、

「君の街の散策になのはを連れて行ってくれないか？」

との事――――、
「なのはももうすぐ小学生だし、この辺りを一人でも歩ける様になって欲しいから♪ハセヲみたいな大っきい人と一緒なら安心しても良さそうだしね♪」
というのは桃子さんの弁――――

――――つまりはそういう事だ……
因みにこの後――――、
「安心ってなんスか？！昨日知り合ったばかりで、俺がなのはを襲わないとも限らねぇのに！」
「アラ、ハセヲはウチのなのはに何かする気？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「…………いえ、単なるモノの例えです……スイマセン……」
「アラ、別に何も怒ってないから謝らなくていいのよ？」

こんなやり取りがあった…………
憤怒の表情より笑顔の方が迫力ある人って、居るトコには居るんだな…………そんな事を考えつつ、何故か志乃を思い出す俺が居た……。
桃子さんが始終笑顔で話す優しい女性である事は、知るのにそう時

間は掛からなかったが、その優しい笑顔がたまに怖いのは今初めて知った……
士郎さんは桃子さんの後ろで「うんうん、君は正しい判断をした」としみじみとした表情で周りを配慮する様な小声で呟いていた気がした……

閑話休題

今、俺となのはは『海鳴市』の街へと繰り出している

林の様に立ち並ぶ高層ビルを遠目に歩く俺達の間には、一緒に歩いているとは言い難い距離がある……
とりあえず前を歩けばなのはがトコトコついて来るのは分かるんだが……

「……なのは？」

「！」

俺が振り返る度に身体をビクゥッ！と震わせては、近くの物影に隠れてしまう……
コミュニュケーションを取ろうにも向こうが取らせてくれないし、街中だからはぐれない様に手を繋ごうにもそれをするには遠過ぎるのだ……
たまに物影から此方の様子を窺おうとして、その穢れ無き瞳とツインテールを覗かせているが、俺が何かアクションを起こすまではずっとそのまま……
かといって、声を掛けても……

「なぁ……」

「！」

と、語るまでも無くこの有様である……

正直――――、

「（……やりづれぇ）」

――――の一言に尽きる……

……やはり、なのはは俺との散歩（つーか散策）には行きたくなかったのか？このままなのはを『翠屋』に連れてって、士郎さん達の所に置いてた方が良いのでは？そんな考えが俺の脳裏を過ぎる……

だが……

「……親の仕事場にその子供放り込むって……どんな責任放棄だよ……」

みっともねぇ、と半ばそう思っていた自分を軽く侮蔑する

きっとなのはは、見ず知らずだった自分にまだ戸惑いを覚えているのだろう……そう思い直した俺は、また前に向き直って歩き出す……なのはも恐らくついて来てるだろう……

――――少し歩いて、太陽の位置が頭の真上に来た後、俺は改めて周りを見渡す……

何時の間にか、海に面した郊外にやって来ていた様だ……
クアーッ　クアーッと、青空を飛ぶカモメ達の鳴き声が聞こえてくる……
地平線まで晴れ渡る蒼天と水平線まで広がる蒼海を眺めて、俺はマク・アヌの夕日の景色を思い出す（夕日にはまだ早過ぎるが……）

俺が初めて『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』にログインした時に訪れた最初の街……、
俺が旅団時代に拠点とした街……、
俺がシラバスやガスパー、アトリ等の多くの仲間と出会った街……、
それから、俺達がアリーナ宮皇（チャンピオン）の戴冠式に必ず通った街……、

あの街は俺にとって、色んな意味で思い出深い場所だ……ついこの世界に来たばかりなのに、ひどく懐かしく感じる……
風によって陸に運ばれてくる潮の香りと小波の音は俺の全身の感覚を優しく撫でる様に刺激してくる……

風は触覚を……
潮の香りは嗅覚を……
波の音は聴覚を……

そのどれもが心地良い……

……
昔の俺だったら、全部一蹴していただろうな……
……自分のあまりにらしくない心持ちにそう思わずにはいられない俺だった……

アトリの言ってた様に立ち止まって風景を見る事等、あの時には考えられなかった……
志乃を未帰還者にした、三爪痕（トライエッジ）を追ってる時には……
そんな俺が、今こうして子供を連れて、『海鳴市』という街をテクテクと歩き、こうやって立ち止まって、潮風を堪能している事実……改めて見ると「俺、変わったな……」と心底思うぜ……

……と、思い出に耽ってたらなのはがほったらかしだ……
そう思って回想にキリをつけ、なのはのいる背後へ振り向く

「なのは……そろそろ昼だし……って……？」

正確には、なのはがいるであろう背後へ……

「……なのは？」

しかし、少女はいなかった……
子供が隠れる様な物影も何も無いこの公道で……
あの可愛らしい茶髪のツインテールが見当たらない……
目の前だけでなく、もっと広い範囲を見渡すが、やはり見当たらない……
つまりは、

はぐれた……

「……ヤベェ」

色んな余裕が無くなった……

迂闊と思っても後の祭り……

第４話　『幼き日の　青天の　霹靂』前編（後書き）

さすがのなのはもいきなり家族以外の青年男子が家に転がり込んできたら驚くかな？と思って書きました。違和感感じた方はゴメンなさい。

恭也達他の高町家の面々に関しては次々回の予定（あくまでも予定）です。

私の独り善がりな駄文で良ければ、暇な時に見に来て下さい。

第5話　『幼き日の　青天の　霹靂』後編（前書き）

遅ればせながら第5話です
幼きなのはの青天の霹靂ともいえる日常の一コマをここに綴ります
上手く伝わるかどうかは別問題……

第5話　『幼き日の　青天の　霹靂』後編

少女は走った――

自分の知る街中で自分の知らない人々が行き交う都会の中を――

少女は望んだ――

暖かな自分の居場所に帰りたいと――

少女は逃げ出した――

見知らぬ男と共に見知らぬ地を歩き渡る不安から――

少女は後悔した――

自分を想う人と心を通わさなかったから

「ハァ……ハァ……ハァ……ハァ……」

小さな少女、なのはは走っていた――

自分なんかよりもずっと、ずっと背の高い人混みの中を――

自分の知らない人しかいない、都会の中の群集という名の雑木林

それは都会ならば、別段珍しくも無い、ありふれた光景だ――

が、そこはまだ幼い彼女の心に恐怖を植えるには十分過ぎた――

「ハァ……ハァ……ハァ……」

なのはは走るのを止め、周囲の確認の為に辺りを見渡す

その小さな肩を上下に揺らしながら息をする様は忙しなく、呼吸から漏れる息切れの声はか細く、され　ど、気に留める者は誰もいない――

誰も彼も、目の前の往来を行く事しかしない……しようとしない

そんなこの街は、今の彼女には大き過ぎた――

「……うぅ……」

未だ年端もいかぬ子供にとって、この街は過酷な環境の山中と同義――

それでも彼女の心が折れず、その双眸が涙を耐えるのは、その首に掛け、両手でギュッと大事に握り締める、小さな財布だった――

これを握る度、彼女の脳裏に今朝の父母との会話が反芻される――

『ハイ、なのは』

『？……これ、おさいふ？』

『そうよ、今日のお昼代。もうすぐなのはも小学生なんだから、お金も自分で使える様にならなきゃね。落としたりしちゃダメよ？』

『……どうして……なのはに……？』

『……なのはももうすぐ小学生だ。お父さんやお母さんの目が届かない所で一人でやらないといけない時がきっと来るだろう……』

『これはそうなった時の為の予行練習♪大丈夫よ、ハセヲ君も一緒なんだから！』

『……』

今、なのはの元には、父・士郎の言葉の通り、親二人の目は届いていない――

更に言えば、先程まで自分が後ろから付いていっていたハセヲの目にも届いていない――

「（……あのおにいちゃん……いないよね……）」

そう、少女はハセヲとはぐれた訳でも道に迷った訳でも無い

彼女は故意にハセヲの元を離れた……つまりは、彼から『逃げ出した』のだ

「……えっと……ミドリヤは……」

なのはは辺りを見渡し、自分の親の居る場所……翠屋を目指す。見つからない様、周りを配慮しながら――――、

あの人(ハセヲ)に見つかれば、何を言われ、何をされるかわからない。自分は今、そうされそうな事をやっている。そんななのはの胸の奥の恐怖と背徳感が彼女の焦燥を掻き立て、その足取りは徐々に速くなっていく――――

「こっち！」

そして少女の逃走は再開される――――

そのパタパタと走る小さな足は、ただ自分の心行く翠屋(ばしょ)を求めていく――――

だが――――、

ドンッ！

「はうっ！！」

「痛テェ！！」

事態は少女の行く手を阻む――――

「うぅ……ごめんなさ「痛ってぇなガキ！何処に目ぇ付けてんだオイ！！」ひっ！！」

「おいおい大丈夫か？」

「あ～あ～よりにもよって俺の大事なスニーカー踏みつけやがって……どうしてくれんだよオイ！」

「え……あ……うぅ……」

少女を阻んだのは、ガラの悪い三人の青年だった。

一人はなのはが直接ぶつかった事でなのはに怒号をぶつけて来る口調の激しい男、

一人はその男を助け起こす小太りな男、

一人は一歩引いた所でそれを見ている、冷静そうな背の高い男、

天下の往来でなのはのぶつかった男はその敵意の篭った怒号で、あろう事か、まだ年端の行かぬなのはに絡んでくる……何が起こったか理解が追いつかないなのはは言葉を濁すが、すぐに自分が『絡まれている』と理解した――――

「あ～あ、しっかり足跡付いてらぁ……こりゃクリーニング出さなきゃな……」

小太りな男がその場に屈み込み、口の悪い男のスニーカーを見て言う

「おいガキィ！」

「は、はいッ！」

気性の荒い青年はなのはに向かって吐き散らす

「お前のせいで俺の新品が台無しだぞ、どうしてくれんだよ！！」

「え、えと……ごめんなさ「謝れなんざ言ってねぇんだよ！！」ひっ！」

「そうだな……慰謝料含めてクリーニング代、３万円寄越せ！」

「え、ええっ！！」

なのはに絡む口の悪い男は、あまりに理不尽な金額を要求してくる
まだ子供のなのはは、自分が絡まれてたら、きっと誰か助けてくれる。これは『相手が悪い』んだから。と、心の中で漠然と思っていた
それが幼子の思考の限界だった――――

「まあ待て待て、こんな小さい子がそんなに払える訳無いだろ。お嬢ちゃん、そんなに持ってないって事はお兄さん達も分かってるからさ、おウチのパパやママから貰って来なよ」

「そ、そんなこと……」

一歩引いた所にいた背の高い男が割って入って来て、しかし飽く迄もその男はなのはに向かって無理な要求を行う

「出来ない？じゃあお兄さん達も一緒行って事情説明してあげるからさ、おウチまで案内してくれない？」

「う……うううぅ……」

なのはが周りをキョロキョロと見渡す一方で、目の前の男は自分勝手に話を進める。
周りの人集りを見渡しても、少女を助ける勇敢な人物は現れない

……

自分達に気付いていないのか、それともそのフリなのか、
どちらにしても、少女が望む様な事が起こる気配は無い……

「まあとりあえず、頭金としてコイツは貰っとくよ」

気性の荒い男はその手をなのはの首にぶら下がった財布に手を伸ばす。なのはのその幼い目には、その手が醜い悪意で凝り固まった様に見えた――――
男が財布をその手に掛けた次の瞬間――――、

「だ、だめぇ～～～～！！」

「うおっ！？」

父と母から大事にしろと言われた財布を守る為、咄嗟にバシッ！！とその醜い手を弾くなのは。そのまま後ろを向いて全速力で走って逃げ出そうとする！が――――、

「おっと！」

「あ！」

小太りな男がその道を阻み、その隙に他の男達もなのはを囲む

「えっ……う……」

怖い――――、怖い――――、怖い――――、
今のなのはの心の中はそんな感情で一杯だった

「あのさ嬢ちゃん、分かんないだろうから教えとくけどよ……」

少女はただ助けを求めた……心の中で叫び続けた……

目の前の男が何か言っているが、今の少女の耳にはどんな言葉も入ってこない……

その心には、助けを求める声しか浮かばない――――

「（助けて、お父さん――――、お母さん――――、お兄ちゃん――――、お姉ちゃん――――！）」

にも関わらず、依然として周りの人は自分を助けてくれない

その時一瞬、ほんの一瞬だが、なのはは自分を疑ってしまった……

誰も自分を助けてくれないのは、自分が『悪い子』だからなのか、そう思ってしまう……

何も悪い事してないのに、自分は悪くないのに、どうして……

そこまで考えて、なのはは一つだけ、それも最近行った『悪い事』に思い当たった……

「人に迷惑かけたら誠意見せる……これ常識だよ？君は僕達に誠意見せてくれないの？」

ハセヲ――――あの人の下から逃げた事だった

彼の事は、ただ単に本能的に怖かった

急に家にやって来た、兄よりも、姉よりも年上の人

見ず知らずの他人がやって来て、幼いなのはが戸惑うのは当然であった――――

更に昨日今日出会ったばかりの自分達で、一緒に出掛けろなんて、考えられなかった

だから、隙を見て逃げ出したんだ……逃げ出して、大好きなお父さんとお母さんの所に帰ろうと――――

でも、そうしたら、今目の前にいる怖い人達に絡まれて……

「ねぇ君……聞いてる？」

ああ、そっか……

本当に怖い人って、こんな人達の事を言うんだ……

あの人――――ハセヲ――――はこんな事を言っていただろうか……

思い浮かぶ彼の言葉は、

なのは、なのは、なのは、

滑稽な事に大抵が自分の名前しか呼んでいない

それに対して自分は咄嗟に身を隠すだけ――――

ああ、私、あの人の事、全然知らないや……知ろうともしてないや……

向こうは一生懸命知ろうとしてたのに、私が勝手に『怖い人』って決め付けて逃げたんだ……

突き放してたんだ……

ああ、私って、『悪い子』だ――――

「おいガキ！黙ってねぇでとっとと金出せって……」

自分に向かって再び男の手が伸びて来る……なのははそれに恐怖を覚えると同時に、心の中で懸命にハセヲに向けて謝っていた――――

ごめんなさい、いつも隠れてごめんなさい――
ごめんなさい、勝手に逃げ出してごめんなさい――
ごめんなさい、何も分かろうとしなくてごめんなさい――
ごめんなさい、ごめんなさい――

謝ります！謝りますから！

「（助けて……！）」

「ウゼェよ……」

バキッ

「うげぇ！！」

男の手がなのはに向かおうとした途端、その手の主は何者かによって蹴り上げられ、顔から地面にダイブしてしまう

「な、何だ！？」

「大丈夫かオイ！？」

他の仲間二人が駆け寄り、その張本人を見遣る

突然の出来事に呆気に取られたなのはもその視線を追っていくと

――――、

「あ！」

「白昼堂々と子供相手にカツアゲしてんじゃねぇよ……」

後ろ姿が目に焼き付いたあの人、ハセヲがいた――――

ハセヲＳＩＤＥ

「白昼堂々と子供相手にカツアゲしてんじゃねぇよ……」

手当たり次第にあちこち捜し回って、やっと見つけたと思ったら……こんな時代遅れなチンピラ共に絡まれてたとはな……

間に合って良かったぜ……俺は心の底からそう思う

「ッテェ～～～！てめぇ何しやがる！！」

さっき蹴り飛ばしたチンピラの１人が起き上がって俺を睨んでくる

「そりゃコッチのセリフだっての……。俺の連れに何難癖つけてんだオイ！」

「あ、何だ？オメェこのガキの兄貴か何かかよ？」

「ん？まあそんなモンだが……」

「ハッ！だったらちょうど良い！代わりにテメェが金払えや！！」

「は？」

「はは、事情を説明するとですね、この子が「ウッセェ、黙れ！」は？」

背の高い男が笑いながら介入してくるが、そんな事はどうでもいい……

俺はなるべく重く、なるべく低く、なるべく怒気の篭った声で――

「子供相手に三人で囲むチンピラの言い分になんざ、聞くだけ無駄なんだよ！」

――そう言い放った！

「何ィ～～～！！上等だ！なら体で分からせてやるよ！」

「やれやれ、なるべく穏便に済ませたかったのに……」

ある者は血の気盛んに、ある者は呆れ気味に三人のチンピラは臨戦態勢に入った

「なのは、下がってろ」

「あ、うん！」

近場にいるなのはに気を配った後、俺自身も臨戦態勢に入る

さて、と……

生憎俺はリアルでの『喧嘩』が未経験って訳じゃねぇんだが、『喧嘩が強い』って言える程の自信は無い。だが、それでも目の前の相手に不思議と恐怖しなかった……

いや、ある意味当たり前かもしれねぇ……『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』でチェーンソーみてぇな剣やドリルみてぇな槍振り回すＰＫ共の様なゴロツキと何度もガチやってたせいか、どうも目の前のリアルの、しかも拳術士（グラップラー）みたく拳当も付けず、素手で丸腰の奴等がしょぼく見えやがる……

「俺らに喧嘩売った事、後悔しろやぁぁぁ～～～～～！！！！」

……ハァ

ハセヲＳＩＤＥ　ＥＮＤ

カチャカチャ

「桃子、大丈夫か？」

「……ええ、大丈夫。ありがと」

なのはが向かっていた場所、ここ『翠屋』では現在ランチタイム。

故に客が普段よりも増え、厨房も大忙しだ。
しかし、そこのパティシエで『翠屋』の華たる高町桃子の顔色は、何故か芳しくない……。

「……やっぱり、なのはが心配か……」

「……当然よ……貴方こそ……」

「……まあ、そうなんだが……」

二人は互いの問いに対して静かに肯定する。
仕事が忙しい中でも、高町夫妻が我が子の身を案じるのは、やはり二人が親であるが故であろう。

「……まあでも、きっと大丈夫だよ。何よりハセヲが付いてる」

「……ええ、そうね。ハセヲはなのはよりお兄ちゃんだし、きっと……」

「それだけじゃないさ」

「え？」

桃子は士郎の言葉に首を傾げる。

「……彼は確かにウチの家族では一番お兄ちゃんだが、何より、俺と似た匂いがするんだ……」

「！……似た匂いって……」

「ああ、纏ってる雰囲気とかが特に……何より、彼の目を見れば、十分信頼出来るよ」

「目？」

「ああ、人というのは目を見ればその人の大抵の人柄は分かる物だ……彼、ハセヲの目は……」

本当に強い者の目だ――――士郎の言葉は、そう続いたという。

ハセヲＳＩＤＥ

「肩慣らしにもなりゃしねぇ……」

歩道の真ん中で仁王立つ俺はそう言い放った。目の前で伸び切ったチンピラ共を見下ろしながら……。

「「「……」」」

もう少し言うなら、もうそれは清々しい位にボロボロのボコボコになったチンピラ共を見下ろしながら……。

冷静に振る舞ってはいるが、俺は自分の喧嘩の強さに驚いている。相手の拳は遅いし、動きのパターンも自然と掴めて、何をするのか手に取る様に分かった。

反面、俺の方は意外な程身体が軽く、まるで『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』にいた頃の様に思い通りに動く……『ＡＩＤＡサーバー』でも

こんな感じだったな……。

だが、そんな事を考えている場合では無いと、すぐにその考えを頭の隅に置き、目の前を見下ろし続ける。

「な、何なんだよ……お前……」

チンピラの一人が声を震わせながら訊いてくる……。

だが、答える必要は無い。

「……せろ」

「へっ？」

「失せろ……！！」

睥睨の眼差しとドスの利いた声で、そう言い放った――――！

「「「ひ……ひいぃぃぃぃ～～～～～～！！！」」」

このたった一言で、チンピラ共は蜘蛛の子散らす様に逃げていく……肝っ玉の小せぇ奴等だぜ……。

さて、と――――

「なのは、大丈夫か？」

俺は振り返って、後ろにいるなのはに声を掛ける。
チンピラ追い返した時の顔や声にならない様に努めながら、なのはの目の前で屈み込む俺だが……、

「……」

「なのは？」

「……う」

「う？」

「うえ～～～～～ん！！ごめんなさいい～～～～～！！」

「は？！おい、ちょ！泣くなよオイ！」

安心したのか、それとも俺の顔が恐かったのか……、なのはは公衆の面前で大声で泣き始めた……ってオイオイオイ！これじゃ俺が泣かせてるみてぇじゃねぇかよ！

「な、なのは、頼むから泣き止めって！！」

「うえ～～～～～ん！！ごめんなさいい～～～～～！！」

「分かったから！！……あ～～くそ！とにかくなのは！ちょっとコッチ来い！」

「うえ～～～～～ん！！」

周囲の視線に耐えられなくなった俺はなのはを抱えて急いでこの

場を離れる……人攫いじゃねぇぞ！こんなあからさまな人攫いなんかいねぇぞ！

「うえ～～～～～ん！！」

俺に抱えられたなのはは移動中もなお俺の腕の中で泣き続ける……頼むから泣き止んでくれ！この先過ごしていくであろうこの街中にまで余計な誤解撒き散らさないでくれ！！

「……落ち着いたか？」

「うぅ……はい、ごめんなさい……」

「もう分かったって……」

俺達があの場を後にして、行き着いた先は『海鳴臨海公園』――――士郎曰く、俺を発見した場所だ――――その一角にあるベンチの上……。

その名の通り、海に面したこの公園は、俺の世界のリアルの公園よりも綺麗だと思う。

見た所、ゴミも少ないし、何より自然物と人工物の割合がバランス取れてる。

やたらカップルやアベック（同じか……）が多いのに目を瞑れば、なかなか良い場所だな。

「ったく……急にいなくなりやがって……そんなに俺といるの、嫌

だったか？」

「う……」

なのはは俺の質問に黙りこくる。カマかけてみたが、図星か……。少しばかりショックだが……まあ、子供には酷な質問だろうな……それに、答えもだいたい分かってたしな……。

「な～に、うん、て言っても別に怒りゃしねぇよ……そうだよな、俺みたいな見ず知らずの他人といきなり一緒にお出掛けなんて普通ビックリするよな……」

「……」

「でもな、だからといってお前のやった事は感心しない。さっきみたいなチンピラ共みたいな奴も世の中にはいる訳だし、さっきの俺みたいにヘルプしてくれる奴も少ない……。ひょっとしたらお前はあの時怪我させられてたかもしれない……」

眉を八の字に曲げて俯きながら、なのはは黙って聞いているので、俺は言葉を続ける……。

「そう思ったらなのは、お前は運が良かった……。怪我する事も無く、こうやって無事ベンチに座って俺と話してんだからよ……。」

行動は軽率だったけどな、と付け足すと、なのはは俯いたままごめんなさい、と力無く呟く……。

「だが、だからこそ俺はなのはの行動に感謝したい……！」

「え？」

さっきまで俯いていたなのはがヒョイと顔を上げる。その目はパチクリと見開き、彼女のその愛らしさが強調されている

「どんな形であれ、こうやってお前とちゃんと話せる機会ができたんだからな……」

結果オーライって奴だ、と俺は付け加える。

本当はできるならもっと別の形が良かったんだが、と言いたい所だが、ここは敢えて言わないでおく……。

俺はベンチから立ち上がって、なのはの前に足を運び、互いの視線が向き合う様に身体を屈める

「なのは……、お前は何でこんな事になった原因が分かるか？」

「……なのはが……にげたから……」

「……ああ、それもあるだろうが、大元の原因はそれじゃない……」

「……？」

頭に疑問符を浮かべるなのは。俺は構わずに言葉を続ける。

「お前が自分の気持ちを言わなかったからだ」

「！」

「人ってのは不思議なモノでな……、言葉で想いを伝えられる事もあればそうでない事もあるし、行動する事でしか伝えられない事や

そうでない事だってある……。たまにどっちも無くても伝えられる事もあるだろうし、伝えたくてもどう表現したら良いかわからねぇ時や伝えても自分が思ってるのと違う風に思われたりする時だってある……」

けどな、と俺は言葉を繋げる。

「最初の内はそれで良いんだよ……。そうやって想いを伝える方法を皆手探りで探してんだ……でないと相手は分かってくれねぇ、分かり合えねぇからな……」

なのはは俯いたまま、ただ黙って俺の説教を聞く……落ち込んでるのか、聞いているのか分からなかった俺は少し趣向を変えてみる事にした……。

「それでなのは、さっきまで喧嘩してた俺は今でも怖いか？」

「え！え……え、と……」

急に話を振られ、戸惑うなのは。そんななのはを俺はそっと宥める。

「怒りゃしねぇよ……思った事言ってみな」

「えと……こわかった……」

「ああ……」

「でも……かっこよかった！」

純粋に思った事を遠慮がちに口にするなのは。だが、嬉しい事を言ってくれるぜ……。

「ありがとよ……言えたじゃねぇか……」

「え？」

「そうやってちゃんと伝えれば良いんだよ……そうすれば、さっきみてぇな目なんかに合わなくて済むだろ？」

「あ！」

……分かったみてぇだな、さっきよりもずっとスッキリした顔だ……。

「言いたい事はちゃんと言え、言ってみろ……まずそこからだ」

時間掛かっても良いからよ……と続ける。

自分でこう言っておきながら何だが、昔の俺ってそうする事も出来なかったんだよな……。

三爪痕（トライエッジ）を追っていた頃の、アトリに強く当たってた頃の俺には……、

自分の焦燥を周りに当たり散らしてた頃の俺には……、

だが、目の前の――――頬を染めて、うんうんと何度も頷くなのは――――この子なら、きっと……

「よし！じゃまずは飯だ！何か食いに行くぞ、ホラ」

そう言って俺はなのはに手を差し伸べる……。

なのははその俺の手を両手でしっかりと握り――――、

「うん！ハセヲおにいちゃん♪」

以前にも呼ばれてた事があったのに、その呼び名は、随分と耳に残る印象だった……。

ハセヲＳＩＤＥ　ＥＮＤ

余談

「あ！」

「？ハセヲおにいちゃん？」

「俺、金無いんだった……」

「……」

「……」

「おにいちゃん、いいたいことはちゃんという！」

「うっ！？」

その日、結局『翠屋』で妥協し、なのはにタカる事となったハセヲだったとさ……。

第5話　『幼き日の　青天の　霹靂』後編（後書き）

こうしてハセヲとなのはの距離は少し縮まりましたというお話でしたちゃんとそうなってますよね？

第6話　『争い治める　天使の　誕生秘話』（前書き）

もうちょっと続く日常編です。
早く無印編に入りたいです……

第６話　『争い治める　天使の　誕生秘話』

例えば、こんな日常――――

ハセヲＳＩＤＥ

「稽古？」

とある晴れた日曜日に士郎さんから持ち掛けられた話題を俺が繰り返し口にする

「ああ、これから恭也達に武術の稽古をつけようと思うんだが、良かったらハセヲもどうだい？」

「？……何で俺まで？」

何故武術の稽古に俺が誘われるのか――――正直、その理由に心当たりの無い俺はぶっきらぼうに訊き返す。だが、士郎さんはそんな俺の態度に気分を害した様子も無く、

「うん……前々から気になっていたんだが、ハセヲ、君は多分武術をやってたんじゃないかと思うんだ……」

すんません、やってません……とは記憶喪失設定の為に口が裂けても言えねぇな……まあ、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』じゃあ双剣やら大剣やら大鎌やらをブンブン振り回してたんだが、生憎とリアルの俺は武術等未経験だ。だがまあ、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』での経

験が活きているのか、多少は良い立ち回りが出来るみたいだという事はこの間の喧嘩で分かっている……

「病院で僕がハセヲを止めようとした時、一瞬でも僕を抜いた時からもしかしてと思ってたんだ……。話によれば、なのはを悪漢から守ってくれたらしいし、どうかな？道場もウチにあるし、こっちのルートからも記憶を探ってみたら？」

アレを覚えてたのにも驚きだが、コイツ今何つった……？ウチに道場がある……？

後から聞いた話だが、何でも高町家の庭には武術鍛錬の為の典型的な道場があるらしい……なんですと？！って思うのは俺だけじゃない筈だ……そういや庭なんて気に留めてもいなかったぜ……

流派の名は『小太刀二刀・御神流』……その仰々しい名前の通り、主に双剣を使った武術とされるだそうだ……恭也や美由希もまだまだ修行中ながら結構出来るらしい……

しかし普通の家庭に道場なんて似つかわしくない物がそこにあるなんて……まあ、高町家そのものも結構立派な御屋敷だし……いや、やめよう。考えたら負けな気がしてきた……

ま、街の散策ばかりってのもつまんねぇし、一応士郎さんが俺の為思っての提案だろうから無碍にも出来ず、暫く使ってなかった双剣のリハビリと思って――――

「……まあ、士郎さんがそう言うなら……」

深く考えもせずにそう答えた……んだけど

バキャ！！

「ぐわッ！！」

「一本、それまで！父さんと勝ち！！」

審判の美由希の声が腹立たしく聞こえる……心技体を鍛える場所だけあってちゃんと清潔にしている道場の床を舐める者ならではの印象だ……

つまり俺は士郎さんにノされた……

「だいじょ～ぶ？ハセヲおにいちゃん？？」

「お、おう……なんとかな……」

見学に来ていたなのはが俺に歩み寄って心配そうに見てくる

あの一件以来、多少信頼を獲得したのか、少しずつだがなのはと話す機会が増えてきている。街の散策に至ってはなのはから積極的に付いて来る様になったし、物影に隠れられる事も無くなった

我ながら良い傾向だと思うんだが――――、

「なのは、前に出たら危ないからコッチに座ってろ。一緒に吹っ飛ばされるぞ」

「あう……おにいちゃん……」

恭也……コッチは悪い傾向だ……。警戒の眼差しは出会った頃よりは大分和らいだと思うんだが……今度は嫉妬の眼差しが強くなった……

まあ、ヒョッコリやって来た居候に自分の妹取られたら、少なくとも良い気分にはならんわな……

なのはを手で制し、自分の元に引き戻す恭也は、此方をこれでもかという程睨んでくるが、いつまでもソレを気にする訳にもいかないので、近くに転がった小太刀程の長さの竹刀を拾って立ち上がり、正面に立つ士郎さんと向き合う

「う〜〜む……ハセヲ」

「は、はい？」

「君はどうにも不思議だね？」

「え？」

脇に自分の竹刀二本を挟んだ士郎さんは首を傾げながら話を続ける

「君は小太刀の持ち方や扱い方はある程度出来てるし、立ち回りも悪くないんだが、攻撃を入れる際の動きにムラがあるね……ちょっと戸惑ってるみたいにギクシャクしてる」

「……というと？」

「小太刀の扱いを『知って』はいるけど、身体は覚えていないって

感じだな、と思ってね……」

なんてこった……俺はこの人を見くびっていた様だ……

確かに俺は双剣の使い方を『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』での経験を通して多少『知って』はいる……しかし、実際に双剣を振るっている訳ではないので、身体は覚えている訳が無いのだ……ボタンの押し方とかなら覚えてるんだが……

まずい……これじゃあ記憶喪失設定に矛盾が生じる……！『知らなくて身体が覚えてる』ってゆうんならまだしも、逆に『知っていて身体が覚えていない』なんて言うのは記憶喪失というには無理がある！！『知っていて』って時点でもう記憶喪失でも何でも無いから――――！

「……もしかして、ハセヲ……」

ヤバイ！向こうも気付いたみてぇだ！此処でバレたら最悪家を追い出されちまう！！

焦った俺は可能な限り脳を高速回転させ、この場を乗り切る弁解の言葉（更なる嘘）を模索する

だが、士郎さんは優秀な戦士だ。それは多少打ち合った俺だからこそ分かる……。そして、それは恐らく向こうも同じ……！

きっと（成り行きとは言え）俺の嘘に感付いた事だろう……焦燥する俺に向けて、士郎さんは言い放った――――、

「小太刀の通信教育か何かをしてたとか？」

……は？

「いやぁ、病院からの話によると、君は『自分以外』の記憶は覚えているみたいだからね……ひょっとしたら、小太刀の扱いも他人の見様見真似って事も有り得るんじゃないかなって思ってさ。通信教育で小太刀は流石にあまり聞かないけど、小太刀の扱いは何処かで見た事あるんじゃないかい？」

なんてこった……俺はこの人を見くびっていた様だ……

ないわー、としか言えない俺がいる……ツッコミ所が多過ぎるんだが、この人何処までお人好しなんだよ！？そもそもこの記憶喪失って嘘自体矛盾だらけなのに本当に気付いてないのかよ？！もし気付いてて目を瞑ってくれてるなら俺は一頻り士郎さんに感謝した後、家出て山奥で羞恥と屈辱から首括るぞ……

まあ、ここはとりあえず、俺にも益がある様に言葉を返す事にする

「……まあ、誰から習ったかとかはちょっと……」

言葉を濁しながら答える俺。……罪悪感に押し潰されそうだ……

そんな折――――

「フン、そんな技で父さんに勝てる訳無いって……」

「きょ、恭ちゃん……」

見学していた恭也が生意気な口を利いてきた……。

「あ？んだと恭也……じゃあテメーはどうなんだよ？」

「おいおい、ハセヲも乗るんじゃない……」

杞憂が過ぎ去って多少冷静になった俺は恭也の言葉にカチンと来て、アイツを睨み返す。

恭也は多少怯む素振りを見せるも、すぐに表情を引き締め、睨み返してくる………

「ふ…フン！お前よりはまだマシさ！」

「へっ！つまりテメーも敵わねぇって事か！！」

「な、何だと！？俺はお前よりも1分は長く持つぞ！！」

「1分持とうが10分持とうが勝てきゃ一緒だっつーのガキ！でけぇ口は俺相手に白星上げてから言いやがれ！！」

「何を！」

「やるか！！」

「「う～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～………！！」」

俺達は互いに番犬の様な呻き声で睨み合う……

「ハ、ハセヲおにいちゃん……こわい」

「恭ちゃん……」

怖がるなのはが近くにいた美由希に寄り添い、一方その美由希は俺達に「大人気無い……」と言わんばかりの視線を送ってくる。だが、今の俺達にはそれを気に留める余裕等無い！睨み合いは視線を先に外したモンの負けだ！！こんな二つ程年下のガキに負けてたまるか……！！

「ハア、やれやれ……そんなに言うなら二人とも試合ってみるか？」

「え？」

「は？」

声を発するタイミングだけ俺と恭也はシンクロした

「え？おとうさん？」

「父さん？！良いの？そんな事言って！！」

女性陣が驚く中、士郎さんは飄々としながら――――

「何、俺も見学者としての視点でハセヲの立ち回りを見てみたいし、恭也もこれを機に違うタイプの相手と闘ってみるのもいいだろうしな（それに男同士の喧嘩というのは闘るだけ闘らせた方が二人の為になる物なんだよ……）」

――――最後の方は声が小さくて聞き取れなかったが、そう言うと、本人はさっさと下がり、俺達に前に出る様に促す……ハッ、上等……！

「で？オメーはどうすんだ恭也？ここまでお膳立てされてて逃げね

ぇよな……？」

「……馬鹿にするな！お前こそ後で後悔するなよ！！」

どうやら、俺等は互いに負けず嫌いみてぇだ……こういうトコだけは気が合うモンだなオイ！

俺は前に出てきた恭也と向かい合い、その構えを頭の頂から足のつま先に至るまで、一挙一動見逃すまいと睨む様に観察する――――先程一手交えた士郎さんと似た様な自然体の構え……ピンと背筋を伸ばした姿勢には隙が無く、順手に持った両手の小太刀の竹刀は地面にその切っ先を向けており、所謂『何があっても対応できる』といった様な構えだ……

対する俺はというと――――一言で言えば『いつもの』姿勢だ……。両手の竹刀は逆手に持ち、姿勢を前屈みに低くして、右手と左手をそれぞれ前後に構えた、言ってみれば『いつでも駆け出せる』構え……

俺が『攻め』を重視した構えなら、恭也は『守り』に重きを置いた構え……対極の位置付けとなる構えを取る俺達は、美由希からの試合開始の合図を静かに待った……

「吠え面かくなよ？」

「ソッチこそ！」

「そ、それじゃあ……コホン……試合、開始！」

睨み合う俺達の迫力に気圧されながらも放たれた彼女の号令と同時

に、俺達は駆け出した――――！

ハセヲＳＩＤＥ　ＥＮＤ

――――数時間後

「貴方～～♪どんな調ｓ“ドス！ドス！”ひっ！！？」

道場に鼻唄交りで入って来た桃子の真横の壁に勢い良く二本の竹刀が飛んで来た。効果音に関してはツッコんではいけない気がしたのか、彼女はなるべくソレを見ない様にして、恐る恐る道場全体を見渡す……

そこには――――、

「ゼェ、ゼェ、ゼェ……」

「ハァ、ハァ、ハァ……」

竹刀を片手に持ち、互いにボロボロになりながら息を切らすハセヲと恭也に――――、

「よしよしよしよし……大丈夫、大丈夫だからね、なのは」

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～……」

怯えきって小さく縮こまったなのはをあやす美由希――――、

「あはは………やあ、桃子………」

そして、「あちゃ～～、マズイ時に来られちゃったな～～」と言わんばかりに苦笑いを浮かべる士郎がいた………

「ゼェ、ゼェ……や、やるじゃねぇか……恭也……」

「ハァ、ハァ……そ、そっちこそ……ハセヲ……」

「え～～っと……とりあえずどういう状況……？」

恐る恐る桃子が士郎に訊いてくる……。士郎は稽古に入ってからの一部始終を掻い摘んで彼女に説明した

「………という訳なんだ……」

「要するに貴方が二人の喧嘩に茶々を入れたせいで余計に拗れて、止めるに止められなくなった訳ね……」

「え！？あ、あははは……、いやでも、そのおかげで二人の間の蟠りも大分とけて……」

「だが、まだまだこっからだぜ……やれるよな！？」

「当然だ……！！お前なんかに……兄貴の座を脅かされてたまるか！！」

バシッ！　ビシッ！　バシッ！

趣旨の異なる二人の竹刀がぶつかり合って、道場内に乾いた音が響き渡る……

「大分……何？」

「あ、ははは……ま、まあまあ殴り合いよりもまだマシだってば……」

バシッ！　ビシッ！　バシッ！　ゴスッ！　バシッ！　ビシッ！

「今鈍い音が聞こえたけど……？」

「あ、あれ？」

ビシッ！　バシッ！　ゴスッ！　バシッ！　ゴスッ！　バシッ！

ビシッ！　バキッ！

「二人とも足を使い始めたわよ……？」

「……“カラン　カラン”ん？」

足元に何かが当たるのを感じた士郎はその当たった物に向けて視線を移す……

ソコにあったのは二本の竹刀……という事は……

バキッ！　ガン！　ゴスッ！　ボコッ！　ゴン！　ドカッ！　ゴキッ！　ドゴッ！　ズガッ！

「オラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

「このこのこのこのこのこのこのこのこの！！」

「とうとう二人とも竹刀捨てたわね……」

「ちょちょちょ、ちょっとちょっと二人とも？！」

とうとう殴り合いに発展した試合は士郎の制止も振り切って続けられた……完全に趣旨を見失って泥沼化してしまっている……

「なのは……大丈夫？」

「うぅ～～～～～～～～……」

なのはは相変わらず、道場の隅で美由希に宥められながら小さくなって怯えている……

「はぁ……全く……」

桃子は大きくため息をつき、とうとう見るに見かねて――――

「「こんのぉ～～～～～～～～～「二人とも？」お？？！」」

――――女神の透き通る様な声が、道場を支配した

「なのはが怖がってるから、程々にしてね？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そして女神は黒いオーラを放出する…………

「も、桃子さん？」

「か、母さん……いつからそこに？」

「返事は？」

ゴゴ

「「はい！すみませんでした！！！」」

二人は素早い身のこなしで土下座を決める……あと関係無いけど士郎も……

「うん♪分ければ宜しい！……アラ、貴方何してるの？」

輝く様な笑顔で頷く女神……黒いオーラも何時の間にか消えていた……

「あ！いや……あはは、それより桃子、何の用だ？」

「あ、そうそう！お昼もう過ぎてるんだけどどうしたの？って訊きに来たのよ♪」

「お！も、もうそんな時間か……よ、よし皆、一旦休憩！」

「「「「は～～～～～～い」」」」

二人の試合（喧嘩？）で先送りになっていた昼食の為、士郎の号令で解散する高町家であった……

「（飯食ったら決着つけるぞ！）」

「（望む所！）」

「二人とも、何か言った？」

ゴゴ……

「「いえ！何でもありません！！！」」

見事にシンクロする血の気の多い野郎二人……

「お前のお袋……実は怖ぇのな……」

「だろ……？」

そして恐怖で結ばれた奇妙な共感（シンパシー）が出来た瞬間であった……

「おかあさん……かっこいい……」

そして、幼子（なのは）は母の背中を見て育つのであったとさ……

第６話　『争い治める　天使の　誕生秘話』（後書き）

こうしてＳＴＳの天使は生まれる訳ですねｗｗｗｗｗ

第7話　『香り立つ　翠の　労働風景』前編（前書き）

内容の薄い第7話です；
なのはって士郎入院以前はどんな生活だったかイマイチわからないので今回はワザと存在をぼかしてます……資料があれば改訂するかもしれません……
はっきりしなくてスミマセン；

第7話　『香り立つ　翠の　労働風景』前編

例えば、こんな日常――――

ハセヲＳＩＤＥ

「店番だぁ？」

とある晴れた平日の朝に桃子さんから持ち掛けられた話題を俺が繰り返し口にする

……あれ？何かデジャヴ……

「そうなの。今日は士郎さんがいないから、店の方が大変で……恭也達も学校だし、他にヘルプに呼べる人がいないから人手が足りないのよ」

「……なあ桃子さんよ、前々から気になってたんだけどよ……」

「？」

「士郎さんって、『翠屋』以外にも仕事してんのか？」

俺がここ『高町家』に居候してから、もう随分経つ……。俺も家族間――――ってのも語弊があるが――――では敬語や遠慮が抜けるのにそんな時間は掛からなかったんだが、どうにも士郎さんがたまに『出張』と言って家を空けるってのは未だ理解しかねる……

桃子さんを始めとする他の高町家の住人はその事について詳しく話

しちゃくれねぇ（なのはは普通に『知らない』と答えてたが……）
そして今、俺がこうやってその話を持ち出しても――――、

「……し、士郎さんは『翠屋』の店長なんだから……他のお店に出張くらい……」

「……『翠屋』って確かウチの自営業だったよな？他の店って何処の……」

「と、とにかく、開店まで時間が無いから、ハセヲも早く支度しなさい！ね！」

「は、はぁ……」

いつもこんな感じではぐらかされる……
桃子さんはいつも士郎さんの『出張』の事になるといつも俺をはぐらかす……他の奴等も似た様な反応だ……
士郎さんに直接問い質してみた事もあったが、やっぱり結果は似たり寄ったり……
なのは……は子供だから純粋に知らないんだろう……
はぐらかされる度に俺は心の奥底で顔に出さない様にこう思う――――

はぐらかさないといけない理由があるのか――――、それとも
俺が信用されてねぇのか――――、と

――――所変わって、ここは喫茶『翠屋』

「……で、結局の所俺は何をすればいいんだ？」

そこにやって来て、さっさと従業員の制服に着替た俺は厨房の桃子さんに指示を仰ぐ……

今の俺の格好はいつもの様な若者らしいラフな格好ではなく、『翠屋』において他の従業員との一体感を感じさせる、糊の効いた新品の制服だ……桃子さん、いつの間に俺の採寸を……？？？

二の腕まで捲り上げた白いブラウスの上に、『翠』のロゴが胸元に入った黒いワンピースエプロンという、このまま厨房でもフロアでも働いたって違和感が無く、『翠』という店のイメージに合った清潔感のあるデザインだ。

白と黒という真逆の色のコントラスト……『三崎　亮』の姿でも、つくづく俺という存在はこの二色に縁があるみてぇだ……

「うんうん♪やっぱり良く似合ってるわ♪」

桃子さんからの賛辞に俺は「どうも……」と味気無く返事を返すそのホクホクとした笑顔を、人は『見る者を魅了する』ってゆー表現をするんだろうが……生憎と俺はこの制服のサイズが不気味な程ピッタリな事も手伝って――――

「（この人って実は最強なんじゃね？）」

――――と、思ってしまう今日この頃……

この笑顔を見たら、色々とツッコみたい気持ちも萎えてしまうのは何故なんだろう……

「（この人の遺伝子受け継いでんだよな～ウチの女性陣は……）」

何れそう遠くない未来に、『高町家』の最強の遺伝子を継ぐ女達が野に放たれると想像したら――――

――――やめよう……億劫だ……

閑話休題

「それじゃあハセヲは今日が初仕事だから、まずは仕事の段取りを覚えて貰うわね。最初は……」

俺は桃子さんから『翠屋』従業員としての仕事の手解きを受ける店番など、シラバスやガスパーに『カナード』のギルドショップの店番を押し付けられて以来だ……あの時は本当に嫌々だったが、その経験があったからこそなのか、『翠屋』の仕事を覚えるのにはそれほど俺は苦労しなかった

開店まで、あと一時間……長いのか短いのか、微妙な時間……だが、仕事の手解きを受けていれば、それもあっという間だ……。程無くして俺は、『翠屋』のフロアにその仏頂面を並べる事となった

――――そんな俺のバイトの一コマがこんな感じ……

カランコロン

「いらっしゃいませ～～～～～！」

来客を知らせるベルの音に反応して、俺は他人を不快にさせない営業スマイルと店全体に響き渡る快活な声でお客様を歓迎する

「2名様ですね？ご注文はお決まりですか？」

ギルドショップの経験を思い出しながら、俺は慎重に、それでいてテキパキと役目をこなしていく

「ショートケーキお二つですね！お会計の方が……」

テンプレ通りの台詞を言いながらレジを打つ俺……レジ打ちは実際初体験だったりするんだが、桃子さんの指導のおかげか、ちゃんと引き出し（ドロワー）がガチャンと開いて、内心ホッとしてたりする

「ありがとうございました～～～～！」

……ま、こんな所か……

「凄いわハセヲ！とてもバイト初日とは思えない！」

倉庫から食器類の入ったダンボールを運んでいる最中に桃子さんが手放しに俺の仕事ぶりを褒めてくる……だが、それに反して鬱な気分な俺がいる……

「（……こんな所恭也達には見せられねぇ……）」

バイト始めて数時間、世間はもう学生客が除々に増えてくる頃の昼下がり……、つまりもうすぐ恭也や美由希が帰宅してきても可笑しくない時間帯……

すっかり仕事にハマッていた俺だが、つくづく俺のキャラじゃない事ばっかやってて、普段の俺を知ってる『高町家』や『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』の仲間達にはあまり見られたくねぇのが正直な気持ち……できるなら恭也達が帰ってくる前に仕事を済ませたいが……それが無理と分かっている分、更に俺を憂鬱にさせる……

「やっぱりハセヲは何処かのお店で働いてたのかも！こんなに手際が良いんだもの！」

「（まだそのネタ続いてたのかよ……；）そりゃどうも……じゃ、先にこれ片付けるんで“ガッ”おとと……！！」

「きゃ！」

桃子さんとの会話を打ち切り、仕事に戻ろうと歩き出した俺は足元に置かれた機材に気付かず、足を躓かせる。何とか体勢の立て直しが間に合って、割れた食器の散乱という最悪の事態は回避されたのが不幸中の幸い……

「ッぶね～～～……；」

「大丈夫？ちゃんと足元気を付けないとダメよ。食器も貴方の身も大事なんだから！」

『翠屋』に限らず、飲食店という所で食器は非常に重要だ。『料理を盛り付ける』ってのは勿論の事、『見栄えを良くする』ってのにも一役買ってる……っていうのは桃子さんの弁

しかし、食器（ソレ）を運ぶ作業はやはり力仕事。俺みたいな男手がどうしても必要になってくるらしい。……成程、士郎さんや恭也も仕事や学校でいないんだ……俺に声が掛かるのも必然って所か……

けどよ……

「……なぁ桃子さんよ、男のアルバイトって他にいないのかよ……？」

ソレが俺の正直な気持ち……『翠屋（ココ）』従業員が女しかいねぇ様に見えんだけど……？

「それがね……、ココの近くには他にもバイト募集のお店もあるし、ウチは開業したのが割と最近だったから、大抵の男の子はもう他のお店の方に行っちゃってるの」

要するに『他の店に男手を取られた』と……

「女子校が近いから女手には困ってないんだけどね♪」

そりゃ他も一緒だろ……

要するに『翠屋（ウチ）』の男手は俺、士郎さん、恭也の三人しかいない訳か……

士郎さんに至っちゃ店長なんだし、大変なのが目に見えるんだけど……

プルルルルルッ　プルルルルルッ

「あ！じゃ、ハセヲ！後はよろしくね！は～～～い！」

店の奥から電話の音が聞こえてきて、桃子さんは俺に一言言ってからパタパタとソレを取りに行く

「桃子さんって、殆ど副店長だよな……」

そんな事を呟きながら、俺は食器類の入ったダンボールをキッチンへと運んでいった

カランコロン

「っと、いらっしゃいませ～～～～！」

『翠屋』の仕事は続く――――

第7話　『香り立つ　翠の　労働風景』前編（後書き）

一度やってみたかった店員ハセヲでしたw

第8話　『香り立つ　翠の　労働風景』中編（前書き）

文体の工夫や某型月の最新ゲームへの没頭で更新遅れました
いつも読んでくれてる方々やお気に入り登録してくれてる方々、本当にゴメンナサイm（＿＿；）m

今だじっくり過ぎるストーリー進行ですが、付き合って下されば泣くほど幸いです

第8話　『香り立つ　翠の　労働風景』中編

――――日常は、ちょっとしたスパイスでその味を変える……

カランコロン

「やっほ～～、手伝いに「いらっしゃいまs」来t……」

「え？」

「え゛！？」

「ハセヲ……さん？」

「み……、美由希……？」

……ホラ、この通り――――

「プククッ、な、成程……だ、だから、ププ……は、ハセヲさんってば、クスクスクス……て、店員任されたんだ……プククククク……アハハハハハ！！」

「……笑うか喋るかどっちかにしろ……」

店の奥の厨房では今、ハセヲと制服に着替えた美由希が二人きりである
何の前触れも無く、しかも堂々と店の正面から帰って来た美由希に晒したくない赤っ恥を晒してしまったハセヲは羞恥のあまり顔を片手で支え、顔を耳まで赤くするばかり……

「屈辱だ……」

「アハハハ、ゴメンゴメン♪でもさっきの営業スマイル、中々様になってたよ♪」

「それ見られたから屈辱なんだよ……」

「え～なんで～～？別に減るモンじゃないんだし～～」

「減るんだよ主に俺の羞恥心が……」

マイペースな発言を繰り返す美由希に対して、痴漢の被害者みたいな言い分を吐き、ハァ、とため息をつくしかないハセヲ……
一方で、花の様な笑顔で会話を楽しんでいる美由希……
この二人が会話する事は実は家でもあまり無い……家族団欒の場では一応顔は合わせるが、ハセヲはどちらかというと、なのはか恭也の相手をしている事が多かったのだ

「う～～ん、家からビデオ持って来れば良かったかな～～～？ハセヲさんの今さっきのスマイル、家族皆で……」

「俺を恥で殺す気か！！」

故に美由希は楽しんでいる……今目の前にいる、家では見れない意外な一面を持った青年との会話を――――

「ったく……こんな時に桃子さんh“カランコロン”いらっしゃいませ～～～～！」

「変わり身早ッ！！」

憂鬱に浸った仏頂面から一転、爽やかな営業スマイルとなったハセヲは急ぎフロアへとその足を運んでいく

「シュークリームお二つですね！ご会計の方が……」

カタカタとレジを打ち、見事な手際で客を捌くその仕事ぶりを見て、美由希は冗談抜きで感嘆する

「あ～～～やっぱりカメラ持って来れば良かった～～～！」

……と同時にそんな不謹慎な事も思う彼女であった……

ハセヲ接客中……

「……クソッ！また赤っ恥かいちまった……」

「まあまあ、どうせ母さんも見てるんでしょ？だったらアタシに見られようが見られまいが一緒だってば♪」

「……つまりどの道俺は『高町家』で赤っ恥かくって事かよ……鬱だ……“カランコロン”いらっしゃいませ～～～～！」

しかし身体は反応する……

「プッククク……面白ッ！面白過ぎだよハセヲっち……ハセヲっち……ハセヲっち？あ！このフレーズ好きかも♪」

そして人知れず呼び名を改められたハセヲであった……

ハセヲ接客中……

「……つか、お前もいつまでも笑ってないで仕事しろよ」

「アハハハハ、ゴメンゴメン♪……そういえばハセヲっち、母さんは？」

「変な呼び方すんなよ……」

『年上（ハセヲ）に対する礼儀と遠慮』などとっくに無くなっていた美由希は一頻り笑った後、厨房を見渡すと、本来そこにいる筈のチーフパティシエの姿が見当たらない事に気が付く

ハセヲもその事を思い出した様に彼女にその行方を説明する

「実はな……」

美由希が帰ってくる約1時間前――――

プルルルル　プルルルル　ガチャ

『はい、こちら翠屋です。……はい……はい……わかりました。すぐに伺います』

ガチャン

『……』

『？桃子さん？どうしたんだよ、顔色悪いぞ？』

力無く、ゆっくりと受話器を定位置に戻す桃子を見て、不審に思うハセヲ。電話に出る前の桃子から溢れていた快活な様子は、彼女の顔色が悪くなるにつれて見る見る失せていくのが分かる……

『……ねぇ、ハセヲ……ちょっとの間、お店の方、任せても良い？』

『……？どうしたんだよ？』

『急用が入ったの。悪いけど、ちょっと出掛けてくるから、店番お願いね……』

そう言って桃子はエプロンを脱ぎ、外出用のコートだけを羽織って

外出する準備をする。他の従業員にも事情を簡潔に説明する様子は妙に慌しい……否、その慌しさを無理に隠している感が否めなかった……

「俺は二つ返事でＯＫしたけどよ……あん時の桃子さん、なんか様子が変だったよな……」

「ふ～～ん……、どうしたんだろ、母さん？」

ハセヲの話を訊いて、その小さな頭を唸らせる美由希だが、「ホラ、仕事に戻っぞ」とハセヲに小突かれ、思考を中断。二人で『翠屋』の仕事に戻る事にした

ハセヲはショーケース内のスイーツ補充の為に厨房の冷蔵庫へと歩を進め、

美由希はウェイトレスとして盆にランチ等を乗せ、腹を鳴かせてる客人の元へと運び始める

彼女、桃子の行動や様子を訝しむ訳でも無く、彼等は仕事（にちじょう）へと帰っていく――――

ガチャ

ハセヲは冷蔵庫の取っ手に手を掛け、その扉を開けると、白く凍った息が零れてくる。空気より重いソレは下へと流れて行き、ハセヲ

の足元に軽い涼をもたらす
だが、飲食店や喫茶店等の店舗特有の冷蔵庫は人一人等軽く入れそうな程大きい。故に、電気代も馬鹿にならない。そう思案したハセヲは涼に浸りたい気持ちを抑え、サッサとスイーツを取り出し、扉を閉めようとするが……

「……ん？」

そのお目当てのスイーツが見当たらなかった
冷蔵庫の中を覗いてみても、右にも左にもソレの発見は叶わず、本当に人一人は入れそうな空間には冷たい空気しか納まれていない

「げ！桃子さん……急いでたからって作り置き忘れんなよ……」

この場にいないパティシエに恨言を気休め程度の気持ちで呟くハセヲ。この時の彼は、ギルドの倉庫に取り置きの回復アイテムを肝心な時に切らしてしまっていた時の心情だったという……
しかし、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』（向こう）では店で購入すれば済む話だが、コッチの場合は一大事である。ショーケース内のスイーツはどれも残り個数が少ない。このままでは数刻もしない内に品物が出せなくなってしまう……
『翠屋』では、スイーツに関しては本場仕込みの腕前を持つ桃子に殆ど一任されており、彼女無しでスイーツを作るには誰かがレシピを参考にでもして、何とか取り繕うしかない……

「ズブの素人じゃ味や質は落ちるだろうが、出せなくなるよりはマシか……問題は誰が作るか……」

「ミートスパとシーザーサラダのセット入ったよ～～～～ってアレ？ハセヲっち、まだ居たの？」

「！」

一人熟考していると、美由希が厨房の方に注文を持って舞い戻ってきた

そのソプラノの呼び声に振り返ったハセヲは彼女に冷蔵庫の現状を伝える

「他の人に頼めばいいんじゃない？」

子供らしい核心を突いた解答だ。だが……

「そしたら作ってる間、今度は給仕の人手が足りなくなるだろうが」

「あ、そっか……」

「……つっても、そうする以外に手立てが無いのも本当なんだよな……」

『翠屋』は地元での高い人気と反比例する様に人手が足りない。故に従業員も家や恭也達の知り合いからヘルプが掛かる程なのだ。当然ながら、今更スイーツ作りに回せる人事等何処にあろうか……

材料の方は何の問題も無い……レシピも厨房の一角に納められてるのが見える……やはり問題は人事である

もう思い切って電話で桃子を呼び戻そうとも考えたが、先のあの様子だと、水を差すのも悪い気になるし、最悪彼女と連絡がつかない可能性もあるので、現実的とは言い難い……

援軍が望めないとなると、やはり現状の戦力で何とかするしかない……

……本の数秒足らず、しかし濃密な熟考の末、彼が出した答えは…

……

「……よし、俺が作ろう！！」

「へ？」

余りにも浅はかに思えた――

第8話　『香り立つ　翠の　労働風景』中編（後書き）

次回は美由希が活躍？の予定です
原作ファンならこの後の展開は容易に読めますかね？

第9話　『香り立つ　翠の　労働風景』後編（前書き）

ケーキのレシピ調べながらネタを考えてたら予想以上に時間掛かったヌエマルです……ゴメンナサイ、待って下さってた方々申し訳ありません……m（＿＿；）m

副題はきっと『ハセヲと美由希のお料理教室』です

第9話　『香り立つ　翠の　労働風景』後編

「……つー事で頼むな」

ハセヲはそう従業員の女子に告げて、厨房へと足を運ぶ……

これから始まるのは

喜劇か――――悲劇か――――

三角巾（カブト）を持て――――

エプロン（フンドシ）を締めよ――――

いざ、決戦の時――――！

「ケーキ作りに挑戦するぞ！！」

「ハセヲっち、手も洗わないと」

ハセヲ達が労に勤しむ『翠屋』は今、一つの山場を迎えていた

パティシエ・桃子の急な外出により、現在の『翠屋』はショーケースの分しかケーキ類を出せない状況にある

一日のオーダーストップにはまだ早過ぎる現時刻――――、ここで

ケーキが出せないのであれば、『翠屋』の面目は丸潰れだ……
意を決したアルバイター（ハセヲ）は、現状打破の為にトンでもない奇策を強行した

それが、初めてのケーキ作りである――――

「ハセヲっち～～、ケーキ作れるの？」

「初めてだ」

「あ～～記憶喪失って話だもんね……大丈夫なのそれ？」

「幸いな事にケーキのレシピが手元にある。これの通りに作れば、少なくとも店の看板に泥は塗らずに済む……筈だ」

完成品が表紙を飾るレシピ本を取り出して自信無く言葉を紡ぐハセヲ……
共働きの両親が家にいる事が少なく、事実上一人暮らし同然なハセヲは料理も最低限は出来るが、流石にケーキを作る等、初体験も良いトコロだ……

「……不安だね」

「うるせぇ、そう思うならお前も手伝えよ美由希！」

「分かってるって！ウチのお店のピンチなら、アタシが立ち上がらない理由も無いしね！」

ハセヲに言われるまでも無く、腕を捲くってやる気を表す美由希
そう、だからといって、このまま店を閉める訳にもいかない……。
『翠屋』は飽く迄も喫茶店。ケーキ以外の注文も多いし、しかも今は客足がピークのお昼時なのだから尚更だ。何より、意外と責任感のあるハセヲは曲がりなりにも店を任された身として、臨時休業等という選択肢を選ぶ筈が無かった

言ってしまえばこれは、それ故の彼等の足掻きである

「因みに美由希、料理経験は？」

「無いよ」

「……不安だな」

「な、何よ～～自分だって似た様な境遇の癖に～～～～！それにアタシは母さんが作ってる所チラチラ見たりしてたんだからハセヲっちよりマシだよきっと～～！」

「チラ見かよ！」

……足掻きなのである！

「美由希、材料を確認するぞ！」

「アイアイサー！」

美由希を助手の様に扱い、ハセヲは調理前の目の前に出された材料の再確認を行う

「今回作るのは定番のショートケーキ！材料は
卵
砂糖
小麦粉
牛乳
生クリーム
イチゴ
まあ、基本はこんな所か……」

「う～～ん、こんなのがあの甘～いケーキになるんだから不思議だね～～」

「その不思議をこれから俺達で現実にするんだよ。さてとまずは……」

●第一工程（ミッション1）　卵を攪拌させよ！

ケーキを作る上で基本となるのはやはり土台たるスポンジである
土台（スポンジ）の存在があるからこそ、その上に飾られる赤い王冠（イチゴ）と白いマン（生クリー）トは映え、そしてそれらを纏う土台（スポンジ）は正しく『王様』となるのである
今回作るショートケーキとはそういうモノなのだ
何事も基礎が大事なのは万国共通。王冠もマントも、纏う者が居なければただの飾りと同義である

「んーーと、ボウルに卵を入れて……、砂糖を……」

傍らに置いたレシピを読みながら、ハセヲ達は調理を開始する。初体験の出始めだけに年齢の離れた二人は変わらぬ振動数で手を震わ

せている
冷蔵庫から取り出した卵二個と砂糖の入った容器……最初の試練はこれらを混ぜ合わせる事にある

「……っと、じゃあ泡立て器が要るな……。美由希、泡立て器持って来てくれ」

「え～～～、アタシも卵割ったり混ぜたりしたい～～～！」

「我侭言うな。急いでんだよ」

「ちぇ～～……」

ハセヲに宥められ、不服そうに唇を尖らせる美由希は、渋々計量スプーンの置いてある棚へと向かっていった
ハセヲはそれに意を介する事無く、二個の卵を両手で割り、ボウルの中にその黄金色の卵黄を落とす

「え～～っとそこに砂糖を小さじ二杯……小さじって、計量スプーンの事か……」

レシピを解読するハセヲは手元にあったスプーンを手に取って見比べてみる
しかし、そのどちらもが似た様な大きさで、小さじというカテゴリに分けるには大き過ぎる様に見えた

「ん～～～、他にスプーン無ぇのか……」

ハセヲはそう呟いた後、他のスプーンを探すべく、席を外して食器棚へと足を運ぶ

「ハセヲっち〜〜。これで……って？」

そこに電動泡立て器を片手に美由希が戻って来るが、彼女は居ると思っていた場所にハセヲが居ない事にきょとんとするが、すぐさま食器棚を無我夢中で物色しているハセヲが目に入る……。先の声に気付いていないであろう彼の様子と、偶然自分の近くにあった、台になりそうなダンボール箱を見比べた美由希は、程無くして――

「……キラン（＋Θ＜Θ）」

その眼鏡を光らせた――

「んーーっと、これか……それとも“ウィィィィィン”……って、ん！？」

計量スプーン品定めの最中、場違いな機械音がハセヲの耳を叩いてきた

その音の発生源と思わしき方向に振り向くとそこには……

「ん……しょ……ん……しょ……」

ウィィィィィィィィィン

両手で泡立て器を持ってボウルの中の卵を攪拌させようと奮闘する美由希がいた……

「ってオイオイオイオイオイ待て待て美由希！何やってんだよお前！！？」

それを目撃したハセヲは火急の勢いで美由希の元に駆け込む

「あ、ハセヲっち。お取り込み中みたいだったから先にやってるよ♪」

足りない身長を補う為に上ったダンボールの台を揺らしながら、彼女はあっけらかんと答えた

「バカ！！ボウル持っとかねぇと危な……」

カツ

「えっ？」

ハセヲの叱咤が言い切られる前に、泡立て器の先端から金属を引っ掻く様な音が一瞬聞こえた

しかし、その一瞬の内に――――

カツカツカツカツ

「わっわっ！わわわっ！！」

会話中も尚、攪拌の動作を止めなかった美由希は泡立て器を止める反応が遅れ、その泡立て器は持ち主の命令に逆(逆らって)らわずにボウルの壁を叩き続ける

程無くしてボウルの底はテーブルを離れ――――、

「わわわ～～～～っとっと！！」

美由希は咄嗟に泡立て器をボウルから引き離す

慣性の法則に従うボウルはグワングワンとその場で豪快な回転舞踏（バレリーナ）を踊る
やがてそれは閉幕を告げ、その余韻はボウルの中の卵の渦巻く様子が物語るのみとなった……

「……フゥ……。危なかった……」

中身がぶちまけられる事無く済んでホッと一息いれる美由希。だが

「一応言っとくけど良かったな……。後はこのとばっちりを何とかしろ」

「え？……あ」

美由希はハセヲの方を振り向くと、そこには現在進行形で顔中に黄色い飛沫（タマゴ）を浴びるハセヲが仏頂面で立っていた
見れば彼女、咄嗟に取り出した泡立て器は電動スイッチを入れたまま、しかもハセヲにその卵まみれの先端を向ける形となった為、ハセヲの顔の理由は一瞬で理解した……

「……ゴメ☆」

静寂の中、泡立て器のウィィィィンと空回る音は耳に残り易かったという……

※電動泡立て器は人に向けてはいけません。ボウルから取り出す時もスイッチを切ってからでないと掃除が大変になります

●第二工程（ミッション2）　小麦粉注意報！

ウィィィィンという機械音と共にボウルの中は徐々に攪拌されていく。卵黄の黄色はナリを潜め、今では柔らかいボディソープの様な白い泡となっている。因みに今の泡立て器の持ち主はハセヲ……

「美由希、とりあえずお前は小麦粉を篩いにかけろ。ちゃんと薄力粉使えよ」

「イエッサー」

頭にタンコブを作った美由希は言われるがままに行動する
テーブルの上に新聞紙を広げ、小麦粉を篩う準備を行う彼女だが、

「あれ、小麦粉は？」

手元の近くに小麦粉が確認出来ず、辺りを見渡す美由希
やがて、厨房の奥の方で『小麦粉』と書かれた袋を見つけ出す

「あ！あったあった」

目当ての物が見つかり、彼女はそれをパッと取って篩いにかけ始める
小麦粉は美由希の手にする篩いを通り、重力に逆らわずに雪の様に
新聞紙に降り注ぐ
篩いにかけられた小麦粉は細かい。軽く息でもすれば空気と一緒に
吸い込んでしまいそうな程に……

スゥーー

「……ぅ……へ、へ……」

そうなれば、結果は目に見えている……

「ヘックション！！！」

バフォォ

「うおっ？！？！」

隣で何の前触れも無く出来た積乱雲に驚くハセヲだったが、その原因の理解は一瞬だった

「……世界が真っ白……」

積乱雲を抜けた先には、小麦粉を被って眼鏡すら真っ白な美由希の間抜けな顔……

「……あ～～、まあ、やるだろうなとは思ってたよ……」

諦観に満ちたハセヲの呟きに真っ白々助となった美由希は白いクシャミで答えたという……

※小麦粉を篩う時は自分の顔より低い位置で篩いましょう

●第三工程（ミッション3）　生地を焼くべし！

篩いにかけた小麦粉と牛乳を加えた生地は、紆余曲折ありながらも

何とか型に流す段階まで来たハセヲと美由希……
ハセヲはボウルの中に納まった生地をへらでさっくりと混ぜ、美由希は生地を焼く為の大型オーブンの用意に取り掛かっている

「いや～～作る前は正直大丈夫かどうか不安だったけど、何とかなって良かったね～～♪後は焼いて飾り付けするだけだし♪」

「不安要素の塊が言うな」

「ヒドッ！」

あまりの言い草に涙目になる美由希だが、実際彼女はどちらかというと足を引っ張った方で、機材運び位でしか役に立っていなかった……
その彼女の手による奇劇は前述の通りである……

「言っとくが、生地に変なモン入れてねぇだろうな？此処まで来てフリダシなんざゴメンだぞ……」

「ブーブーブーー！ハセヲっちはアタシの事何だと思ってんのよ～～～～！」

「不安要素の塊」

「うぐっ……そっそれはさっき聞いたよ！でもいくらアタシだって余計な物入れる様なヘマなんかしないってば～～！」

そう言い張る美由希だが、ハセヲは念を押してテーブル上の材料をザッと再確認する
割れた卵、砂糖の入った容器、小麦粉の袋、牛乳、

見た所、不自然な材料が無い事を確認したハセヲだが――――、

「オーブンで焼く時間は分かってるな？一桁でも間違えたら台無しだからな」

「も～～ハセヲっちしつこ～～～～い！」

やっぱり信用されない事に美由希は口を尖らせ、ブーブーとブーイングを飛ばすのであった……

３０分後……

ついに自分達の作ったスポンジが現れる

出来具合に対する不安と初めて作ったモノへの期待……

そんな気持ちが入り混じる緊張の中、手袋をしたハセヲはオーブンからソレをゆっくりと取り出し、テーブルの上に置く……

ゆっくりと型を取り外したソレは、表面は狐色に仕上がり、出来立て故のアツアツさが視界からも空気からも伝わってくる。心なしか、近づくとほんのり甘い香りが鼻を擽ってくる

「よし！見た目は上々だな！」

「おいしそう……」

「オイオイ、そりゃ分かるが、食べんなよ？」

ソレ等は全てお腹の虫の目覚ましになり得るモノだったが、このスポンジはこれからお客様に出す為のケーキに変わるので、美由希は

「分かってる分かってる」と、一瞬浮かんだ邪な考えを頭を振って振り払う

「よし！後はスポンジを横に切って、苺とクリームを……」

そう言ってハセヲは包丁を持ち、スポンジと平行にして横から――

――

ザクッ

と刃を入れた……

「ん？ザクッ？」

そのスポンジからの音と感触は、あの柔らかなショートケーキのスポンジにしてはあまりに硬かった……

「どしたのハセヲっち？」

美由希が怪訝な顔で彼の顔を覗き込む。ハセヲはそのケーキらしからぬ手応えに訝しげに顔を歪めている

普通ケーキとは、言うなれば『しっとり　ふわふわ』に仕上がるものであって、『ザクッ』という手応えなど、比喩表現でも有り得ない……

ザシュザシュザシュ

と思いつつもケーキの中が気になったのも事実な為、ハセヲは猶も

包丁を前後運動させながらケーキを両断していく……
やがて包丁は食い込んだケーキの底に行き着き、その中身を露にする……
その中身は……

パサパサ

だった……

「……まさか……」

そう言うや否や、ハセヲは材料を再確認し出す。今度は一通りに目を通すのでは無く、ある一つの材料を手に取っての確認だ……
その食材とは……

「……オイ美由希」

「な……何？ハセヲっち？」

「俺は『薄力粉』使えって言ったよなぁ……！」

腹の底、いやむしろ地の底から押し出す様な低い、ドスの利いた声でハセヲは訊いてくる……
その手に持っているのは、含有するグルテンによって、洋菓子に空気を含ませ、膨らませる『しっとり　ふわふわ』な感触を生み出す為の『小麦粉』……但し『強力粉』が……

「こりゃパスタ用の『強力粉』だ～～～！！！」

「え～～～～～～～ん！！！」

第一工程（フリダシ）に戻る……

※強力粉は空気を含み難いので、ケーキは『しっとり　ふわふわ』になりません。薄力粉が理想的です。一度間違えたらこうなるので気を付けましょう

●最終工程（ラストミッション）　店に並べるべし！

「お待たせしました～～～～」

オオ～～～～～

パチパチパチパチパチ

紆余曲折あって、ようやく店に出せそうなケーキが完成した。しかし、時計を見れば、ケーキ一つを作り始めてから既に3時間過ぎていたりするのだが……

「いや～～～照れるな～～拍手なんて♪」

「調子に乗んな！」

ペシッ

「あ痛☆」

傍らで照れる美由希を叩(はた)くハセヲ……彼等には何故か従業員やお客様達からの惜しみない拍手が送られていた

ケーキ一つ作るのにこの拍手は大袈裟に思えるが、これには実は理由がある

あれからケーキを一から作り直す事となったハセヲ達だったのだが、その度に……

「卵が足りない！」

「牛乳が切れた！」

「攪拌がイマイチ！」

「そりゃ砂糖じゃなくて塩だ！」

「生地が焦げた！」

「洗剤と小麦粉間違えるな！」

というベタな失敗（全部美由希が原因）が続く始末で、その都度一からやり直しを繰り返す事となっていた。が……

「ショートケーキ切れました～～～」

時間が待ってくれる筈も無く、ショートケーキは最も恐れていた売り切れという事態となってしまった……

これによって尻に火が付いた二人はケーキ作りの手を早める事となったのだ。生地を焼いている最中でも更なる生地を作ったり、足りなくなった材料は手の空いてる従業員に使いを頼んだりと、自分達でも驚く様な手際でハセヲと美由希は作業を進めていったのだ……

その熱気がフロアにも伝わった模様で、従業員所か、興味本位のお

客様方も厨房を覗いて来る者も少なくなかった
つまり、周囲からの惜しみない拍手はそんなハセヲ達の熱意への敬意の表れという事だ！

「は～～～疲れた～～～～～……」

「アタシも～～～～～……」

とはいえ、疲労が吹き飛ぶ訳では無い……
休憩室でバッタンキュ～と机に突っ伏す二人であった……
『あ゛～～～～～』という声と共に魂が出て行きそうな表情な二人であったが、

プルルルルル　プルルルルル

「……ったく……」

仕事はお構いなしにやって来る……
「いってらっしゃ～～い」という美由希の中身の無い見送りの言葉を受け取ったハセヲは、店の奥電話へと手を伸ばす。疲労を見せない様に努めながらハセヲは受話器を取って耳に当てた

「はい、こちら『翠ｙ』ハセヲ！ハセヲなの！？』うわっ！も、桃子さんか！？」

電話の向こう側の悲痛な叫びは桃子からの物だった。
そして――――

『ハセヲ！すぐになのは達と合流して病院に来て！』

「な、何だよ藪から棒に……何かあったのかよ？」

『士郎さんが……士郎さんが……！』

「？」

その悲痛は伝播する――

第9話　『香り立つ　翠の　労働風景』後編（後書き）

次回はちょっと暗くなるかも？です

第１０話　『繰り返される　同胞の　空中分解』前編（前書き）

「ｈａｃｋ／／ＱＵＡＮＴＵＭ」発表おめでとうございます！
そして更新遅れてスミマセン！！
お盆とか実家の一大事とか色々あってここまで遅れてしまいました
本当にゴメンナサイｍ（；｜｜；）ｍ

第１０話　『繰り返される　同胞の　空中分解』前編

それは、あまりにも唐突だった……

手にしたのは仮初の家族……

失ったのは大切な日常……

笑って、怒って、心配して、

そんな生活が当たり前になっていた……

仮初は、何時の間にか、本物になっていて……

けど、気付くのが遅過ぎて……

日常という宝石は、砕け散って……

虚しさだけが、心に残った……

――――――かつてハセヲも世話になった海鳴大学病院の病室……

そこに在るあまりにも信じられない現実に、その場にいる者全てはその場で俯く事しか出来なかった……

「うっ……えぐ……う……う……」

ただ一人、まだ物心ついて間もない多感(なのは)な幼子の涙声だけが、静寂の中に響いていた……

――士郎が倒れた――

その言葉を聞いた時は、高町家の誰もが「冗談だ！」「何かの間違いだ！」と思ったに違いない……

だが、残念ながら彼は冗談や間違いで済む様な世界の住人では無かったのだ……

「裏の世界？！」

「……ええ……士郎さんはソコで働いていたの……」

恭也達の居る士郎さんの病室の外に当たる病院の廊下で、桃子は沈痛な面持ちでハセヲに士郎を始めとするこの高町家の素性についてある程度明かした

それはあまりにも現実離れした話で、予想を大きく上回(うらぎる)る事実(ソレ)に無知なるハセヲは息を呑むしかなかった……

士郎は桃子と結婚するまで、息子の恭也と共に放浪の旅をしてきたとは彼女の弁……

つまり恭也は、士郎の前の妻の子供だった……更に加えると、美由

希も正確には恭也の妹では無く親戚という事らしく、桃子の血縁はなのは一人であるというのが分かった……
そして、彼等が旅の根無し草の頃に食い扶持を稼ぐ手段としていたのが『裏の仕事』……平たく言えば『ボディーガード』やら『暗殺』やらの汚れ役の仕事である……

絶句は意外にも一瞬だった……
矢継ぎ早に次々と告げられる余りにも衝撃的な事実だったにも関わらず、彼の頭は真っ白になる所か、驚く程冷静に「ああ、そうか」と納得してしまっていた

思えば、それらしい素振りは何度かあった……

見ず知らずの青年にも姿勢を崩さない場慣れした言動、無意識下でも隙の無い普段の構え、あまりにも実戦向きな二刀流剣技、時折家を空ける出張時……

その全てが、今の話を理解させるには十分な状況証拠となっていた……血縁関係云々には十分に驚いていたが……
裏の世界を渡る過程で身に着けた身構え心構えを士郎は日常においても保っていたのだ……

ハセヲが衝撃的な事実に驚かなかったのは、それらの事柄に薄々感付いていたが故であろう……
だがその代わり、彼は一抹の疑問と――――、

「……だよ」

「え？」

「何で言わなかったんだよ……！！」

怒りを覚えた――――

「ハ、ハセヲ……？」

突然の怒号に桃子は思わずたじろぐ素振りを見せる。それに意も介さず、ハセヲは更に捲くし立てる……

「アンタ、その事を何で教えなかった！他の奴等が知ってる事を！！そんなに俺が信用出来なかったのかよ！！」

「！違うわハセヲ！私は、私達は」

「なら何でバイトの時の俺の質問をはぐらかした！？『翠屋』を出る時だってそうだ！碌に事情も言わずに出て行きやがって、俺はそこ等の他人と同じかよ！！」

「聞いてハセヲ！私と士郎さんは……」

「ああそうか……、そうだよな！恭也や美由希は士郎さんの血縁だし、なのはに至っちゃアンタの娘だもんな……、何の繋がりも無い『居候（たにん）』にはそりゃ言えねぇよな！立派な家族愛だよオイ！」

「違う！そんな事……」

「違わねぇ！！違っても俺には同じ事だ！」

「！」

思い付く限りの暴言を腹から搾り出し、ハセヲは目の前の女性を押し黙らせる

ただの『居候』の言葉に押し黙る様じゃ図星だなと判断した彼は、更にその怒りをぶつけようと口を開こうとし――――、

「やめてハセヲおにいちゃん！！」

――――止める……

「……なのは……」

見れば、何時の間にか病室から出て来たなのはがハセヲの片足にヒシッとしがみついている……。彼を抑え込もうと力を込める感触にハセヲの怒り《かなしみ》は徐々に鎮火していく……

「病室まで聞こえてたぞ？」

「ハセヲっち……」

一緒に出て来たのであろう、恭也と美由希が遠慮がちにハセヲを宥めてくる……

「……チッ……」

言葉を発する機会を見失い、彼は負け惜しむ様に舌打ちする……
彼は桃子さんに一瞥くれてやると、「士郎さんと顔合わせて来る……」と吐き捨てる様に言って病室へと足を運ぶ……
「ハセヲ！」と彼を止める声が聞こえた気がするが、彼は意に介する事無く、病室のドアをバタン！と乱暴に閉めた――――

「……」

桃子は佇んでいた……最愛の夫が眠る病室の前で……
その夫の安否は気になる……それこそ、半身を引き裂かれる様な思いで……
だが、今はそれと同時に、彼の青年の言葉が棘となって心に突き刺さる……

『違わねぇ！！違っても俺には同じ事だ！』

反芻するそれは弁明の拒絶……
青年の叫ぶそれは裏切りへの慟哭……
脳裏に響くその怒号は信頼の費えた哀しみ……
最後に交わしたそれは……信頼の証……

裏切りでも、そうでなくても、彼は黙秘した事実に対して怒っていた……
互いに本音を言い合える仲……ハセヲはきっと自分達の事をそう思ってくれていたのだろう……

それこそ、本当の家族の様に……

本人の意は知る由も無いが、あの言葉にはそんな意味が込められていた――――

そんな気さえした桃子がいる……

だが……結局彼女は……

「（……そんなつもりじゃなかったんだけどな……）」

桃子の瞳が揺れる……

自分達と青年を繋ぐ絆が、音を立てて崩れ行くのを感じて……

「母さん大丈夫？」

「ハセヲっちと何喧嘩したか知らないけど、元気出しなよ！」

「……ありがとう恭也、美由希……大丈夫、大丈夫よ……」

懸命に自分を励ます子供達に強がりの笑顔を見せる桃子……

そう、士郎が倒れて辛いのは皆一緒なのだ……

自分だけじゃない……恭也も、美由希も、なのはも……

そして、ハセヲも……

ならば自分は……せめて自分だけは笑顔でいよう……

子供達が笑っていられる様に……
それが、最愛の夫が目覚めるまで、自分に出来る事だと信じて……
そして願わくば、ハセヲともう一度対話を……

一人の女は決意したが、その一方で、彼の青年はどうだろう……
……？

「ハセヲおにいちゃん……」

ただ一人、なのはがドア越しに視線を送る激情の青年は――

ハセヲＳＩＤＥ

「……」

「顔を合わせてくる」と言って病室に入ったハセヲだが、生憎と合わせる顔が無かった様だ……
ハセヲにでは無い……士郎にだ……

「……士郎さん……」

そこにいたのは、自分も世話になった白いベッドに伏す士郎の無惨な姿だった……

顔中を始め、全身を覆う様に巻かれた包帯……／太陽を覆う雲の様にその隙間から覗く口に取り付けられた、酸素を送るホース……／虫の様な息遣いしか感じられず

薬を点滴する為に伸びたカテーテルは幾多の修羅場を掻い潜って来
た士郎の右腕を刺し貫く……／この逞しい筋肉すら、こんなか細い
命綱（カテーテル）に頼らなければならないのか

痛々しい……まるで死人の保存だ……

ハセヲはそう虚しく呟くと、糸が切れた人形の様に床へ力無く座り
込んでしまう……
伏し目になったその端正な顔には、今や何の感情も篭っていない……
あるとすれば、それはきっと“無力感”と“既視感”……
……目の前の床に臥す男性の存在は、かつて志乃が未帰還者になっ
た時のソレを思い出させるには十分な光景であった……

「馬鹿か俺は……」

ようやく呟いたその言葉は自分への罵倒……
利き手を顔に当て、目元に影を落としてその表情を隠した今の彼か
らは、普段の荒々しさは微塵も感じられず、代わりにあるのは弱々
しさだけであった……

「血縁？居候？……ハッ！そんなの関係無ぇっての、分かんねぇの
かよ俺は……」

自嘲的に口を歪めながら、ハセヲは自らの言動を諌める

「……すまねぇ士郎さん……ホントは分かってんだ……こんな

大事な事、隠し通すしか無いって事も、ソコに俺一人出張った所でどうにもならねぇって事位よ……」

返事は来ない。ただ心拍数を表す電子音が聞こえてくるのみだ……

「……分かってんだよ……分かってんだけどよ……」

にも関わらず、ハセヲは訴える様に嗚咽にも似た声を搾り出す……

「……何でこんなに痛ェんだよ……」

空いた手で心臓を鷲掴む様に胸を握り締めるハセヲ……

それきり彼は言葉を発する事は無かった

その日、高町家から『笑顔』が消えた――――

第１０話　『繰り返される　同胞の　空中分解』前編（後書き）

突貫工事が否めない内容ですが、これからも頑張りますので、暖かい目で見つめてて下さい

第１１話　『繰り返される　同胞の　空中分解』中編（前書き）

お久しぶりです
胸痛と頭痛と話の区切りに悩まされたヌエマルです。

おかげ（？）で今まででは一番文字数の多い回となってしまいましたｗｗ

第１１話　『繰り返される　同胞の　空中分解』中編

士郎が意識不明となって数週間が過ぎ――

高町家は大きく変わった――

『翠屋』店長代理となった桃子は『翠屋』が忙しくなり、作り笑いが多くなった――

師匠の居なくなった恭也は美由希の制止も振り切った無茶な鍛錬をする様になった――

いつも家を代表して士郎の見舞いに行って来てくれる美由希は恭也の変貌に怯える様になった――

そして未だ身も心も幼いなのはは、

笑わなくなった――

ハセヲＳＩＤＥ

その日の空は鈍色だった――

……否、空は青天白日の曇り無き空だ――

鈍色なのは、かの青年の心であった――

「……」

青年はただ佇むだけだった――

今の彼には以前までの覇気は無く、その瞳に宿るのはただ『虚ろ』のみである――

「……」

彼の生活もまた、大きく変わった……

桃子と顔を合わせるのを避けるようになり――

恭也との口喧嘩も無くなり――

美由希の励ましも生返事でしか応えられなくなり――

なのはと一緒に外出する事も無くなった……

「……」

今日も今日とて、ハセヲは『記憶探し』と称した散歩に出掛け、街中と歩く――

しかし、その目には何も映らない……いや、映さない――

街の喧騒も――

店の繁盛も――

蒼天の空も――

まるで曇天の雲の様に――

全てが色褪せて、モノトーンに映る……

「……ふぅ」

ようやく重い口から出て来たのは力の無いため息――――

青年にとって、この散歩は『記憶探し』等では勿論無く、かといって何かをする為の散策という訳でも無い

ただ歩けば『何か』あって、その『何か』が傷心を癒やせるのではないかという漠然とした、根拠も何も無い行動だった……

だが、結局その傷心を癒やさんとする無為無策なる行動は徒労に終わる事となったようだ……

「（……帰るか……）」

物思いに耽るでも、何かするでも無く、青年のその日の散策を中止し、帰路へとついた……

――――とはいえ、今の『高町家』ですら、色褪せて見えてしまう……

この世界の『高町家』と知り合ってから早数ヶ月……

『居候』とはいえ、自分を迎え入れてくれた家族に囲まれ、元の世界では縁の薄い家族団欒に暖かさを覚えていた……

だが、残念ながら、今の『高町家』にはその暖かさは微塵も感じられない……

桃子は『翠屋』で働き詰め……

恭也はその手伝いか裏山での修行に根を詰め……

美由希は一家を代表して士郎のお見舞いに行く日々……

故に家の居間（リビング）に居るのは必然的に――

「よう、なのは……」

「……あ、おかえり……ハセヲおにいちゃん……」

一家で最も幼い……力の持たない……なのは一人である――

「……」

「……」

沈黙が互いの間の空気を支配する……

なのはは顔を俯けたまま、両手に持ったジュースのストローに口をつけている……

ハセヲはそんな彼女に対して言葉を掛けようと思うのだが、その言葉に困ってしまう……

――その子が少し触れただけで崩れてしまいそうだったから……

それでもハセヲは慎重に言葉を選び――、

「……なあ、なのは……留守中にチャイムか何かあったか？」

「……ううん、何も……」

「……そうか……。……んと、じゃあよ……何かトラブルあったら俺の携帯にも連絡入れろよ……。俺は基本暇だからよ……」

「……うん……だいじょうぶ……。……なのは、いい子にしてるから……」

「……ああ、それは分かるんだけどよ……」

会話が弾まない……

普段なら人懐っこいなのはから矢継ぎ早に話題を持ちかけてくるのだが、今のなのはにはその快活さが無い……

――――笑顔を見せなくなったのだ――――

「（……やっぱ俺も家に居るべきだよな……コイツはまだ子供（ガキ）なんだし……）」

今更ながら、ハセヲは自分の行動を省みる……

実はハセヲの外出になのはが付いて行かなくなったのは、士郎が倒れてから始まったこの留守番にある……

ハセヲが『記憶喪失』という事は一家全員が認知している事……。

その記憶探しの散歩は、最早『高町家』でもハセヲの中でも日常茶飯事だと認識してしまっていたのだ……

ハセヲはさも当然の如く出掛けたものの、後になって自分の行動は軽薄だったなと内省し、なのはに声を掛ける……

「……なのは、今度から散歩は一緒に行こうぜ」

「えっ……」

俯きっぱなしだったなのはは顔を上げ、きょとんとした表情でこちらを見つめてくる……

「もし行きたくねぇって時はこれからは俺も行かねぇ様にする……だからよ……」

「だ……ダメェ！！」

「？！」

甲高いソプラノの声がハセヲの提案を強く拒否する

「ダメぇ……ハセヲおにいちゃんがこまっちゃうよぉ……」

「べ、別に俺は困らねぇよ……」

「なのはのせいで……ハセヲおにいちゃんが困っちゃうよぉ……」

「オイオイ……、何言い出ｓ」

ピリリリリッ　ピリリリリッ

「「！」」

ハセヲがなのはに訊ねる前に、彼の懐から突如電子音が鳴り出す
単調なリズムをけたたましく響かせたそれの正体は、士郎と桃子が『連絡用』と称してハセヲの好みに合わせて買ってくれた、ピアノを思わせるシックな黒い携帯電話からの音だった……

「ったく……誰だよこんな時に……！……って桃子さんからか……」

この携帯の番号を知る者は『高町家』位なモノ……そして携帯画面に映る着信者名は『高町　桃子』の名前……ハセヲが今、一番顔を合わせ辛い相手だ……
愚痴を呟きながらも、ハセヲは遠慮がちに通話ボタンを押して電話を耳に押し当てる……

「……はい……ああ、今家だけど……は？……っああ、分かったよ……」

億劫といった表情でハセヲは電話を切る……
ハセヲはその携帯を懐にしまい、「参ったな……」と言わんばかりの顔で頭を抱える……

「（『忙しくなってきたから手伝ってくれ』だぁ……？！ったく、家になのはしか居ねぇの知ってる癖に……！！）」

自分の娘だろうが……！！そうは思うハセヲだが、それでも桃子には桃子の事情があるという事も彼は重々承知しているつもりだ……だが、それでもなのはを意に介さない様な物言いは、ハセヲにとって易々と許容出来る様な物では無かった……
静かに憤慨しつつあったその頭を冷ましたのは……

「ハセヲおにいちゃん……」

「！」

なのはのか細い、小さな小さな声だった……

「おかあさんから……？」

「……」

ハセヲは答えない……答えられない……

どう答えたらいいかわからない……どう答えても、絶対になのはを悲しませる結果に結び付く……

どうしたらいいんだ？と思い悩んでいると――――、

「……うん、きをつけてね……」

「……は？」

「おみせのおてつだいでしょ？きをつけていってきて……。なのは……いい子にしてるから……」

「――――――――！」

小さき者の憂慮が、青年を斬り裂いた――――――――気がした――――

……鬱陶しい……
照り付ける日差しが雨の如く鬱陶しい……
傘を持って出なかったのを後悔する程だ……

「……」

一旦は家を逃げる様に出たハセヲだったが、その顔色は散策中の時よりもずっと陰鬱だった――
人の流れに逆らわずに歩みを刻む両足だったが、やがてその歩みはゆっくりと止まり、

「――ッくそっ！！」

ガツン！！！

ハセヲは近くの柱に拳を力の限り打ち付ける……
その拳は赤く腫れ上がるが、今の彼の心はそんな事も意に介さない……
その心に渦巻く感情は――一口では言えない……
悔悛――、衝撃――、悲愁――、葛藤――、……

……挙げだしたらキリが無い……

「（……何だよ……ありゃ……）」

傷心がいの一番に思い出すのは、家を出る前のあの悲しげの瞳……

……

『なのは……いい子にしてるから……』

「……ッ！」

反芻する程、それは青年の胸を締め付け、顔が沈痛な面持ちに歪む

……

「（……あんなの……ガキのする瞳（め）じゃねぇよ……）」

自分を押し殺した様なあの揺れる瞳……忘れたくても忘れられない……

あそこに居たのは確かにまだ甘えたい年頃の子供だった……。だが、なのはは……そんな自分の感情を押し殺していた――

まるで、家の大事を分かっているかの様に――

泣かねぇけど泣きたい位辛い筈なのに……

それを我慢している様な瞳を見るのが『恐く』感じてしまった自分が不甲斐無い……

「（……ハハ……、結局分かってねぇのは俺だけってコトかよ……）」

家族は皆バラバラ……、皆笑わない……

一人一人の心が離れていく……

何もかもが変わっていく……

こんな悲しさと虚しさを抱いての環境の移り変わりなんて……

まるで……まるで……

「まるで……あれ？まるで……」

『赤ちゃんはね、言葉が話せないから母親の顔、じっと見るんだよ』

『ハセヲよろしく～～♪』

『ま、納得する自分に呆れ、お前と居る自分にビックリだな……』

『Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ……』

……旅団に居た頃の様……

「ああ、そうか……」

そういう事か……

「……似てるんだ……あの頃と……」

今更気付いた自分を嘲った……

一人で家を支え、士郎の代わりを務めようとする桃子が『志乃』で……

懸命な励ましが空回りし、自分にやれる事を探してそれをし続ける美由希が『タビー』で……

一人周りから離れて、修練という別の事にのめり込む恭也が『匂坂』

で……
形は違えども、皆の前に居られなくなった士郎が『オーヴァン』……
やれる事の少ないと思っているなのはが、差し詰め……

「……『俺』……って所か……」

ああ……これか……この虚しさの正体は……
あの時と酷似した状況に関わらず、俺はまた何も出来ない……
そんな無意識下の無力さが腹立たしかったのか……
十(とお)にも満たない子供(ガキ)で自分を投影だなんて……昔の俺はどれだけガキだったんだって話だよ……
全くのお笑い種だが、ここでふと思った――

「……じゃあ、俺は……？」

俺は『誰』だ？
なのはについては飽く迄も『自分(ハセヲ)に似ている』ってだけで、俺自身の話じゃない……
じゃあ旅団(あ)の頃と比べたら、今の俺は『誰』に当たる……？

『……スマン、猫がコードを抜きやがった……。２匹居てな……まあそれはそれとして、ちと話すか？』

「……『フィロ』……みたいなモンか」

『暇潰し』と称して、幾許も無い時間をＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄで過ごし、俺、三崎（ハセヲ）　亮を始めとする多くのプレイヤーを導いた狸の呪療士（ハーヴェスト）……

『フィロ』……

今思い返せば、俺の行動にはいつもフィロが何らかの形で関わっていた……きっと俺以外にもそんな奴がたくさん居るだろう……

アイツの立ち位置は、言ってみれば『相談役』という名の『傍観者』と言った所か……

自分は大抵、マク・アヌの橋の欄干に置物みてぇに座ってて、（俺は基本突っ撥ねてたが）来る奴来る奴に年寄り特有のお節介を焼いていく……

「……」

もう『幾許も無い時間』は過ぎ去って、アイツのお節介は二度と聞けないが、こうやって思い返せば、自然と脳裏に蘇ってくる……

それに今俺のこの有り様を見たら――――

『何をやっとる……あの家族の力になるなら、やる事が違うだろう……』

――――なんて言われそうで、そう思っただけで笑みが零れて来る……

「……ああ、そうだな……」

……たまには、お節介爺の真似事もしてみるか……

ピッ　ピッ　ピッ
プルルルルル　プルルルルル
ガチャ

「あ、もしもし桃子さん？ちっとトラブってそっち着くの遅れそうだわ……あ？何、怪我とかそういうんじゃねぇよ……言ってみりゃあ……忘れモン？」

とは言え、俺は『フィロ』じゃねぇから、『フィロ』みたいに我慢強くも無いし、まだるっこしい真似も当然向かない……

けど、俺は俺なりの方法で……

第１１話　『繰り返される　同胞の　空中分解』中編（後書き）

う～～～む

良い事書くのは難しい……

自分の様な青二才ではこんな訳分かんない文しか書けませんでした……

更新遅れた上にこの駄文、ホント申し訳ございませんｍ（｜　｜；）ｍ

第１２話　『繰り返される　同胞の　空中分解』後編（幼少期編完結）（前書き

こんにちは
お久しぶりです
天候の関係で『仮面ライダーオーズ』の録画に失敗したヌエマルですコンチクショー

前回からかなり間が空いてしまってスミマセンｍ（＿＿）；ｍ
その理由の一つとして、

今回は『長い』です！

ぶっちゃけ区切り方を間違えちゃったんです（泣）

いつも読んで下さる、はたまたお気に入り登録して下さる読者の皆々様にはホント感謝に言葉もありません！

今回もお気に召しましたら幸いです

第１２話　『繰り返される　同胞の　空中分解』後編（幼少期編完結）

稼業において、感情を面に出す事は二流の行いである……。

「ありがとうございました～～～！」

レジの前に立ち、繕っただけの笑顔で、高町桃子は今日も『翠屋』を営む……。

ここのバイト歴の長い従業員達にも、最近出来始めた常連客達にも、自分を支えてくれる家族達にも、その心中を悟られぬよう……彼女は努めて振る舞った。

「（ハセヲ……忘れ物って言ってたけど……一体何を？）」

疲労を隠し、元気に振る舞いつつ、ハセヲを案じる桃子……

「店長」

「！」

そんな彼女を現実に引き戻したのは、愛しい家族の一人、高町恭也の声だった……。

しかし、仕事中な為、言動が他人行儀だが、それとは別に彼の口調は冷ややかさを纏っていた……。

「小麦粉が切れたので倉庫に取りに行ってきます」

「あ、え、ええ……お願いね」

淡々としたやり取りの末、彼はその場を立ち去る……。
そのキビキビと働く様は、一介の少年にしては余りにも大人びていて、周りを寄せ付けない……。
そんな我が子の背中を見て、桃子は表情を固くしかけるが、何とかそれを心中に思い留める……。

「（……士郎さん……貴方が倒れて、皆変わっちゃった……。……ねぇ、私はあの子達にどう接すればいいの……？）」

この場にいない夫に、桃子はやりようの無い疑問と不安を投げかける……。
人に気付かれないよう……その崩れそうな身を支える手を震わせながら……、

「（……士郎さん……恭也……美由希……ハセヲ……なのは……）」

1

少年、高町恭也の日課は機械だった。

寸分の狂いの無い歯車が噛み合うが如く、その日の計画は正確だ。

学校の後にバイトが入ればこれを迅速に済まし、時間が許す限り肉体の鍛練に勤しむ彼は努めて『個』を捨て、己が肉体が傷付こうとも停止を許可しない――――

己を殺し、己を律し、己を磨く――――

それが、父・士郎の居ない『高町家』の長男、高町恭也の今の日常だった――――

「あったあった。さて……と……」

薄暗い倉庫内にて、目当ての小麦粉を見つけた彼はそれに手を伸ばし――――、

「よぉ……」

「！」

背後から、聞き慣れた家族で無い男の声に手を止める――――

振り向いた先には、倉庫に比べ、明るい廊下の向こう側の壁に身体を預けた、『翠屋』の制服姿のハセヲが腕を組んで此方を蔑む様

に見ていた――――少なくとも恭也の目にはそう映った……。

「……来てたんだな……」

以前ならハセヲに食って掛かる恭也だったが、今の彼はその視線にも「相手してられるか」と言わんばかりに一瞥を投げ掛けるだけだった……。

恭也とハセヲの間には、基本として『礼儀』『遠慮』の類は存在しない……。

剣道をしているだけあり、どちらかと言えば年上への礼儀は気にする方だと自負する恭也だが、今目の前の年上の男相手なら話は別だった……ハセヲに関しては言わずもがなである……。

礼節を弁え、生真面目な『恭也』と、口の悪い、慇懃無礼な『ハセヲ』……性格が丸っきり正反対な二人は典型的な喧嘩友達の様な間柄だった……。以前の道場の試合を始め、二人が喧嘩する場面は実は（大小問わず）数多くあったのだ……。

家族間では「そのバカバカしいやり取りが兄弟の様に微笑ましい」との事だが、士郎が倒れて以来、その回数も減少の一途を辿っていた……。

そんな現状もあって、今の二人の間には、悴む程に冷え切った空気が漂っていた……

「……店長……母さんから聞いたけど、忘れ物で遅刻だって……？アンタらしくも無いな……」

「ん、まあな……。だが、おかげで忘れずに済んだ……」

抑揚の無い声で皮肉る恭也だが、普段冷静に見えて意外と激情家

なハセヲには珍しく、彼はその皮肉をヒラリと回避した。
恭也はそんなハセヲに不自然さを覚え、頭上に疑問符を浮かべたが、そう思ったのも一瞬で、すぐさま正面に向き直り、手にし掛けた小麦粉の袋を抱えて、倉庫とハセヲの傍を後にしようと――――

「……待てよ」

――――した所で、ハセヲに呼び止められた

「……何だよ？俺、今忙しいんだけど……」

「何、すぐに済む……とりあえずコッチ来い」

手短に済ませろと言わんばかりに睨み付けてくる恭也を誘うハセヲ……。
恭也はしぶしぶといった表情で、小麦粉の袋を持ったままハセヲの傍へと歩を進めた。

「……で？何なんだよ？」

「いやなに……、鍛練の調子はどうかと思ってな……」

ぶっきらぼうに訊いた恭也はハセヲの言葉に顔を顰める。

「毎日美由希の制止振り切って随分と頑張ってる様じゃねぇかオメェ……。大黒柱が倒れた後の長男の責任って奴かオイ？」

凭れ掛かっていた背中を壁から離し、ハセヲは恭也の背後に回りながら問い掛ける。

他人の神経を逆撫でる様な口調・言動に対し、いつものハセヲらしくないと思いつつも、その言葉を鵜呑みにしそうになる自分を恭也は必死で抑え込む。

「……居候で記憶喪失のお前には分からないかもしれないけどな……長男の俺には家族を守らなきゃいけない義務があるんだよ……。父さんが起きるまでの間……俺が……」

怒りを少しでも分散させる為か、それとも本当にそのつもりか……、恭也はハセヲの逆撫でに皮肉で対応する。

「その為の鍛練な……ああ分かるぜ、俺だってその位よ……。だからよ……」

「試しても良いよな？」

「え？」

後の恭也はこの刹那、自らの不覚を恥じた――――

バシィィッ！

「っっっ！！！！」

無防備な頬に奔る、鞭打つ様な音と熱の様に帯びる痛覚――――

視界を巡る廊下の四方と全身の無重力感――――

抱えていた小麦粉の袋越しに伝わる床の感触――――

藪から棒の衝撃に一瞬ながら混乱に陥る恭也だが、その混乱は頭を振ってすぐに治め、信じ難い現状を理解し始める――――

驚いた事に――――恭也は今、ハセヲに殴り飛ばされたのだ――――

「な……何を……？！」

抱えていた小麦粉がクッションとなったのが不幸中の幸いか……、床への激突は免れた恭也は打たれた頬を押さえながらハセヲを見据えるが……、

カラン　カラン

「！」

目の前に投げられた物に視線を奪われる。

それは、父や自分が稽古や鍛練の時に愛用する二振りの短竹刀だった。

「……オラ、それでやり返して来いよ……アア？」

それらを投げ渡したであろうハセヲもまた、両手に短竹刀を逆手に持ち、此方を誘う様に右手の二本指で動かして挑発してくる。

……忘れ物とはコレの事か……！と恭也は瞬時に悟ると……、

「……こんの～～～～～～ッッッ！！！！！」

逆上の勢いで短竹刀を拾うや否や、ハセヲに向けて踏み込んだ……！

剣士『高町　恭也』が学ぶ二刀流剣術『小太刀二刀御神流』――

その奥義の一つに『神速』という歩法がある――

それは、自らの知覚の限界を瞬間的に引き出す事で行う、肉体の超加速――

そのスピードは決して比喩では無い――

『御神流』において『絶技』と言うべき技の一つである――

恭也は未だその域には達してはいないものの、士郎をして「並みの剣士なら絶対勝てる」と言わしめた事のある恭也には少なからず速さには自信があった――

父から賞賛された、今尚更なる高みへと磨き続けているこの速さを――

だが――

「――――――ッ！」

「！！！」

■■■■！！

形容出来ぬ音と共に、恭也の首が宙を舞った――――

カチャ　カチャ

『翠屋』の厨房は忙しさが集中する場所だ……。

スイーツ作りの仕事も皿洗いの仕事も、お客様からの注文に並列して増えていく……。

「（……遅いわね恭也もハセヲも……二人とも一体どうしたのかしら）」

そんな忙しい中でも手を止めずに、店長代理『高町　桃子』はこの場にいない二人の身を常に案じていた……。

「（……ハセヲからは連絡も来ないし、恭也は小麦粉取りに行ってそれっきりだし……）」

二人の身が段々と心配になってくる桃子は、一旦手を止めて――――

「……恭也～～～？何してるの？恭也～～～～」

最も近場に居る息子を呼びにその場を離れた――――

「……ッア……アア……？？」

――足の動きを緩め、首に手をやる恭也だが……、

「遅ぇ……」

「！“ドスッ！　バシッ！”があッ！！」

刹那、死を錯覚し、思わずスピードを緩めてしまった恭也は虚を突かれ、鳩尾に拳を喰らい、身体がくの字に曲げる。

ハセヲは攻撃の手を緩めず、その竹刀は恭也の後ろ首目掛けて断頭台（ギロチン）の如く振り下ろされた――

急所に受けた二撃に耐え切れず、恭也はうつ伏せに倒れ込む。そこに――

ガッ

「ぐあっ！！」

起き上がらせまいとするかの様にハセヲの足が恭也の背中を貫く様に乗せられる――

ハセヲの俯瞰に這い蹲る形となってしまった恭也だが、彼はそれよりも自身の首の安否が気になった――

言葉も発せず、呼吸も忘れ、冷や汗が未だ止まらないこの感覚――

――まだ少年と形容される者には耐え難い、死の感覚――

息苦しい――――寒い――――自身の感覚を疑う事しか出来なくなった彼は、自分の首に恐る恐る小刻みに震えた手をやると――――

「首斬れてるぞ」

「！！！！！！」

心臓が飛び跳ねる感覚は全身を光の速さで奔り抜け、その痙攣は恭也を踏み抜くハセヲにも伝わっただろう。

「……イヤ、冗談だ」

「ッ！お前！！」

羞恥と怒りでカッと顔を赤くする恭也だが、そのおかげで彼は正常な呼吸を取り戻す。だが、ハセヲは瑣末にも意を介さず言葉を続ける――――

「冗談で良かったな……」

「何！？」

「俺が真剣だったら、現実（マジ）でそうなってたぜ？」

「ぐッ！」

痛い所を突かれ、恭也は苦虫を噛み潰した様な顔で押し黙ってしまう。

「士郎さんはそうなっても不思議じゃねぇ世界に居たんだってなァ……スゲェよなァ全く……。今のお前とは大違いだ……」

「う、うるさい！！……クソッ！」

恭也にとって屈辱なのは、今自分の胴を踏み抜く男に俯瞰されている事でも、その男の戯言に乗せられた事でも、自分にとって偉大な父と比較された事でも無い……。

自分が今、この男を怖れた事だった……。

父位に強くなったつもりは無くとも、恭也には『自信』があった……。

毎日欠かさない、無茶無謀とも言うべきハードな鍛練……。

それを周りからの制止も振り切り、自分の力だけで、父が倒れてから今日までこなして来たのだ……。

未だ発展途上な感は否めなくても、鍛練より記憶探しを優先する、体格面だけ有利と思っていたハセヲなどには、先程の様な不意打ちで無い限りは負けない『自信』があった……。

……しかし現状、その『自信』は『驕り』であったと痛感せざるを得なかった……。

ホンの一瞬――体感ではそれよりも長く感じたが、恐らく一瞬――の間に、自分は殺されたのだ――

ハセヲと長い自分でも初めて感じた『あの気配』――

今となってもハッキリ思い出せる……ハセヲが此方を睨んだ途端、何の前触れも無く現れたあの気配――きっとアレが……

『死の恐怖』……。
そして、恐らく幻視だろうが、ハセヲと代わる様に現れたモノ――
参の眼（からすきまなこ）――
『死の恐怖』の根源――
『死神』の幻影――
そして、ソレに刎ねられる『恭也』の首――

――そんな光景を幻視している内に自分は捌かれ、今の様に地面を舐めさせられる羽目になってしまったのだから、屈辱に思わない筈が無い。

「ッ……何なんだ、お前……！！」

眉間に皺を寄せ、ハセヲに疑問を投げ掛ける恭也……。
そんな彼に対してハセヲは……。

「……フゥ……そういう質問は俺がしたいな……」

「……！？」

深いため息と共に答えた……。

「……恭也、お前は何の為に鍛練なんかしてんだ？」

「ハァ？今更何言って……」

「いいから答えろ」

「……家族を守る為だって言ってるだろ！父さんが倒れている

今、家の男は俺とお前しかいないんだ！だから、長男の俺が強くなって、父さんの代わりに……」

床に放られた拳を握り締める恭也……だが――――、

「代わりね……こんな体たらくでよく言えたな……」

「ぐッ……！」

心身共に踏み躙られる恭也は悔しそうに歯を食い縛る――――

「……言い訳なんかしないさ……！でも、それなら俺はもっと強くなる！強くなって、母さん達を守る！！その為なら――――“バキッ！”痛テェッ！！！」

決意表明の最中だった恭也の側頭部にハセヲのストンピング（踏み付け）が炸裂した――――！

不意打ちな上、ハセヲの足と床に頭の左右をぶつけた相乗ダメージはさしもの恭也でも声を上げる。

「なびぶんばよバゼヲ……（何すんだよハセヲ……）？！」

左右から圧迫されて顔が変形してしまった恭也はくぐもった声でハセヲに抗議する。

「――――その為なら、お前は士郎さんの様にベッドに倒れても良いってのか……？」

「……え？」

あまりにも静かで、不自然なまでに穏やかなハセヲの呟きに恭也は自らの頭がサッと冷める感覚を覚えた。

「……分かってんのか恭也？お前は自分の事しか考えてねぇ……」

「え、な、何を……俺は……皆の……」

先とは打って変わって、恭也の口調が覚束無い。

ハセヲ相手なら何にでも真っ向から抗議する恭也には珍しい事だ。

「……考えた事があるか……？もしお前が士郎さんみてぇに倒れたら、お前の家族がどう思うかってのを……」

「ど、どうって……」

「お前は倒れた士郎さんを見てどう思った？何を決意した？……お前が倒れたら、美由希やなのはまで今のお前みたいな無茶な鍛練をするって考えた事無ぇのか！？」

「な……そんな事、ある訳が……」

「ある！少なくともお前が現にそうだったろうが！そんなお前を、美由希が、なのはが、桃子さんが、どんな想いで見ていたか、考えた事があんのか！？」

「そ、それは……」

矢継ぎ早に紡がれる、慟哭にも似たハセヲの叫び……。

怒号の様に響くソレは、内に込められた悲痛さによって、対峙する者の反論を許さない……。

「お前が、士郎さんが、ずっとお前等を守ってきた士郎さんが！！お前等にそんな事望むと思ってんのか！！！」

「な……！」

恭也は絶句する……。

彼は我武者羅だった……父・士郎の様に強くなる事に……強くなれば、父の代わりに家族を守れるという、子供らしい重責の負い方、いや逃れ方だったのかもしれない……。

だが、彼は思ってもみなかったのだ……守るべき家族の想いなど……。ただ強くなって、家族を守るのが自分の使命、考えていたのはそればかり……。

だが、実際には――――

「……その想いは、お前だけの想いじゃねぇ……」

「！」

何時の間にか、恭也を踏み付けていた足を退けていたハセヲが静かに言い放った。

「皆同じなんだよ……。家を守りたいってのは、お前だけじゃねぇ……！皆自分に出来る事をして家を守ってんだ！桃子さんは店の経営、美由希は病院へのお見舞い、なのはなんか、まだあんなに小せぇのに全部理解して、家で一人『良い子』でいやがる！お前だって

そうだろ！」

ハセヲはもう恭也を否定しなかった。

ただ、『恭也だけが家族を守る』のでは無い……『恭也達が家族を守る』という事を心に訴えかける様に……、

「一人で気負うな恭也、立てない時は立てないって言って、桃子さんや俺達を頼れ……『家族』に頼るのだって、『強さ』の一部だ」

その声は、とても穏やかだった。

先程恭也が感じた死の気配も今のハセヲには既に無く、その言の葉はまるで、弟を諭す兄の様に穏やかだった。

「俺が言えるのは、ざっとこん位だな……」

「皆に頼るのも……『強さ』の……」

言いたい事を言い終えたハセヲは若干スッキリした面持ちで、その足元で半ば起き上がった恭也は、今のハセヲの話をゆっくりと口に出して反芻している。

「それと恭也、悪ィが、桃子さんに俺が来てるって言っといてくれ……俺はちょっと出る」

「……は？」

何ですと……？！と言いたげに呆気に取られる恭也をよそに背を

向けたハセヲはコツコツと歩を進め、裏口のドアを開く。
「って、おいちょっと、どこ行くんだよ、バイトは？！」
「……その前にもう一人、話をしなきゃなんねぇ奴がいる……何、すぐ戻るよ……」
んじゃな！と手を振って、ハセヲは疑問符を頭上に浮かべる恭也を残して、その場を後にしていった。

幸か不幸か、物影ですすり泣く女性の存在に、二人は気付かなかった――――――――

2

「……その前にもう一人、話をしなきゃなんねぇ奴がいる……何、すぐ戻るよ……」
青年、ハセヲは裏口を出た事で、舞台は反転する。
周囲の建物に囲まれた『翠屋』の裏手は、ちょっとした開けた空

間となっている。
店の営業の過程で出たゴミ袋が一度集められる場所がココである。
殺風景で、決して明るい場所では無いが、周りには袋から零れ落ちたゴミも不良のマーキングみたいなスプレーアートも無い為か、ゴミの集積する場所であるにも関わらず、不思議と清潔感のある場所だった。

そんな場所に彼女……

「……ハセヲおにいちゃん……」

「よう、今の、聴いてたか？なのは？」

高町なのはは居た……。

小さなツインテールを上下に可愛らしく揺らしながら、彼女は首をコクンと縦に振った。

何故彼女がこの場に居るのか、時は数時間前に遡る――――

バ　タ　ン　！

『なのは！』

『ふえぇっ！？……ハ、ハセヲおにいちゃん？！』

なのはがハセヲを見送って、再び静寂に支配された『高町家』に、彼はブーメランの如く戻って来た。
自分の我侭を押し殺し、これから家族達が帰ってくるまで続く孤独な寂寥の時間を過ごすのだなと鬱とした表情で思っていた矢先の事である。

『お、おにいちゃん……、おてつだいは？？？』

予想よりも圧倒的に早過ぎる、加えて唐突過ぎるハセヲの帰還に、なのはは目を白黒させるばかり……。
この短時間に一体何があったのか、それを知らなければ当然の反応だ……。

『その前に忘れモンだ！』

『わ、わすれもの……？な、何をw“ヒョイ”……え？』

『忘れ物』という単語の『物』とは、飽く迄も物品の事である……。

『これとあと……竹刀持ってっとくか……』
『え？え？』

それは決して人を指し示す『者』では無い筈である……。

『よし、こんなモンか！』
『え？え？え？』

だが、人とは時に『人物』とも呼称する為、仮に人を『忘れ物』

扱いしても決して間違いでは無い……。

『よし、じゃあ行くか！』

『えええ～～～～～～～～？？？？？？？？』

……筈。

……なんて事があって『翠屋』にまで連行（ラチ）されて来たなのはだったが、ハセヲに――

『なのははココで待ってろ。これから俺がやる事を見てても聴いても良いが、絶対に入って来るな。いいな？』

――と言い付けられて、今まで一人、裏口のドアに耳を当てながら待っていたのだ。

「そうか……。ま、恭也の奴も一本気だが馬鹿じゃねぇ……今までみてぇな無茶な事はもうしねぇだろうさ……」

肩の荷が下りた様に清々しい表情で、ハセヲは骨の折れる仕事後の様に身体を捻って骨をゴキゴキと鳴らす。

「……ハセヲおにいちゃん？」

「ん？何だ？」

首の柔軟運動をしていると、なのはがハセヲに遠慮がちに訊ねてきた。

「どうしてなのはをつれてきたの？」

「ん？どう……って？」

「ハセヲおにいちゃん……おにいちゃんをしかるなら、なのはいなくてもよかったんじゃ……」

名前の有無でハセヲと恭也を区別しながら疑問を呟くなのは。なのはには今までの会話は飽く迄も『恭也への説教』にしか聞こえていない……。実際にそうであるし、ハセヲもまたそのつもりで恭也と会話していた。但し、それだけでは無い……。

「ん～～～～……、なのは、知ってるか？」

「？」

「恭也の奴、学校では帰宅部、つまり部活に入ってないから放課後が凄く暇なんだぞ？」

「？そうなの？でもおにいちゃん、いっつも『うらやま』とかにでかけてるよ？」

「そりゃアイツが自分からそうしてるだけだ。アイツの学校はただでさえ土曜が授業日なんだから自主トレの暇が少ねぇからな、大方それで特訓量補ってるつもりだったんだろ……」

「へ～～～」と納得の声を伸ばすなのは。しかし、すぐに自分の質問の本懐を思い出し、

「……それで、どうしてなのはを？」

……と訊き直す。

「つまりアイツはその気になりゃ家に居る時間なんざちゃんと作れるんだよ。俺はただ、それもしないってのに腹が立っただけだよ……」

「？」

なのはは未だに理解が及ばないのか、頭に大きな疑問符を浮かべる。

だが、ハセヲの言葉を聞いて――――、

「そうやってアイツが削った時間の間、お前はずっと家で一人頑張ってたんだからな……」

「……え……」

……一拍、呼吸を忘れた……。

「……なのはの……ため……だったの……？」

「ま、そういう事だな。お前も今まで一人でよく頑張ってたな」

ま、恭也には恭也なりの考えがあったから、アイツばかり責められねぇけどな、と付け加え、ハセヲはなのはの頭を優しく撫でる……。

「でもまぁ、こんな事しても忙しいのには変わりないんだがな……これからも俺に仕事は入ってくるだろう……」

「うぅ……」

それを聞いて、なのははしょぼくれた表情になって眉を曲げる。だが、ハセヲが「だからよ……」と続けた言葉を聞いて――――、

「今度の日曜、どっか出掛けねぇか？お前の行きてぇ所へよ……」

「え！」

茶髪のツインテールが今日一番の勢いで重力にピコンと逆らう。

「今まで頑張った御褒美としてだ。それに、いつもって訳には行かねぇが、俺も家に居る時間は作るし、お前の我侭にも少し位は付き合ってやるよ。お前が今まで我慢して来た分までもな」

……ポカン、と口を開けて呆ける様になのははハセヲを見つめる。余程意外な言葉だったのか、彼女はその姿勢のままで、ハセヲへの返事を忘れてしまう……。

「……嫌か？」

「う、ううん！！“ブンブンブン”……で、でも……いいの？」

「当たり前だろ？遠慮する必要なんか無ぇ……『言いたい事はちゃんと言え』……まだ抵抗があるのなら、俺だけでもお前の言いたい事全部聴いてやる……俺達はもう――――」

『家族』だろ――――

「は……」

ポロ　ポロ

「は……」

ポロ　ポロ　ポロ　ポロ

「……って、うおっ？！」

「ハセヲおにいちゃ～～～～～～～ん！！！！」

「おわっ！？」

感極まったなのははポロポロ涙を流しながらハセヲに飛び付く。
飛び付いた勢いよりもその突然の行動に驚いたハセヲは尻餅をついて、胸中になのはをスッポリ納める形となった。
ハセヲはその体勢のまま、よしよしと頭を撫でながらなのはをあやす。
それでもハセヲの胸にしがみ付くなのはに泣き止む様子は無く、その幼い手は『離れないで、離さないで』と訴えんばかりにハセヲの服をギュッと握り締めて来る。

「……」

そんななのはを見ながら、ハセヲは静かに空を仰ぐ……

「（俺が焼けるお節介はこんなモンだが……、これで良いんだよな、フィロ……）」

それは、本当に遠い……、遠い空へ向けての弔い――――

「（って、アンタに訊く事じゃねぇなコレ……。俺は、良かったと

思う……そう信じたいとも思う……）」

自分の胸の中でむせび泣くなのはにも聞こえない、心の声で――

――

「（それと、よ……今更女々しいんだけど……もう一回、言わせてくれ……）」

ありがとう……、フィロ……

なのはＳＩＤＥ

少女は泣き止まない――

ただただ、今までを取り戻す様に涙を流す、声を叫ぶ――

それはまるでダムの決壊――

貯めに貯め込んだ感情が『我慢』という名の水門を壊して涙腺に溢れ返る様はまさしくそれだった――

「おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃ～～～～ん！！！！！」

時折、嗚咽に混じって漏れる声は、少女がしがみ付く青年に幾度となく呼び掛ける――

そこにいる事を確認する様に――

離さない様に――

少女は青年の胸に顔を埋める――

「う……う、うう……」

それでも涙は止まらない――ダムから溢れる水は止まらない――

青年が優しく頭を撫でてくる――

心地良い――込められた暖かさが心地良い――

まるでココが、自分の心の在り所の様だ――

顔を埋めるだけで、満たされていく――幼いその心に全てが満たされていく――

ずっとこの温もりを感じていたいと、少女は欲求にも似た想いを抱く――

その反面――、

「……すぅ……」

「お？……泣き疲れて寝ちまったか……」

……この温もりに身を委ねて、眠ってしまった――

「……すぅ……すぅ……」

……その寝顔は、天使の様な愛らしさだった――

「……ったく、家まで送るかな……」

青年は胸に抱いた天使を起こさない様に、背中にゆっくりと彼女を背負う――

「……バイト大丈夫かな……；」

天使を負ぶった青年は、それだけが不安だった……

「……ハセヲ……おにいちゃん……」

3

ここからの物語は、視点も時間も少しずらそう――

これはハセヲが『翠屋』で恭也と殴り合う前の出来事かもしれないし、ハセヲがなのはを背負って帰宅した後の出来事かもしれない――

表舞台を観覧する観客は決して知り得ない、裏方の物語――

幕間の寸劇を御覧あれ――

海鳴大学病院――

海鳴市で最も大きなその病院は、多くの人々か信頼を寄せる病院――

入院中の患者を見舞う為、そこの白衣達は今日もその白い病棟内で様々な人々と擦れ違う――

「……すみません、『高町　士郎』という方の病室はどちらになりますか……？」

「はい……此方の廊下の突き当りを……」

一人の白衣が立ち止まる……

今しがた視界に入った、看護士に行き先を訊ねる男――

その口から『高町　士郎』の名を告げた男――

――やけに目立つ男だ……、それが第一印象だった――

まず目に入るのは青い髪……日本ではまず見られないその髪の色から外国人を思わせる、身長も１８０ｃｍ程度といった、型にはまった様な長身痩躯だ――

だが、その余りに流暢な日本語はそんな外人的な雰囲気を打ち消す程イメージが掛け離れている――

「そうですか、有難う御座いました」

「いえいえ、お大事に」

看護士との会話が終わって此方を振り向いた事で、その男の表情を確認――出来なかった……。

その男は端正な顔立ちを、サングラスで隠していたからだ――

???SIDE

その男は『高町　士郎』のネームプレートが表示されたその病室へ、ゆっくりと足を踏み入れた……。

「すぅ……すぅ……」

その部屋は見舞いに来たと見える眼鏡の少女の寝息と――

ピッ　ピッ　ピッ

患者に繋げられた心音測定用の機器からの電子音が耳に残る程静かだった――

「……娘がお見舞いに、か……。幸せ者だな、君は……」

傍らで眠る少女を撫でると、その男はベッドに横たわる患者を見遣る。

最早肌の色を見る隙間も無い程の包帯でミイラの様に巻かれた彼は、見る者の不快感を助長する。

「……士郎……君のその昏倒は必要な物だった……物語の羅針盤をある向きに向けさせる為に……」

男は感情を込める事無く、その透明な言葉を士郎へ送る――

「そして……君の復活も……」

そして、男は右手を士郎の頭上へと翳す――

「……巻き込んですまない……“リプメイン”」

聞こえたか分からない懺悔と共に放たれた、水面に雫の滴る音――

光が士郎の身を包んでいく――

それは、とても暖かな、優しい光だった――

男はその白い筐を後にする。自分の役目を終えたかの様に――

「……物語は終わらない……俺達が足を止めない限りは……」

誰に向かうでも無く、男は呟く――

「さあ、ハセヲ……俺はもう歩み出したぞ！お前はこの先、一体どんな物語（みち）を歩み出す？」

――俺の物語（みち）を追うのか？

――俺と物語（みち）を違（たが）うのか？

――それとも、俺と並んで歩くのか？

「……ああ、やはり未来というのは、待ち遠しい……」

世界の何処かの少年も見上げた、窓の外の青空を仰ぎながら、男は不敵に微笑んだ――

――

――

――

――そして、物語は数年後、

なのはが小学3年となる頃に動き出す――

第１２話　『繰り返される　同胞の　空中分解』後編（幼少期編完結）（後書き）

……という訳で、今回で『なのは幼少期編』は完結で、次回の更新からは『無印編』スタートの予定です！

次回の更新は勿論未定！……頑張ります！！

序章　『開闢せし　星の　光』（前書き）

こんにちは
許可無く1ヶ月休載して御免なさいm（＿　＿）mヌエマルです
同時連載は難しい……
取り合えず1ヶ月はコッチに集中する予定ですので、宜しくです。
都合良く物語の節目なので、今回は短いです……重ね重ね御免なさいm（＿　＿）m

序章　『開闢せし　星の　光』

???side

――とある森に、『彼』はいた――紅い筋の走る片腕を抱え、息を切らす『彼』はそこの道無き道を走る――、

走る――――――、走る――――――、走る――――――、奔る――――――、

視界を遮る木々と草々が、後ろへと流れていく――、

脚には既に感覚など無い――ただ速く、速く動かす――それ以外の機能などカットしてでも――少しでも速くそれらを動かす――

潰れた脚の肉刺(まめ)が痛くて堪らない――、乳酸の溜まった膝も限界だ――

それでも走らないと――、走らないと――『アレ』が――

『――っうわっぷっ!!』

何と運の悪い事か――――、雨にでも降られたであろう、ぬかるんだ地面に『彼』は飛び込んでしまった――――吸い込まれる様に転んだ『彼』の脚は、油の差していないブリキの様に動きが悪い――

『くっ……！ダメか……』

これ以上は走れない――――、足の怪我具合を見て、そう判断した『彼』は逃げるのを止める――

少年はその場で走って来た道を振り返り、覚悟を決めた――

――『アレ』を止める覚悟を――

息を押し殺し、目を配り、耳を傾け、『アレ』を待ち構える――

――大きな音が聞こえてくる……。ブルドーザーが地面を走る様な音が、空気を、地面を伝って『彼』の身体を叩いてくる――

音は徐々に近くなり、地響きも大きくなっていく――――やがて、『アレ』が見えてきた――

それを視界に確認するや否や、『彼』は懐からソレを取り出し、掲げる――――

ソレは赤い、小さな『星』だった――――

「――――妙なる響き、光となれ！　赦されざる者を　封印の輪に！！」

『彼』の唱える祝詞に応える様に、『星』はその輝きを増し、その光が幾重もの幾何学模様を示した円陣を編み出す――――

『アレ』が速度を上げる――――轟音と共に『アレ』は近付き始め、その紅い瞳は獲物を捉え、飛び込む――――！

それはその瞬間と同時だった――――

「ジュエルシード！封印！！」

『星』の輝きは最高潮に達し、その光が『アレ』だけでなく、辺りに広がる森中の木々をも包み込む――――

暖かなその光はとても眩く、何もかもを包み込んでくれそうなソレは『星』の光という形容に相応しい輝きだった……。

だが――――、

コポ……

「！？」

突如としてそれは『正面から』現れた――――

ゴポゴポゴポゴポゴポゴポゴポゴポゴポ

『アレ』の内側から現れたのは『泡』の様な『闇』だった――――

「何だ、コレ……！！？」

沸騰する様に湧き出る『泡の闇』は『アレ』の全身を包み込み、『星の光』を遮る――――

『光』は『闇』を排斥し、『闇』は『光』を侵蝕する――――

時間が経つに連れ、拮抗する陰陽の『相互否定』は一層その規模を増し――――やがて、

バ　ン　！！

「うわぁっ！！」

鼓膜を破りかねない音と共に、『彼』と『アレ』は互いに後方へと大きく吹き飛ばされてしまう――――

『光』と『闇』は治まり、元の緑の深い森が辺り一面に広がる――――

そして、その色彩を穢す『アレ』は、先のぶつかり合いで体力を消耗したのか、力無く、ズルズルとその場から逃げる様に去っていく……。

そして『彼』は――――、

「ッ……逃がし、ちゃった……追いかけ、なく……ちゃ……」

それきり、『彼』の口と瞼はゆっくりと閉ざされた――――

――誰か……僕の声を聞いて……。

――力を貸して……。

――魔法の『力』を……。

『彼』の想いは、『世界』へと浸透していった――

序章　『開闢せし　星の　光』（後書き）

次回からＴＶシリーズを見返しながらの執筆です。
もう一方でも同じ事やってて、もう頭がてんてこ舞いですが、努力します……。

第1話　『賑やかなる　新しい　朝』（前書き）

ＰＶ１２６０００アクセス突破！
ユニーク２１００人突破！

気が付いたらこんなにも！なのはの人気は凄いな～……

私めの駄文に付き合って下さる皆々様には感謝に言葉も無いです！

第1話　『賑やかなる　新しい　朝』

この広い空には、幾千、幾万の人達が居て――

色んな人が、願いや想いを抱いて暮らしていて――

その想いは、時に触れ合って、ぶつかり合って――

だけど――

その中の幾つかは、きっと繋がっていける――

伝え合っていける――

これから始まるのは、そんな出会いと触れ合いのお話――

海に臨み、山に囲まれ、水平線の向こうまで青い空が澄み渡る『海鳴市』――

この街から――

物語は始まる――

♪～～～♪～～～

「う、ん……」

そのとある部屋に軽快な音楽が鳴り響く……携帯電話に設定して

いた、起床時間のアラームだ……。
耳に心地の良いその音楽は朝の目覚めにはうってつけだ。部屋のベッドに蹲る小柄な身体がモソモソと動く。
ベッドの中からその小さな手を伸ばす小動物は――――

ゴトッ

「あ……」

モソモソ

……ベッドの下に落とした携帯電話のアラームをピッと止める……。

「ふみゅう……何か、変な夢見ちゃった……」

ベッドから起き上がる小さな手の主は、その幼い手に見合う、幼い女の子であった。
長めの茶髪は寝癖で四方八方に飛び散って、まだ眠気の抜けない半眼を擦りながら、ここ『高町家』の女の子『高町　なのは』はネコの様に伸びをして、徐々に信号伝達の覚束無い脳を覚醒させる……。

「……ムニャ……もうちょっと……」

モソモソ……

覚醒させ……、

「……」

モソ……

……覚醒……させ……、

「……スゥ」

……

……覚醒……、

ムギュリ！

「ひにゃあああああああああああああああ！！？」

「何が『もうちょっと』だよこのバカ」

……覚醒させた、いや、させられた……。ベッドの『主』たる青年に鼻を抓まれるイベントは、なのはにとって布団から飛び起きる程の衝撃であったという……。

「ひ、ひはいよ、ふぁ、ふぁせふぉふぉにいてぃあん……」

「……ったく、また潜り込みやがって……」

起きたばかりの肌が柔らかいなのはの鼻をムニムニと抓みながら、ウンザリとした表情で呆れる青年……。なのはと同じベッドの上で胡坐をかく彼は、寝起きの頭をボリボリと強めに掻き毟る（それでも鼻を抓む手は離さない……）。

そんな青年『ハセヲ』の部屋と何時の間にか化した客間で起こった、『高町家』の朝の一コマである。

1

――――――ハセヲが此処『高町家』の居候となって早数年……。

『高町家』の朝は早い。それはいつもの事……店の経営を行う人は何処もそんな感じだ。

特に自営業である『喫茶　翠屋』は店長やパティシエである『高町夫妻』が居なければ始まらないが故、二人の出勤の為に他の一家一同も早起きが習慣付くというもの。

かくいう居候もこの家に転がり込んで（巻き込まれて）から随分とそれに慣れた。

シャカシャカシャカシャカ

「あ〝ーーー目覚め悪ィ〜〜……」

「？大丈夫ハセヲお兄ちゃん？」

「誰のせいだ誰の……」

未だ全開しない瞼を持ち上げながら洗面台にて歯を磨く居候の青年『ハセヲ』と隣でツインテールを結わう小さな少女『高町　なのは』……。

かつてはネトゲ三昧で成績・体調共に不調な時期を経験した事のあるハセヲも、今ではすっかり、この早寝早起きな健康的な生活に慣れていた。

何故なら、ハセヲと『高町家』が出会って、もう年単位で時が過ぎていたのだから……。

「（……そりゃなのはも大きくなるわな……）」

隣で桜色のリボンを慣れた手付きで結ぶ小さな少女に視線を落とし、ガラにも無くしみじみと思うハセヲ。顎が首に付く程見下ろしていた彼女の背もすっかり伸び、まだまだ幼さは残るものの、そんな彼女はもう小学3年生だ。

「？お兄ちゃんどうしたの？私の顔に何か付いてる？」

「いや……小学3年になってもまだ俺と寝たいって所はまだ子供だなって思ってな……」

「な／／／何言ってるのお兄ちゃん／／／／／／／？！」

結んでいる最中だったリボンをポトリと手離し、カッと顔を紅くするなのは。

「ハハ、そう言われるのが嫌なら、早いトコ兄離れ……になるのか？……するんd「ヤダ！」……は？」

「ハセヲお兄ちゃんと寝るのが子供だったら、私一生子供でいいも

ん／／／／／／！」

「将来よりも目先の利益！？」

歯磨き粉が飛び散りそうな程の声でツッコミを入れるハセヲは堂々過ぎるなのはから向き直り、正面の洗面台の鏡を見る……。

「（……そういや、この世界で俺が最初に自分の姿を見たのもこんな鏡だったな……）」

あの時は『高町家』ではなく『病院』の化粧台だったが、そこに映るのはあの時と寸分違わない同じ姿……。

「（……鏡の俺の姿は……数年経っても変わらねぇな……）」

背も顔付きも何も変わらない自分の鏡像を見て、ハセヲは自分だけ、この世界の時間に置いて行かれた様な感覚を覚えた……。

「おはよー」

「あ、なのは。おはよう」

「お早うさん……」

「お！ハセヲも起きたか。お早う」

洗面台の用事を済ませたハセヲとなのはは二人揃って、リビング

に足を運ぶ。一足先に起きていたなのはの父母が迎え入れるリビングには朝の日差しが差し込み、朝食の良い匂いが立ち込めていた。

「はいなのは、これ持って行って」

「は～い」

なのはにマグカップの乗ったトレイを渡す女性、世界の時間に置いて行かれた人その２『高町　桃子』……数年前、ハセヲが出会った頃と寸分変わらぬ美貌の『翠屋』パティシエは今も尚健在であった。年月に比例して歳を重ねたにも関わらず、２０代辺りの若さを保ち続ける彼女はハセヲに『バケモンかアンタ……』と言わしめたのは『高町家』ではあまりにも有名である。

因みに言わしめた後、二人きりで『お話』する事になったという事をココに追記しておこう……。

「お父さん、お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

「ああ、道場の方じゃないか？」

「またいつもの鍛練かよ……アイツ等朝っぱらからよくやるモンだなオイ」

テーブルに並ぶ椅子に座って今朝の新聞を読む精悍な男性『高町士郎』は背後に振り向き、庭の向こうに建てられた道場に視線を移す。数年前の事故によって負った怪我も今ではすっかり回復し、後遺症も見られない。彼の死の淵からの生還は一家全員諸手を挙げて喜んだ事は今でも記憶に新しく思える。

二人とも、ハセヲがこの世界に来てからとてもお世話になってい

る、ハセヲにしてみれば『恩人』とも言うべき存在だ。ハセヲを記憶喪失と勘違いし、それ以降、自分の境遇や事情を特に詮索もせず、今日まで厚意で家に置いて貰ってる事はハセヲも恩義を感じていた。
そんな『高町家』に居候を続けて、ハセヲも彼等に対する見方もこの数年で若干変わって来ていた……。

「ハセヲ、そろそろ朝食だから二人を呼んで来てくれないか」
「ハァ？俺かよ！あの中に俺が行ったら絶対（ぜってー）逆効果だぞオイ！？」
「そう言うなハセヲ、一応お前が一番『お兄ちゃん』なんだからな」
「ガキ扱いすんじゃねぇ『クソ親父』！」
……と言いながらもおずおずと足を運ぶハセヲ……。
「あ！ハセヲお兄ちゃん、私も「お前は『お袋』手伝ってろ」……
……は～い……」
そして、同行を断られ、しゅんと軽く落ち込むなのはであった……。

――――所変わって『高町家』道場……。
「ハッ！　ハッ！」
気合の篭った掛け声と共に、ブンブンと木刀が空を斬る音が聞こ

えて来る――――

高めのソプラノ調だったその掛け声は女性のそれだと、入口の目の前に立つハセヲはすぐに分かった。

そして、道場に入り浸る様な女など『高町家』に一人しかいない……そんな分かり切った事を考えながら、ハセヲは入口の引き戸をガラガラと開けて、道場の二人に呼び掛ける。

「恭也、美由希」

「！ああハセヲっち！おはよう！」

「お！やっと起きたか……おはようハセヲ」

「おう、お早うさん……」

ハセヲの予想通り、木刀を素振りしていたのは、ジャージと半袖という出で立ちの三つ編みお下げの高町家長女『高町　美由希』だった。普段なら冠詞に『眼鏡を掛けた』が付く彼女だが、流石に鍛錬時は掛けていると危ない為、それを外していた。その為、今はその眼鏡の奥の汗迸る素顔が惜しげも無く晒されている。

そんな彼女にハセヲは持参して来たタオルを投げ渡す。

「ホラ美由希、タオルだ」

「“バサッ”お！ありがとハセヲっち！」

「その呼び方いい加減やめろっつの……」

そんなハセヲの言葉も何処吹く風と言う様に美由希は投げ渡され

たタオルで気持ち良さそうに汗を拭く。

「全く遅いぞハセヲ……いつも思うんだが、もっと早く起きれないのか？」

「だからお前らと一緒にすんなっつの！ソッチが早過ぎんだよ！」

ずっと以前から言い続けているといった口ぶりで話し掛ける長身の高町家長男『高町　恭也』。腕まくりをした袖から晒される筋肉がその鍛えぶりを物語り、顔付きも幼き日の面影を思わせつつも、それでいて士郎に似て男らしく成長していた。身長の方も数年経った今ではすっかり年上のハセヲを追い抜き、今ではハセヲが恭也を『見上げる側』となってしまっていた。

そんな恭也はクールで重々しい口調でハセヲと話すが、鍛練に何ら興味を示さない当のハセヲは、それに憎まれ口で応えるのみ……。

木刀を振る手を休め、タオルで汗を拭く美由希も『また始まった……』と言いたげな表情でそのやり取りを眺めている。

「まあいい、じゃ、ハセヲも来た所で……“ガサゴソ”俺達も始めるか！」

「……やっぱそう来るか……」

恭也はクールな面持ちから一転、嬉々とした表情で木刀2組……双剣サイズの短めの物……を何処からとも無く取り出し、その1組をハセヲに投げ渡す。

ハセヲはそれを受け取るが、その表情は対照的にウンザリ……というかゲンナリといった具合……。因みに脇では美由希が面白いモノを見る様に2人の間に立ち会っていた。どうやら止める気は無い

様だ……。
当の恭也も手首足首を撓らせて軽い準備運動を行っており、やる気満々の様子……先程のクールな偉丈夫は何処へやら……。ハセヲはハァ……と深い溜め息をついて……、
「よし！行くぞ！！ハセw“バフッ”もぶっ？！」
「『よし！』じゃねぇよ……」
持って来ていたもう1枚のタオルを恭也の顔面に投げ渡す……。
「もごッ！もごごッ！！……ぷはぁ、ハセヲ！お前何をS“ベシッ”へぶっ！！」
「そりゃコッチの台詞だ……もう朝飯だからとっととキリつけて来い『猪恭也(いのしし)』」
「……ハイ」
タオルから顔を出した所を叩かれ、恭也はそれきり何も言えなくなった……。背の低い男に諭される背の高い男……傍から見れば『次男に諭される長男』というシュールな光景に見えなくも無かったという（実際の年齢は逆）……。
「面あり！一本！「遊んでないでお前も来い！」ハ～イ♪」
そして美由希は飽く迄マイペースだった……。

2

「んん～～～♪今朝も美味しいな～～、特にこのスクランブルエッグが」

「本当～～！トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なの♪」

「皆あれだぞ。こんな料理上手なお母さんを持って幸せなんだから、分かってんのか♪」

「親父……それいい加減耳にタコだって……」

今朝の朝食も普段通り、「もうやだ～アナタったらv」「ん～～？あははははv」と高町夫妻の新婚ホヤホヤ並みのイチャイチャぶりを肴にして、目の前の料理を口に運ぶハセヲ……。月日を重ねる度にどんどん拍車が掛かって来ているこの仲の良さは、慣れぬ者が見ればあっという間に腹一杯になるか、砂糖を吐くか、どちらかの反応を示すだろう……。

閑話休題（それはさておき）

並べられた料理は士郎の言ったスクランブルエッグを始め、焼き魚もあればトーストもある等、和洋折衷選り取り見取り色取り取りな朝食で、しかもその何れもが士郎の言う通り『美味い』……。

「（……俺の舌も肥える筈だ……）」

元の世界においては、両親の仕事の関係で一人暮らし同然な生活

をしていたハセヲも一応料理は出来るが、所詮は『男料理』……。桃子という『母の手料理』を口にしてからはそれを行う回数もめっきり減ってしまっていた。
ハセヲが『料理』と呼べる作業を行う機会と言えば――――、
「あ！そうそうハセヲ！今日の１２時辺りから『翠屋』の方、お願い出来るかしら？」
「げぇ……」
桃子からの急な呼び出しを聞いた途端、青筋を立てるハセヲ。接客業は苦手分野（と言い張る）なハセヲにしてみれば珍しい反応では無かったが、ハセヲの嫌悪感は別にあった。
「またケーキ作りの手伝いかよ……」
「そう嫌そうな顔しないの。毎日注文が多くて大変なんだから」
「……まあ、俺も責任の一端を担ったみたいなモンだし、行きますよちゃんと……」
「うん、アリガト♪流石『縁結びのハセヲ』ｖ」
「……神社じゃあるまいしその呼び方止めろっつの……；」
『翠屋』において、ケーキの注文が多い事は何ら珍しい事では無い……。だが、その中にハセヲが絡む事に重要な意味があるのだ。
「いや～、『縁結びのハセヲ』は引っ張りダコだね～ハセヲっちｗ」

「美由希……お前もその片棒担いでんの分かってんのか……」

さてね♪とあっけらかんと答える美由希にますます頭を抱えるハセヲだった……。

実は此処数年で、『翠屋』には一種のジンクスらしきものが出来ていた。それは『翠屋のハセヲが作ったケーキを食べるとご利益がある』というベタなモノであった。その内容が『恋愛成就』『夫婦円満』等、人によってその認識にバラつきがあるが、その何れもが『縁結び』関係であったのが二つ名の由来である……。

その発端となった出来事とは数年前、ハセヲが『高町家』を家族崩壊の危機から救った事件の事である。その直前に美由希と一緒にケーキ作りを行った出来事と入り混じる等の紆余曲折あって口伝(くちづて)に広まったジンクスがそれなのだ……。

因みに口伝の発端は桃子参加の井戸端会議だったという事はハセヲが知る由も無い。

「ったく、何がジンクスだよ……要は何の根拠も無い噂に縋ってるだけじゃねぇか……」

「ハハ、ま、『ジンクスは信じた者勝ち』とも言うし、女子はそういうの信じたくなるんじゃないか？」

不貞腐れるハセヲを茶化す恭也。「恭也てめぇ……」とハセヲはその一言に少しカチンと来たのか――、

「……ああ、真っ先にジンクス(それ)に縋り付いてちゃっかり彼女ゲットした恭也が言うと説得力あるな」

「ブッ！！」

皮肉たっぷりのハセヲの切り返しに恭也は口に含んだコーヒーを勢い良く噴き出す。

「ゲホッ！ゴホッ！……ま、待てハセヲ……ゴホッ／／／／！何故そこで忍を出す／／／／／／！？ゲホッ！！」

「うっせぇ、お返しだ『人生勝ち組』！俺のケーキ食った身で他人事みてぇに言ってんじゃねぇよ」

色んな意味で顔を真っ赤にする恭也は咳き込みながらハセヲに断固抗議するが、ハセヲは箸を弄りながらどうでも良さそうに答える。

因みに恭也の彼女の『忍』なる女性の紹介はまたの機会に……。

胸元を叩きながら気管を整えた恭也はお返しと言わんばかりに適当に思い付いた事を口にする。

「そ、そういうハセヲこそ、味見とかで一応ケーキ食べてるだろ！現にお前、店の方とかでも色んな子と話してるし、いつだって身持ち固められるんじゃないのか！？」

「人をハーレムの主みてぇに言うな！ありゃただの接客だ！それにケーキ味見しただけでホイホイフラグ建てられたら世の中の男は苦労しねぇよ！！」

「あ、でも私のクラス……ていうか高校にもハセヲの事噂してる子いっぱい居るよ？」

「は？」

「中にはハセヲの作った『縁結びケーキ』をハセヲと縁結びたくて買うって子も結構いるよ～wこの～……モテヲっちwww」

「ほら見ろ！お前はケーキ味見しただけでホイホイフラグ建ててるじゃないか！」

「だから、それとこれとは話が別だろうが……ってかお前はお前でどんだけジンクス信じまくってんだよ！」

美由希の噂話を皮切りに始まる低レベルな口喧嘩……普通なら両親は喧嘩を仲裁するモノだが、此処『高町家』ではそれも一種の風物詩の様に微笑ましく見守るのみ。せいぜい「いやはや、ウチの子達は皆仲が良いなぁ」「ホントね～」という位であった……。

そんな仲良し（？）二人組の口喧嘩がある程度進んだ所で、またしても美由希が油を注ぐ……。

「でもさ、ハセヲっちも気になる子とかいないの？まさか本気で女の子に興味無いってんじゃないでしょ？」

「お前は俺に何を期待してんだ？」

「べっつに～～♪ただ……」

一拍おいて――――、

「私は何時でも空いてるから、そこへんヨロシク♪」

「は？」

……冗談とも本気とも取れぬ言葉にハセヲの脳は翻訳が遅れる……。士郎と桃子は「「おお～～」」と感嘆し、見れば恭也も「なっ！オイ美由希？！」と本気で動揺している。

ハセヲは美由希に真意を追究しようとするが――――、

「オ、オイ美由k「だ、ダメェ～！」ん？」

それを遮ったのは、先程まで話に参加していなかったなのはだった……。それも態々自分の席から下りてハセヲの服の裾にヒシッと皺を作って抱き付きながら――――、

「お兄ちゃんはなのはのなの！！お姉ちゃんでも譲らないの！！」

「は？」

と、小さな身体の何処から出してるのか疑う程の大声で堂々と爆弾発言をするなのは。そしてその対象たるハセヲは目が点になり、『この子何言い出してるの？』と言わんばかりに呆気に取られている。

そんなハセヲを他所に周りの者は４者４様の反応を見せる。

士郎は「ハハハ、相変わらずなのははハセヲにゾッコンか」と率直な感想を述べ――――、

桃子は「アラアラ、『高町　ハセヲ』が生まれる日も近いかしら？」と臆面も無くシャレにならない発言をし――――、

恭也は「オ、オイハセヲ！お前一体ウチの妹達に一体何を！！？」と動揺に拍車が掛かり――――、

美由希は――――、

「は！ま、まさかハセヲっちにはソッチの趣味が？！」

「あるか！ってかソッチって何だ！！」

一番失礼な事を考えていたりする……。

「ハハハ、いや～毎度の事だけど、我が家の朝は賑やかで良いね～」

そんな兄妹達の喧騒を前にしても、高町夫妻はそれを微笑ましく見守る……。

「ウフフ、けどそろそろ学校に行かないと遅刻しちゃうんじゃないの？」

「「「え？」」」

そしてその火消しも夫妻にとっては造作も無かったという――――

――

――

――

――

――

「「「ああ！！学校！！！」」」

――――こうして大抵はこの一言で朝のドンチャン騒ぎは終わりを告げるのであった……。

「……この人、実は最強だよな……」

「うん？何か言った、ハセヲ？」

「いんや何も……」

第1話　『賑やかなる　新しい　朝』（後書き）

前々回から数年経って、ハセヲもすっかり高町家に順応しちゃいましたw

第２話　『終わり告げし　非日常への　鐘』前編　（１１／２８　加筆）（前書

こんにちは
風邪と寝不足をこじらせていたヌエマルです。
安定剤飲んで更新速度と引き換えに睡眠時間を得ました。
※１１／２８　加筆しました。

第2話　『終わり告げし　非日常への　鐘』前編　（11／28　加筆）

「じゃ、気を付けて行けよ、なのは」

「は～い、ハセヲお兄ちゃん行ってきま～す！」

いつもの朝の風景――――、いつものスクールバス――――、いつもの妹分の送り迎え――――、

ハセヲにとっては『いつも』の朝――――

「なのはちゃん」

「なのは～コッチコッチ～」

「あ！すずかちゃんアリサちゃん！おはよ～」

友達との挨拶――――、友達との談笑――――、友達との笑顔の交換――――、

なのはにとっても『いつも』の朝――――

とても暖かな『いつも』の始まり――――

だけど――――、

『いつも』の夜は迎えられる――――？

1

――この前皆に調べて貰った通り、この街には沢山のお店がありましたね。そこで働く人達の様子や工夫を実際に見て、聞いて、大変勉強になったと思います。

――このように、色々な場所で、色々な仕事がある訳ですが、皆は将来どんなお仕事に就きたいですか？

――今から考えてみるのも良いかもしれませんね。

「将来か～……はむ」

私立聖祥大附属小学校……昼休みのその屋上のベンチにて、お弁当のタコさんウィンナーを口に運びながら物思いに耽るなのは。

『海鳴市』を水平線まで一望出来るこの学校の屋上には様々なモノが集まる。

友達を連れて昼食を摂る学友達も、グラウンドで汗水を流す青春の喧騒も、潮風が運ぶ潮の香りと船の汽笛の音も、皆屋上に集まってくる。

なのはもまたその内の一人として、仲の良い友達を連れて昼休みを満喫していた。

そして、先生の言葉を朧げに反芻するなのはは隣に腰掛ける親友

二人に今日の授業で取り扱った『将来の仕事』についての話を振る。
「アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まってるんだよね？」
「ウチは、お父さんもお母さんも会社経営だから、一杯勉強して、ちゃんと跡を継がなきゃ……位だけど」
腰まで伸ばした金髪の左右を軽く縛った少女『アリサ・バニングス』はおにぎりを片手に更に隣の少女へ視線を配る。
「私は機械系が好きだから、工学系で専門職が良いなって思ってるけど」
話を振られた、白いカチューシャが目立つウェーブの掛かった紫色の長髪の少女『月村　すずか』もまた、弁当を口に運びながら、自分の将来を見つめる。
「そっか……二人とも凄いよね……」
二人の親友の話を訊き、なのはは自嘲気味に俯く。
将来の考え方は人それぞれだが、アリサの様に家業を継ぐ様に考える者も居れば、すずかの様に好きな物に携われる仕事を選ぶ者も居る。特殊な例を除けば、基本的にこの2通りに大別出来る。つまり『親類と同じ仕事』か『自分が好きな仕事』かという違い。
だが、なのは達の年齢では、将来の話はまだ漠然としていて当たり前だ。なのはが自嘲する必要など全く無い……が、やはり『将来を見ている』という点は人間にとって大きな優位性（アドバンテージ）に感じるものだ。
「でもなのはは『喫茶　翠屋』の2代目じゃないの？」

そんななのはを見て、アリサがパッと思い付く『なのはが就きそうな仕事』を挙げてみる。なのははウン……、と首肯するが、その顔色はやはり浮かない様子。

「……それも将来の選択肢の1つだとは思うんだけど……やりたい事は何かある様な気もするんだけど……まだそれが何なのかハッキリと分かんないんだ……」

私、取り柄も特技も特に無いし……、と、なのはの顔はますます沈……。

「バカチン！」

「え！“ペチャ”へうっ？！」

……み掛けた所で突然の罵倒になのはは目を丸くした。

驚いて顔を上げた次の瞬間には何故か輪切りレモンがなのはの頬に湿った音を立てて貼り付いた。犯人は3人の中で唯一レモンが弁当の中に添えられていたアリサだ。

なのはの頬のレモンは酸味の仄かな香りを漂わせていたという……。

「自分からそういう事言うんじゃないの！！」

「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ない事、きっとあるよ！」

アリサの叱咤に同意するすずか。なのははそんなアリサの有無を言わさぬ妙な迫力に口がポカンと開く。

「大体アンタ、理数系はこの私より成績良いじゃないの！それで『取り柄が無い』って、どの口で言う訳～～！？」

「ア、アリサちゃん……へにゃ！！」

「この口！？この口か！！それともこの口か～～～～！！！！！」

ビヨヨ～～ン　ビヨヨ～～ン　ビヨヨ～～ン

という効果音と共にアリサは怒りと共になのはに馬乗り、その口を弄って弄って弄りまくる……。

「ひにゃにゃ……だっひぇなのひゃ、ぶんくぇいにがへだひ、たいぃふもにがへだひ～～～～！（訳：だってなのは、文系苦手だし、体育も苦手だし～～～～！）」

なのはの涙ながらの弁明も「こじ付けがましいわ！」と裁判長（アリサ）に一蹴される。

「あぅ……ふ、二人ともダメだよ～～！ねぇ、ねぇったら～～～～；」

すっかり蚊帳の外になっていたすずかの制止も聴かず、アリサの暴走は続く。そんな珍騒動に他の生徒達が気にしない筈も無く、屋上に居るちびっ子達は徐々に彼女達に群がって行き、ちょっとしたギャラリーになりつつあった……。

そんな状況の変化を見ていたのは三人の中ではすずか一人だけだったが、他の親友二人のじゃれ合いとそれによって出来た人だかりに引っ込み思案な彼女は尚更オロオロするばかり……。

「い、いひゃいよありひゃちゃ～～～ん（訳：い、痛いよアリサちゃ～～～ん）」

「うっさいこのバカなのは！！それともアレ！？アンタ将来あの『翠屋』で働いてるお兄さんみたいなフリーターになりたいの！？」

「……ひぇ？ひゃひぇをほにいたんのほと？（訳：……へ？ハセヲお兄ちゃんの事？）」

なのははパチクリと反応する。

「そうよ！なのはん家の居候だか何だか知らないけど、あの人みたいなバイト三昧な将来はジリ貧になるのがオチよ！アンタまでそうなるなんて私は……って？」

許さないわよ！と言おうとした所でアリサは言葉を詰まらせる。

と言うのも……、

「……ひょーらいが……ひゃひぇをほにいたん……（訳：……将来が……ハセヲお兄ちゃん……）」

なのはの目に熱が篭り出したからだ。

アリサはそのなのはの頬を抓った両手を止め、「……ちょっと、なのは？」と訝しむ。傍らでうろたえるすずかも、そのなのはの様子を覗き込む……。

「……ひゃひぇをほにいたんが……ひょーらい……（訳：……ハセヲお兄ちゃんが……将来……）」

自分に馬乗るアリサや恐る恐る覗き込むすずか、そして三人を取

り囲むちびっ子達のギャラリーを他所になのはは頬を抓られたまま、その未成熟な身体の割りに逞しい想像力を以てして……、

「……ひゃひぇをほにいたんほの……ひょーらい……（訳：……ハセヲお兄ちゃんとの……将来……）」

……接続詞が歪曲した……。

―

―

―

―

―

―

―

『よおなのは、今帰ったぞ』

『お帰りなさい、ハセヲお兄ちゃん♪』

『おいおい、何時までそう呼ぶ気だよ。他に呼び方があンだろ？』

『ええ……でも……恥ずかしいよ……／／／／／／』

『……ったく、しゃーねぇなぁ……。だったら今ココで……』

『？……え、ふえっ？ハセヲお兄ちゃん？？？』

『恥ずかしくならないように……してやるよ……』

『あ……』

――――――――――――――――

――――――――

――――――

――――

――

「きゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っｖｖｖｖｖ」

ガバッ

「ふわっ？！？！」

「ハセヲお兄ちゃ〜〜〜〜んｖｖｖ」

「ちょちょちょ、なのは！？私はアリサだってば……って何やって……うわわわわ！！！」

ゴロゴロ　ゴロゴロ　ゴロゴロ　ゴロゴロ

「あわわわ〜〜〜〜な、なのはちゃん…………？？？？」

年齢差をガン無視したキャスティングでお送りしたツッコミ所満載な妄想（ｍａｄｅ　ｉｎ　なのはの脳内）に一人で勝手にトリップするなのは……。

更には勢い余って妄想を現実に出力（アウトプット）……アリサを押し返して猫の如く抱き付き、そのまま彼女を巻き込んで、ゴロゴロと屋上の床を転がり始める。ついでになのはの喉もまたゴロゴロと鳴っていた……。

「お兄ちゃ～～～～んｖｖｖ」スリスリｖ

「誰がお兄ちゃんだ～～～～！！」ギャーーース！

「あわ……あわわ……」オロオロ……

……最早ギャラリーも無視した珍騒動は、午後の授業のチャイムが鳴るまで続いたという……。

そんな私立聖祥大附属小学校での日常（？）の一コマであった――

――そして、

「ヘックション！！」

バ　フ　ォ　……！

「ちょっとハセヲ大丈夫？ケーキの生地に飛ばしちゃダメよ？」

「っへいへい……分かってるっての……」

小麦粉に塗（まみ）れるハセヲであった……。

「ヘックション！！！」

バ　フ　ォ　……！

2

時は移ろい、『海鳴』の夕刻――――

「ありがとうございました～」

「ふぅ、買った買った……」

街のスーパーからメタボ気味なビニール袋を両手に抱えて出て来るハセヲ。

「……すっかり遅くなっちまった……早く帰らねぇとお袋にどやされるな」

海に近いが為にカラスの代わりにカモメが空で舞う……。そんな

茜色に染まった海鳴の空を一目仰ぐと、ハセヲはボチボチと帰路に着く。

『翠屋』でのシフト時間を終えたハセヲは桃子からの『家族としての』頼みで夕飯の買出しに出ていた。両手一杯のビニール袋が互いに擦れ合って、ガサゴソと耳に障る。

「なのはも今頃は塾か……」

ここに居ない妹分に思いを馳せる辺り、ハセヲのこの日常への馴染みぶりが見て取れる。

そんな時、

「ん？」

ハセヲの鼻をくすぐる甘い香りに気が付く……鼻を吸い、それを辿ると、

「何だ……まだ残ってら……」

ハセヲの鼻はハセヲ自身に行き着いた。

嗅覚をくすぐる、バニラエッセンスが仄かに含まれた生クリームの柔らかい香り――

それに甘酸っぱいイチゴの香りがほんのりと含まれ――

普通の人間では出せない、その甘美な香りにハセヲの鼻が喜ぶ――

――

『翠屋』の様に菓子類を扱っていなければまず付かない香り……

ケーキ作りの際に、ハセヲに残った残り香だ――

「……そもそも何で俺は『翠屋』でケーキ習ってんだっけか？」

……その理由は数年前のある日、士郎が回復した後の事であった

――

――――――――――――全ては、

『いい、ハセヲ？ケーキはただ作ればいいっていうのじゃダメ！レシピ通りでもいい加減に作ってちゃお客様は喜ばないわよ！』

と、プロの魂に火が点いた様に力説した桃子が発端だ。

数年前、ハセヲが『翠屋』を任された時、美由希と共に（？）ケーキを作った事件を機に、『翠屋』はそれなりに『海鳴市』……主に奥様や女子高生達の間で（色々な意味で）話題の喫茶店となっていた。

だが、噂になっているのは『ケーキの味』では無く、飽く迄も『ケーキ作りの事実』……。更に海外でスイーツ作りの修行を経験した桃子にしてみれば、ハセヲのケーキは精々『主夫レベル』との事。そんなハセヲの腕を見兼ねて、桃子が立ち上がった……即ち、先生役を買って出た、という訳である。

無論ハセヲは、

『いや、俺別にパティシエ志望じゃねぇし……』

乗り気な訳が無かった……が、それでも現在、ハセヲがこうしてケーキ作りに勤しむ事となったのは――――、

『ハセヲ……』

『？親父？』

士郎が原因だった……。

『確かにハセヲは記憶喪失で、それどころじゃないと焦っているのは僕達もよく分かってる。けど、これは店の為と同時にお前の為でもあるんだ』

『俺の為だぁ……（親父……その単語は卑怯だよ……）？』

『記憶喪失』という言葉を聞いて、気付かれない様に眉を寄せるハセヲ。今まで誤解を解いてこなかった罪悪感（ツケ）である。

『ああ、ハセヲはきっとウチみたいな喫茶店で働いていた、だけど今日まで喫茶店の色んな仕事をして来ても記憶が戻る兆候すら無い……となるとアプローチの方法を変えるという意味でもケーキ作りを始めるのは良いと僕達は思うんだ。どうかなハセヲ？』

『（ああ、そういやそういう設定だったな……）ん～～……』

ハセヲが腕を組んで考える素振りも士郎や桃子には『ケーキ作りについての熟考』と捉えるだろう……。

そんなハセヲの心中を正しく察する事を二人には出来る筈が無かった（出来たら出来たでハセヲが困るのだが……）。

そんなハセヲの決意を促したのが――――、

『それにハセヲがケーキ作りを始めたら女の子のお客さんも増えると思うんだ。地理的に女子校も近いからそうなれば店の中も華やかになるだろうし、お客さんも増えてウチとしてもも助かるから一石二鳥……』

『貴方……ちょっと向こうで『お話』しましょっか……』

『え……も、桃子！？これは例えだ例え～～～～！！！』

……士郎の断末魔。

『……という訳でどうハセヲ？やってみない？』

『謹んでやらせて頂きます』

結果、とても良い笑顔の桃子に折れる形となったハセヲであった

――――

――そして現在に至る……。

「……思い出さなくてもよかったな……」

というより、思い出さなきゃよかったと、肌がブルリと泡立つハセヲであった……。

さっきまで嗅覚を楽しませてくれていた甘い香りが、一瞬で台無しである……。

そんな軽く鬱な気分でトボトボ歩くハセヲの足が赤信号の横断歩道で立ち止まる。それもかなり横幅の広い横断歩道だ。

ソレを渡ろうとする人混みの中、少し視線を動かせば、向かいの人混みが一望出来る先頭に立つハセヲだが、車道を飛び交う様に走る車達にその視界を邪魔される。

「（……もう車も多くなる時間帯なんだな……）」

何ら珍しい事では無い……。

車道を走る車が増減する事は毎日ある事だ。

だから、その車に別段目を奪われる要素など無い。

それ故だろうか――

「ん？」

ハセヲが『彼女』に目を奪われたのは――

向かいの人混みの先頭にポツリと立つ――

金砂の髪の少女に――――

「……？」

ハセヲはその少女から視線を外せなかった……。

それ程、彼女は目立っていた。

低めの身長から見るに、年はなのはと同じ位。
明らかに日本系では無い、腰まで伸びる美しい金髪。
その髪の左右を結わえた黒いリボン。
遠目だが、上下共に黒い服によって一層際立つ白い肌。

日本人ではまずお目に掛かれない、その外人的な、それも『美少女』と形容出来る容姿――――

それで目立たない訳が――――

♪～～～♪～～～～～……　♪～～～♪～～～～～……

青信号を知らせる気の抜ける音楽を機に、横断歩道を前にした人

混みは一斉に動き出す。

ハセヲの側も――――、『少女』の側も――――、

「（？見ない顔だな……どっかの留学生か何かか？）」

２人はお互いに歩み寄る形となり、結果、ハセヲは遠目から見た時よりもハッキリと顔が確認出来た。

だが、その顔は、数年間この『海鳴市』を歩き続けたハセヲでも初めて見る顔で――――

彼女と擦れ違う頃にその顔を比較的間近で確認――――

『――――た　℃　け　％――――』

「！！！？」

――――出来なかった……。

しようとした途端に頭に鈍い頭痛（ノイズ）が走ったのだ……！

その唐突過ぎる痛みによって、少女の顔からバッと視界から外してしまう……。

買い物袋を持ったせいで重くなった手で屈み気味な頭を支えるハ

セヲは、しかしその歩みを止めてしまう……。

「……ッ……痛ゥ……！何だ……今のは！？」

すぐに――しかし途方も無く長く感じた――その鈍痛は治まり、彼は再び面を上げる。

そして辺りを見渡すが――、

「……？」

そこは横断歩道を渡る人混みばかりで、金砂の髪の少女をもう一度見掛ける事は叶わなかった――

「（……何だったんだ……今のは？）」

だが、（残念な事に）今のハセヲにとって、物事の優先順位は『謎の頭痛（ノイズ）』であった――

――

――

――

頭を抱える彼が『運命』に気付くのは、もう少しだけ、先の事……。

第2話　『終わり告げし　非日常への　鐘』前編　（11／28　加筆）（後書

まだまだほのぼの？としていますが、日常が壊れる日は近いのです！

最近自分の小説の誤字脱字の調査をしてると、たまにストーリーに関わる誤字を発見してしまいます……；読者の皆さんも読んでる最中『あれ？』と思った事は報告して下さるとありがたいですｍ（＿）ｍ

第3話　『終わり告げし　非日常への　鐘』中編（前書き）

こんばんは
劇場版なのはを見てプロット練り直していたヌエマルです。
更新の遅滞の言い訳はいくらでも思いつきますが、とりあえず毎度毎度スミマセン……。

まだまだ戦闘シーンには行き着きませんが、頑張ります。

P．S．
前話で加筆した部分があるので、先にそちらを読む事を推奨します。
回りくどい真似をしてスミマセン……。

それから、なのはA'ｓ映画化＆A'ｓゲーム化第2弾制作決定おめでとう！！

第3話　『終わり告げし　非日常への　鐘』中編

茜に染まった夕暮れの空――――

潮が香り、カモメ鳴く『海鳴公園』――――

そんな時間、そんな場所に――――

「全くもう……」

「ひうぅ……；」

「あわわ……；」

下校中のなのは達は居た……。

「イタタ、まだ痛い……ひどいよ〜〜アリサちゃん……」

「うっさい！自業自得でしょ！」

プリプリと怒りながら先を歩くアリサに縋り付くのは、頭に立派なタンコブを携えたなのは……。

一方のすずかはそんな二人に如何すればいいのか分からず、一人オロオロしている。

「う〜〜……、だからって叩かなくても……」

「そうしないと戻って来なかったでしょアンタ！将来のビジョン妄

想して暴走って、どんだけ想像力逞しいのよアンタは！」

おかげでとんだ赤っ恥晒しちゃったじゃない！と顔を紅くするアリサ。

「にゃはは、それ程でも……／／／“ムニィ～～……”イヒャヒャ！！」

「誉めてないっつ～～～のぉ！」

ヘラヘラと笑うなのはの両頬を「まだ懲りないかアンタは！」と怒鳴りながら抓るアリサだが、

「ア、アリサちゃん！もう止めようよ！ココもう公園で人も見てるし……ね……」

すずかの慌てふためきながらの制止に「ホントに全く……」と渋々両手を離す。解放されたなのはは被害を受けて若干赤みを帯びた両頬を涙目になりながら擦っている……。

「イタタ……ありがと、すずかちゃん……」

「大丈夫なのはちゃん？」

「うん！抓まれるのはハセヲお兄ちゃんのおかげで慣れっこだから！」

「そ……そう……；」

「いや、それはそれで問題じゃないの？」

学校での授業を終えた仲良し3人組は小学生のガールズトークに花を咲かせながら、テクテクと下校中……その足で今日予定していた塾に向かっている。
やはり小学生も学生の端くれ……その本分は『勉強』である。

そんな中で、トークの内容は、なのはの一言を皮切りに『なのはのお兄さんについて』にシフトしていった。

「そういえばなのは、そのお兄さんは今日何してるのよ？」

「え？う～んと確か……今日は『翠屋』の手伝いって聞いたけど……何でアリサちゃん？」

「ふ～んそっか……いやね、なのはから聞いたあの居候お兄さんが、なのはの家にグータラ入り浸ってんのかな～って思ってね……親友としてそんな事してたらガツンと言いに行ってやろうかなって思っただけよ」

「む～～！アリサちゃん！ハセヲお兄ちゃんはそんな事する人じゃないよ！確かにお兄ちゃんは目付き悪いし喋り方も悪いし、あ、あと愛想も悪いけど、お店のお手伝いだってしてくれるし、いつも私を朝バスまで送ってくれたりしてくれる優しいお兄ちゃんなんだよ！」

「そ、そう；……まあ、何も無いなら、別に良いんだけどさ……」

なのはの兄自慢（？）の力説に気圧され、口ごもるアリサ。
本当は『ハセヲには記憶探しで忙しい（嘘）』という特殊な事情

があったのだが、なのははこの事をアリサとすずかには話していなかった。話さなければいけない事でも無いし、何よりハセヲに都合が悪いのではないかという懸念から来た、なのはの一抹の気遣いである。

「でも、なのはちゃんの所のお兄さんって、二人共優しいよね」

そんな中、オロオロばかりしていたすずかがトークに加わってくる。

「恭也さんはお姉ちゃんと仲良いし、ハセヲさんはちょっと顔恐いけど、私達が『翠屋』に来た時は必ず声を掛けてくれるし、少し前にはアリサちゃんと悪い人に絡まれてた時に助けて貰ったし、スッゴク良い人だよね！」

「う……そ、そういえば……そんな事もあったわね……」

すずかの体験談に心当たりがあるのか、先程までハセヲに対して碌な事を言わなかったアリサは居心地悪そうに顔を逸らす……。

「それにね！ハセヲさんって、ウチの猫達に大人気なんだよ！この間皆をウチに招待した時だって、ノエルさんやファリンさんと一緒に猫達のお世話もしてくれたんだし！」

「あ～そういえばそんな事もあったっけ……けどあれは、『お世話をしてくれた』っていうより……」

せざるを得なくなったっていうか……とアリサは二人に聞こえない様に呟く……。

すずかの思い出話を聞いて、その出来事を回想するアリサ。その

水平線の向こうを見つめる遠い目には何処かこの場に居ない年配者への哀れみが込められていたとか、いなかったとか……。
すずかの言う、『ハセヲの猫のお世話』に関してはまたの機会で語るとしよう……機会があれば……。

「はぁ……やっぱりハセヲお兄ちゃんって凄いな～～……
それに引き換え、私って……；」

「な、なのはちゃん……？」

自分の自慢の兄の話が出来るのは、なのはとしても楽しいし、何より親友と話題を共有出来るのだから尚更の筈だ。
……が、同時に話せば話す程、自分と兄の差の大きさを思い知る事となってしまう……。
なのはは再び意気消沈し掛けるが――――、

「あ～～も～～アンタはまた～～！まだゲンコツが足んない！？」

「にゃ！も、もう十分だよ！」

――――そうは問屋が卸さない。アリサが脅し半分に拳を振り上げて、なのはを諌める。

「大体なのは！自分のお兄さんと自分を比べるのはアンタの勝手だけどね、そのお兄さんを目標に頑張ってみようって思わないワケ！？」

「ふえっ！？も、目標？！」

「そうよ！あの居候お兄さんがそんなに凄いって思うなら、あの人

の真似なり何なりして自分を磨いたりするって発想が思い浮かばないのアンタは！？」

将来の事悩むのはその後くらいにしなさいよね全く！そう言い残すとアリサは足早に先へ進む。

腰に手を当ててフッと溜め息をつくアリサは、まるで世話の掛かる妹を気にかける姉の様だった。

「？？？？？」

なのはは頭一杯に疑問符を浮かべる……。それはそうだ。先程まで『居候』だの『フリーター』だの、ハセヲに対して碌な事言わなかったアリサなら――――、

『アンタはあんなフリーターみたいになっちゃダメよ！』

――――なんて言うと思ったのに、実際は逆に『彼を見習え！』みたいな事を言うのだから、訳が分からなくなって当然だ。

そんなアリサの背中を見つめるなのはに、すずかはこっそりと耳打ちする。

「（あんまり気を悪くしないでね、なのはちゃん……。アリサちゃんはただ素直じゃないだけだから……）」

「（え……すずかちゃん、それって……？）」

「（……アリサちゃんはね、言い方は悪いだけど、ホントはなのはちゃんの事が大好きだし、ハセヲさんが良い人だって事もちゃんと知ってるから、ね♪）」

勿論私もだよ♪と付け加えると、すずかは顔をなのはの耳元から離し、ニコニコとなのはに微笑む。そんな彼女の言葉を聞いて、なのはの顔もパッと明るくなる。
そんなすずかの笑顔が少しばかり紅潮している様に見えたのは、西の海に沈む茜色の夕日のせいだったのだろうか……。

「なのは～～、すずか～～！何やってんのよ～～置いてくよ～～！」

一人先に進んでいたアリサからの呼び声にすずかとなのはが向き直り、「うん、今行く～～！」と声を揃えて返事を返す。

「行こ、なのはちゃん」

「うん！」

すずかに促され、なのはも彼女の足早な歩調に合わせ、少し向こうで大手を振って待っているアリサの元へ向かって走り出した――

――

「こっちこっち！この道通ると塾へ行くの近道なんだ」

「ッ……～～～～ッッ……ッ！」

『海鳴公園』の外周部、その歩道でハセヲは苦悶の表情で頭を抱えてながら歩いていた……。

「〜〜ッくそっ！まだグラグラしやがる……」

あの金砂の少女と擦れ違った時、突如自分に襲い掛かって来た頭痛……その鈍い痛みは既に無いが、未だ残るその余韻が、ハセヲが片手で買い物袋を負担し、空いた手で頭を抱える原因となっていた。

「っかし〜なぁ……風邪でも引いたか……？」

別に寒いカッコなんかしてねぇんだけど……と、心当たりの無い事に疑問符を浮かべるハセヲだが、帰ったら一応風邪薬を飲んでおくかと念を入れる。

そう思うと、ハセヲは足を速め、帰宅を急ごうとした――――

……急ごうとしたのだが――――、

『――――　※　Å　け　$　――――』

「ぐッ……！！？」

――――駆け出そうとした矢先にその足は縺れる様に減速し、ソレはハセヲに再び襲い掛かる――――！

「ぁ……くッ……また……ッッ……！！」

既視感のある……しかも極めて不快な……頭の鈍痛……。

しかし、その痛みは、数刻前のソレよりも遥かに強烈に感じた……。

その感覚は思い違いか、それとも本当にそうだったのか……。

だが――――、

「痛ッ……クッ！！」

そんな違いを瑣末と言わんばかりにハセヲの身体はガクリと崩れる……。

頭の痛覚に意識を持って行かれ、足を含む全身の力が弛緩しそうになる……。

辛うじて手を伸ばして掴んだガードレールのおかげで路上に倒れるという事態は免れるも、思いの外体力が攫われ、ハァハァと息が上がる……。

「ハァ……ハァ……くそっ……何なんだよ……！」

ガードレールの向こうの車道を走る車の音も排気ガスの臭いも気にならない……気にしてられない……。

気にできる程気が回らない……。

ただハセヲに出来るのは、訳の分からない頭痛に悪態ついて自分を保つ事しか無かった……。

……

……

……

……

ある程度時間が経った後、ようやく治まって来たのか、土気色になり掛けていたハセヲの顔色もある程度の血の気を取り戻していた。

フゥ……とハセヲは一息入れると、額の汗を拭いながらガードレールから身を離し、再び歩き出す……。今度は急がず、焦らず、ゆっくりといった歩調で、頭への振動に気を使いながら帰路に着く。

「……こりゃホントに風邪か……？」

流石のハセヲも二度の……しかもさっきよりも激しくなった頭痛を経て、本気で体調が気になり始めた。

だが――――、

「あれ！？ハセヲお兄ちゃん！？」

「あ……？」

――――背後からの聞き慣れた妹の声に振り向かざるを得なかった。

第3話　『終わり告げし　非日常への　鐘』中編（後書き）

アリサのフラグは微妙な位がちょうどいいかな？と判断した結果、こうなりました……。批評は受け付けます。
本当は動物病院のくだりまで行きたかったんですけど、長過ぎになる為、分割しました……；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0162m/

.hack//G.U.　魔法少女は黄昏に立ち会う

2011年10月7日00時10分発行